山形県埋蔵文化財センター調査報告書第７集

今塚遺跡
発掘調査報告書

1994

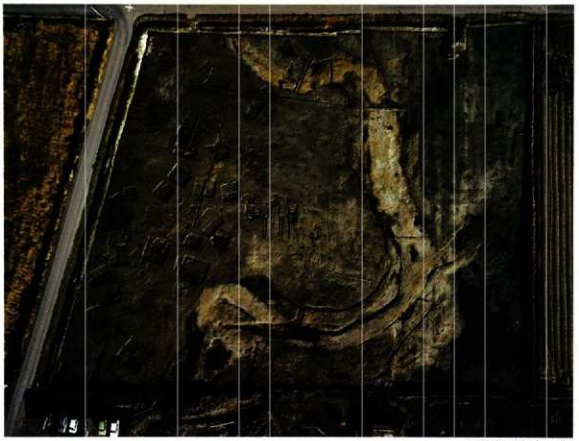
財団法人　山形県埋蔵文化財センター

今塚（いまづか）遺跡

発掘調査報告書

平成６年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター



C調査区空中写真

A調査区空中写真

ＳＴ５出土遺物

ＳＴ702出土遺物

人面墨書土器

SD625出土遺物

序

本書は，財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した，今塚遺跡の調査成果をまとめたものです。

今塚遺跡は山形県の内陸部に位置する山形市大字今塚にあります。本遺跡のある山形市北西部は県下でも屈指の穀倉地帯で，反収の多い実り豊かな地域であります。また，この地は県内でも最も早い段階に稲作文化が定着したことが，国指定史跡「嶋遺跡」をはじめとする数多くの遺跡の存在によって窺い知ることができます。

調査では古墳時代前期の竪穴式住居・畝状遺構，平安時代前期の掘立柱建物跡・井戸跡・土壙などが検出され，土器や木製品など当時の生活を物語る貴重な資料を得ることができました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し，さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方，平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年，高速自動車道やバイパス，農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが，これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は，埋蔵文化財保護と開発事業実施のため，適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ，平成５年４月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同，県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜わりたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及，学術研究，教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが，調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成６年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　場　清　耕

例　言

1　本書は，山形県住宅供給公社による宅地造成及び分譲住宅建設に係る「今塚遺跡」の緊急発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は山形県住宅供給公社の委託により財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺跡名　今塚遺跡（ＣＹＧＩＺ）　遺跡番号136
所在地　山形県山形市大字今塚
調査期間　発掘調査　平成５年４月１日～平成６年３月31日
現地調査　平成５年５月31日～平成５年11月12日　110日間
調査主体　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
発掘調査担当
調査研究課長　佐々木洋治
主任調査研究員　野尻　侃
調査研究員　須賀井新人　植松　暁彦
資料整理担当
調査研究課長　佐々木洋治
調査研究員　須賀井新人　植松　暁彦
嘱託職員　黒坂　広美

4　発掘調査及び本書を作成するに当たり，山形県住宅供給公社，山形市教育委員会の協力を得た。現地調査と報告書作成に当たって，柏倉亮吉氏（山形県文化財保護審議委員会会長），阿子島　功氏（山形大学教育学部），平川　南氏（国立歴史民俗博物館）からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

5　本書の作成・執筆は，須賀井新人，植松暁彦，黒坂広美が担当した。編集は安部　実，伊藤邦弘が担当し，全体については佐々木洋治が監修した。

6　出土遺物，調査記録類については，財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＴ……竪穴住居跡	ＳＢ……掘立柱建物跡	ＳＥ……井戸跡
ＳＫ……土　壙	ＳＧ……河川跡	ＳＤ……溝跡・畝状遺構
ＳＸ……性格不明遺構	ＥＢ……柱　跡	ＥＫ……住居跡内土壙
ＥＬ……炉跡・焼土	ＲＰ……完形・一括土器	Ｓ……礫　Ｗ……木材

2　遺構番号は，現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3　土層観察においては，遺跡を覆う基本層序をローマ数字（Ⅰ～Ⅲ）で表し，遺構の埋積土等については「Ｆ」に算用数字を付して区別した。また，「Ｇ」はグリッドの略記である。

4　報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1) 調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

(2) グリッドの南北軸は，Ｎ－11°40′－Ｅを測る。

(3) 遺構実測図は，1/30・1/40・1/50・1/60・1/80・1/100・1/120・1/160・1/600縮尺で採録し，各々にスケールを付した。

(4) 本文中の遺物番号は，遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。

(5) 遺物実測図・拓影図は1/3・1/4・1/6縮尺で採録し，各々にスケールを付した。遺物図版は1/3で採録し，一部1/4縮尺のものについては，（　）内に明示した。

(6) 土器実測図・拓影図の断面では，遺物番号の前に●印があるものは須恵器を，○印は赤焼土器，無印のものは土師器を表している。なお，古式土師器のうち内外面に網点（淡）をかけたものは，朱塗りの箇所を表している。また，内面右側もしくは外面左側に網点（濃）をかけた土師器は，黒色処理していることを表す。

(7) 土器拓影図で断面の右側拓本は器裏面，左側拓本は器表面である。

(8) 遺物観察表中にある「計測値」欄の（　）内の数値は，図上復元による推定値または残存長を示している。

(9) 遺構覆土の色調の記載については，1987年版の農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経過……1
　2　調査の方法と経過……1
Ⅱ　遺跡の概観
　1　立地と自然環境……3
　2　周辺の遺跡……4
　3　遺構と遺物の分布……9
Ⅲ　遺構と遺物
　1　竪穴住居跡……10
　2　掘立柱建物跡……33
　3　井戸跡……39
　4　土　壙……42
　5　河川跡……44
　6　溝　跡……50
　7　畝状遺構・その他……62
Ⅳ　まとめと考察
　1　遺構の変遷と性格……69
　2　古式土師器の分類……72
附編1　「今塚遺跡資料理科学的分析報告」……77
　2　「今塚遺跡出土木簡の解説」……81
報告書抄録……82

表

表1　調査工程表……2
表2　竪穴住居跡観察表(1)……29
表3　竪穴住居跡観察表(2)……30
表4　竪穴住居跡観察表(3)……31
表5　竪穴住居跡観察表(4)……32
表6　掘立柱建物跡観察表……38
表7　遺物観察表(1)……64
表8　遺物観察表(2)……65
表9　遺物観察表(3)……66
表10　遺物観察表(4)……67
表11　遺物観察表(5)……68

挿　図

第１図　地形面区分図……3
第２図　遺跡位置図（S＝1：25,000）…5
第３図　調査区概要図……6
第４図　遺構配置図……7
第５図　ST５竪穴住居跡・畝状遺構…12
第６図　ST５出土遺物(1)……13
第７図　ST５出土遺物(2)……14
第８図　ST７竪穴住居跡……14
第９図　ST７出土遺物……15
第10図　ST８竪穴住居跡……15
第11図　ST８出土遺物……16
第12図　ST14・15竪穴住居跡……16
第13図　ST702竪穴住居跡……17
第14図　ST702出土遺物(1)……18
第15図　ST702出土遺物(2)……19
第16図　ST702出土遺物(3)……20
第17図　ST708竪穴住居跡……21
第18図　ST708出土遺物(1)……22
第19図　ST708出土遺物(2)……23
第20図　ST711竪穴住居跡……24
第21図　ST711出土遺物……24
第22図　ST709竪穴住居跡……25
第23図　ST714竪穴住居跡……25
第24図　SX141遺構……26
第25図　SX163・165遺構……26
第26図　SX141・143，ST17・164・701
・709出土遺物……27
第27図　SX165出土遺物……28
第28図　竪穴住居跡主軸方位と
長軸一覧……32
第29図　SB１掘立柱建物跡……33
第30図　SB２掘立柱建物跡……34
第31図　SB３掘立柱建物跡……35
第32図　SB６掘立柱建物跡……36
第33図　SB716～718掘立柱建物跡…37
第34図　SE181出土遺物……39
第35図　SE181・906井戸跡……40
第36図　SE181井戸枠……41
第37図　土壙出土遺物……42
第38図　SK22・40・78・148・475・477
・903・905・912土壙……43
第39図　SG200河川跡断面図……44
第40図　SG200河川跡木組……45
第41図　SG200河川跡出土遺物(1)…46
第42図　SG200河川跡出土遺物(2)…47
第43図　SG200河川跡出土遺物(3)…48
第44図　SG200河川跡出土遺物(4)…49
第45図　SD377溝跡(1)……51
第46図　SD377溝跡(2)……52
第47図　SD377出土遺物(1)……53
第48図　SD377出土遺物(2)……54
第49図　SD377出土遺物(3)……55
第50図　SD625溝跡……56
第51図　SD625溝跡出土遺物(1)……57
第52図　SD625溝跡出土遺物(2)……58
第53図　SD625溝跡出土遺物(3)……59
第54図　SD625溝跡出土遺物(4)……60
第55図　SD625溝跡出土遺物(5)……61
第56図　C区検出畝状遺構……62
第57図　SD640・669，
包含層出土遺物……63
第58図　土師器分類・集成図(1)……70
第59図　土師器分類・集成図(2)……71
第60図　墨書文字・記号集成……73

図　版

図版1　調査区遠景他
図版2　A区北半部面整理作業他
図版3　A区中央部遺構検出状況他
図版4　B区北半部完掘状況他
図版5　C区北，中央部遺構検出状況他
図版6　35－35G盤下げ状況他
図版7　ST7炭化材，遺物出土状況他
図版8　ST8土層断面他
図版9　ST14，15検出状況他
図版10　ST702炭化材，遺物出土状況他
図版11　ST702検出状況他
図版12　ST703検出状況他
図版13　ST708炭化材，遺物出土状況他
図版14　ST710完掘状況他
図版15　ST164土層断面他
図版16　SB1完掘状況他
図版17　SB2検出状況他
図版18　SB6完掘状況他
図版19　SB716～718検出状況他
図版20　SB716EB1半截状況他
図版21　SE181半截状況他
図版22　SE181完掘状況他
図版23　SK40土層断面他
図版24　SG200検出状況他
図版25　SG200東半部土層断面他
図版26　SD377遺物出土状況他
図版27　SD625一括遺物出土状況他
図版28　SK78土層断面他
図版29　B区排水路検出状況他
図版30　出土遺物(1)
図版31　出土遺物(2)
図版32　出土遺物(3)
図版33　出土遺物(4)
図版34　出土遺物(5)
図版35　出土遺物(6)
図版36　出土遺物(7)
図版37　出土遺物(8)
図版38　出土遺物(9)
図版39　出土遺物(10)
図版40　出土遺物(11)
図版41　出土遺物(12)
図版42　出土遺物(13)
図版43　出土遺物(14)
図版44　出土遺物(15)
図版45　出土遺物(16)
図版46　出土遺物(17)
図版47　出土遺物(18)
図版48　出土遺物(19)
図版49　出土遺物(20)
図版50　出土遺物(21)
図版51　出土遺物(22)

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

今塚遺跡は，今塚集落南西部の水田に立地し，以前に採集された石包丁から弥生時代後期に位置付けられてきた遺跡である。また，水田耕作時に柱や土器が出土した例が知られている。昭和53年に発行された「山形県遺跡地図」には遺跡番号136番として記載・登録され，一般に周知されるようになった。

当該地に，山形県土木部住宅課・山形県住宅供給公社による宅地造成及び分譲住宅建設事業の開発候補地として，遺跡にかかる今塚地区があげられたのは平成３年度のことである。これを受けた山形県教育委員会では，遺跡の存在を確認する表面踏査を同年11月に行い，さらに12月には，遺跡の規模や性格等を把握するための試掘調査を実施した。その結果，44箇所設定した試掘溝のうち，５箇所から土壙・柱穴などの遺構が，23箇所から土師器・須恵器・赤焼土器などの遺物が出土した。これら遺構・遺物の分布は集落寄りに集中して見られ，南へ行くほど地盤が下がり泥炭質の土壌になることから，遺跡の範囲は現在の宅地を含む北側に広がっていることが推測される。

これらの資料をもとに，県住宅供給公社や山形市教育委員会の関係機関と遺跡の取り扱いについて協議を重ね，事業に先行して記録保存を図ることを目的に，今年度新設された財団法人山形県埋蔵文化財センターが主体となって，今回の緊急発掘調査を実施する運びになったものである。

2　調査の方法と経過

今塚遺跡の現地調査は，平成５年５月31日から11月12日までの延べ110日間である。平成３年の12月に行われた試掘調査の結果を基に，今塚地区の南西部に広がる水田を対象として調査区を設定した。調査面積は，遺跡範囲の南半部にあたる14,200㎡である。

グリッドの設定は，Ａ区とＣ区の間の畦畔杭を結び基準とし，Ｘ軸（東西軸）－40，Ｙ軸（南北軸）－40とし，第２象現の座標で５ｍ方眼のメッシュを調査区全域に被せた。南北軸は，Ｎ－11°40′－Ｅを測る。標高は，月山神社の南西にある水準点（102.614m）を基準にした。調査区は，Ａ区（6,700㎡），Ｂ区（2,640㎡），Ｃ区（4,860㎡）に分かれ，排土置き場の都合上，調査後は順にそれぞれを埋めもどす方法を採った。

始めに１×５ｍのトレンチ調査を行い，各地区の遺構・遺物検出面までの深さを把握した。次いで，各区とも重機により表土の除去を行い，面整理を実施した。遺構検出後に掘り下げを実施し，断面観察や遺物出土状況等の記録を行った。

調査の工程及び経過は以下のとおりである。（表１）

５月31日～７月２日

31日に機材搬入，鍬入式。６月１日よりトレンチ調査開始。７日より15日までＡ区・Ｂ区について，重機により表土除去実施。並行しながらＡ区面整理作業，グリッド杭を設定。包含層からは主に平安時代の遺物が出土。遺構はＳＢ１・ＳＧ200・ＳＥ181を検出。Ａ区

南半部の土質は泥炭質である。北半部のグライ化粘質土層中より古式土師器出土。

7月5日～8月6日

A区遺構配置図作成。遺構番号記載登録。標高基準杭の設定。SB2・3・4を検出，精査。河川跡のトレンチ調査を実施，F1層より平安時代の多数の土器出土。河床まで2mを測り，覆土は粘質土と粗砂の互層。下層より古墳時代の土師器片や加工痕のある木製品が出土。SD377検出及び精査，平安期の墨書土器多数出土。

8月9日～9月3日

B区面整理作業，遺構精査。26日に写真実測委託業務実施。27日には第1回調査説明会を開催。A区北東半部についてトレンチ調査を行い，下層面よりST5を検出。3日，重機による河川跡トレンチの埋め戻し作業。C区の表土除去実施。

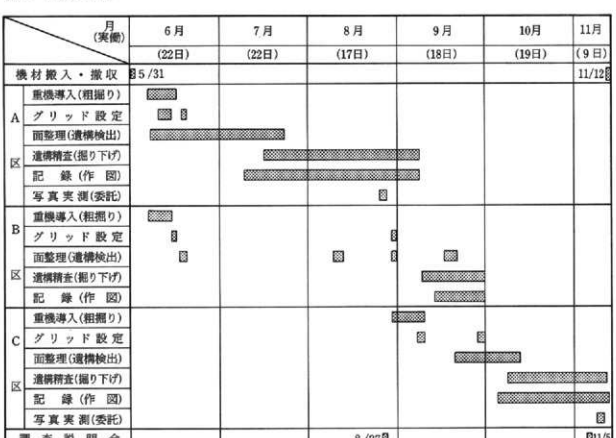
9月6日～10月8日

B区検出SD625精査，平安時代の墨書土器多数が出土。耕地整理前の旧排水路についてトレンチ調査を実施。記録作業を経て，B区の調査を終了。C区はグリッド杭設定後，面整理作業を実施。竪穴住居跡多数検出。

10月12日～11月12日

C区において古墳時代の竪穴住居跡30軒，平安時代の掘立柱建物跡4棟などの精査・記録。5日，第2回調査説明会開催。8・9日，写真実測委託業務実施後，重機による埋め戻し作業。12日に機材撤収，発掘調査を終了する。

表1　調査工程表

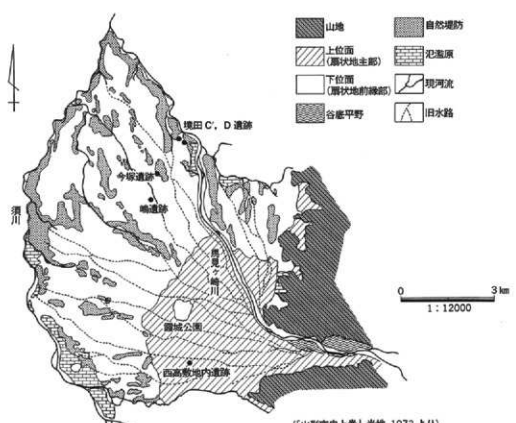


II 遺跡の概観

1 立地と自然環境（第1図）

今塚遺跡は，山形市街の北方約3km，山形市大字今塚地区に所在する。遺跡の範囲は，集落南西部を一部含む水田地帯に広がり，標高は102.8mを測る。地形的には馬見ヶ崎川扇状地の前縁部にあたり，湧水帯に位置する。遺跡の東側を北流する馬見ヶ崎川や，調査区内でも検出された馬見ヶ崎川の旧支流の氾濫によって形成された自然堤防上に立地する。本遺跡周辺の遺跡群も同様に湧水帯上に立地しており，河川の自然堤防という安定した堆積土壌を基盤として集落が形成されたことが理解される。また，調査区の南側に向かうにつれ徐々に基盤層が下がり，土質は泥炭質に変わる。したがって，この付近一帯は自然堤防の後背湿地に当たると予測される。

自然堤防がどの程度安定していたかは，今塚遺跡が，古墳時代前期（4世紀）及び平安時代（9～10世紀）の複合遺跡にも拘らず，検出面は地表下50cm未満のほぼ同じレベルで確認されることから，4世紀以降，自然堤防を埋没させるような自然堆積は少ないと考えられる。旧河川跡の土層断面からは，二度に亘る洪水の痕跡が認められ氾濫した様相が窺えるものの，居住地となった自然堤防上は，かなり安定していたと考えられる。これは，馬見ヶ崎川が運ぶ砂礫が扇状地扇端部で止まり，今塚遺跡の扇状地前縁部では堆積が少なかったと推定され，近接する境田遺跡でも同様な事が窺えるからである。



（「山形市史上巻」米地 1973より）

第1図 地形面区分図

2 周辺の遺跡（第2図）

本遺跡周辺の遺跡は，馬見ケ崎川扇状地が形成する沖積平野の，より安定した自然堤防上の微高地に多くが存在する。これらの遺跡は，低湿地を利用した湿田経営に伴う平野部への進出という形で縄文時代より点在し，現在に至るまで連綿と引き継がれていく。

昭和51年から平成4年までの間，5次に亘る発掘調査が行われた山形西高敷地内遺跡は，縄文時代中期・晩期，弥生時代後期～古墳時代前期，及び奈良・平安時代まで各層位毎に遺跡が確認される，県内でも有数な密集度の高い複合遺跡である。

古墳時代の遺跡は，東北横断自動車道酒田線の建設に伴って，昭和57年と58年の2カ年に亘り発掘調査が行われたお花山古墳群がある。本遺跡の東約4kmに位置し，調査区内からは木棺，石棺，箱型石棺をもつ24基の古墳が検出されている。時期的には，5世紀末葉から7世紀前半と位置づけられる。副葬品とされる遺物は，摸文鏡，乳文鏡，刀，管玉，ガラス小玉，櫛，土師器，須恵器，鉄鏃などが出土した。

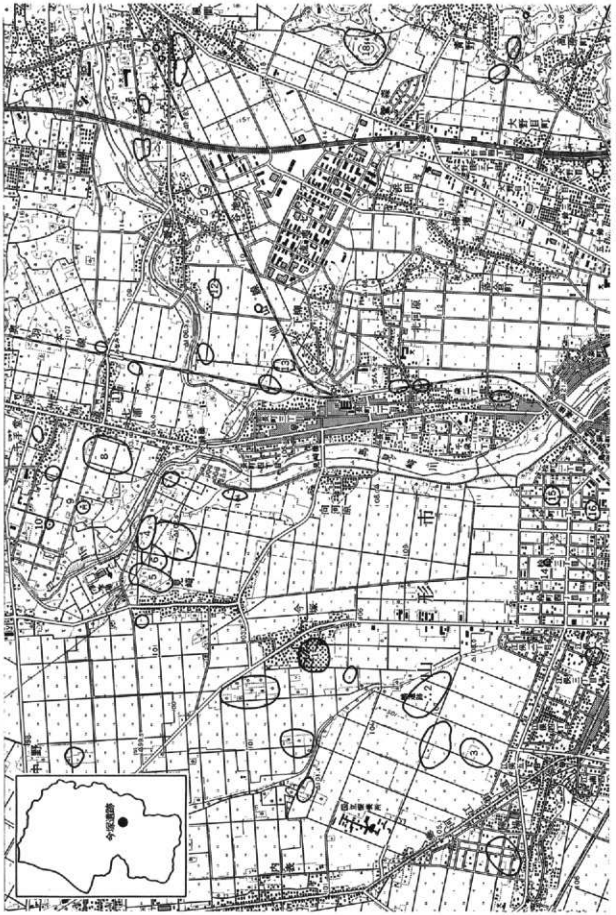
国指定史跡の「嶋遺跡」は，古墳時代の農耕集落として著名である。嶋遺跡は，本遺跡の南西約800mに位置し，昭和37～39年にかけて6次に亘る発掘調査が行われ，住居跡3棟，倉庫跡3棟が確認された他，多数の柱根，杭，建築材が検出されている。遺物は，6～7世紀代に属する東北南半の「引田～栗囲式」に対比する土師器が出土している。木製品では，はしご・たてきね・つち・柄杓・つりかぎ・櫛の生活用品，鍬鋤・手鋤・田下駄・紡織機の生産用具，弓・矢・鞆絵の武具等，低湿地という立地環境に依拠する多くの遺物が出土した。他にも，管玉耳飾等の石製品がある。

奈良・平安時代では，自然堤防上に立地したとみられる遺跡が多くなり，特に白川左岸には，境田A・B・C・C′・D，見崎，天神，新井田の各遺跡が鈴なりに存在する。上流部の高瀬川左岸にも，一本木A・B，寺西の各遺跡が近接して存在している。これら遺跡の点在は，平安時代に入いり後背湿地を利用した水田経営が一段と安定したことを窺わせる。当該期の集落遺跡としては，昭和56・57年に発掘調査が行われ9世紀中葉から10世紀末に比定される境田C・C′・D遺跡が，本遺跡の北北東約1.3kmに位置する。C遺跡では，5棟の掘立柱建物跡及び井戸跡・土壙で構成される集落跡が確認され，またD遺跡では検出された大溝から土師器，須恵器，赤焼土器など380個体以上が出土し，そのうち50点以上に墨書土器が認められる。

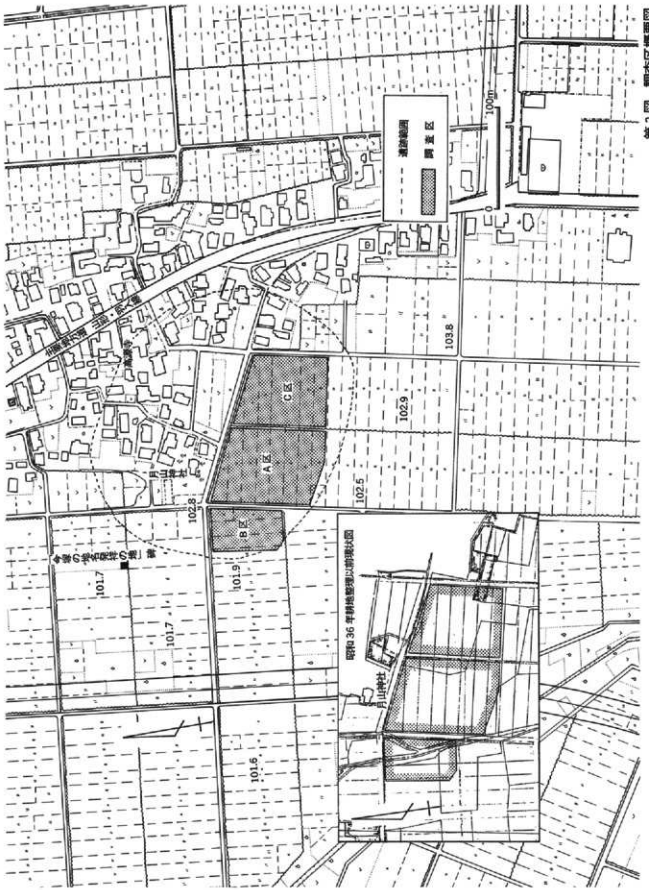
遺跡名一覧（第2図）

	遺跡名	時代	種別		遺跡名	時代	種別
1	今塚	古墳～平安	集落跡	10	狐山2号墳	古墳	古墳
2	嶋	古墳～奈良	集落跡	11	五反	古墳	集落跡
3	梅野木前2	古墳～平安	集落跡	12	下柳A	古墳	集落跡
4	境田B	奈良～平安	集落跡	13	白山堂前	古墳	墳墓
5	境田C	縄文～平安	集落跡	14	宮町古墳	古墳	古墳
6	境田C′	縄文～平安	集落跡	15	検聚ノ木	古墳	集落跡
7	境田D	縄文～平安	集落跡	16	河原田	古墳	集落跡
8	七浦	弥生・古墳	集落跡	17	間所免古墳	古墳	古墳
9	狐山古墳	古墳	古墳	18	お花山古墳群	弥生・古墳・平安	古墳

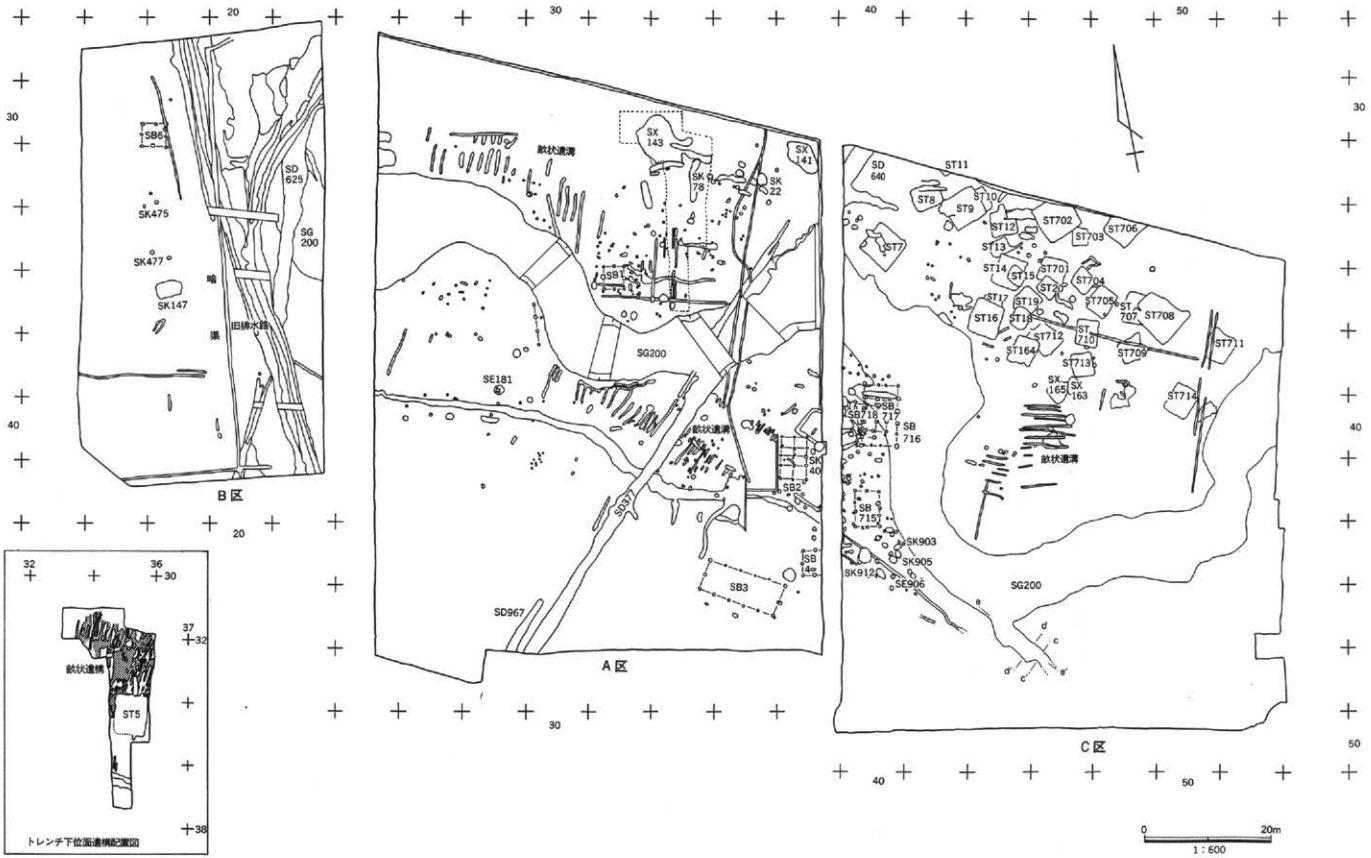
※嶋遺跡は，国指定史跡。



第2図　遺跡位置図（S＝1：25,000）


遺跡範囲
調査区
100m
103.8
102.9
102.5
102.8
101.9
101.7
101.6
A区
B区
C区
月山神社
昭和36年耕地整理以前現状図

第3図　調査区概要図


B区
A区
C区
SB6
SK475
SK477
SK147
SD 625
SG 200
暗
渠
旧排水路
SX 143
SK 78
SK 22
SX 141
SB1
SG200
SE181
SD377
SD967
SB3
SB2
SK 40
SB 14
SD 640
ST11
ST8
ST9
ST10
ST12
ST702
ST703
ST706
ST7
ST13
ST14
ST15
ST701
ST20
ST704
ST17
ST19
ST705
ST 707
ST708
ST16
ST18
ST712
ST 710
ST711
ST164
ST709
ST713
SX 165
SX 163
ST714
SB718
SB 717
SB 716
SB 715
SK903
SK905
SK912
SE906
SG200
0
20m
1：600
32
36
30
37
32
38
ST5
トレンチ下位面遺構配置図

第4図　遺溝配置図

3 遺構と遺物の分布（第4図）

調査で検出された遺構は竪穴住居跡30軒，掘立柱建物跡9棟，井戸跡2基，土壙53基，河川跡1条，溝跡・畝状遺構が257条，ピット約400基，性格不明遺構27基などで，登録した数は760を越える。これらの遺構は，時期的に古墳時代・平安時代・近代の3大別が可能である。

このうち，各調査区のほぼ中央部を大きく蛇行しながら東西方向に走る河川跡は，河床部では古式土師器を包含することから，河道が形成された時期は4世紀以前にもとめることができる。その後，洪水による氾濫で多量の砂が運ばれ厚く堆積して，徐々に川幅を縮めていったものと判断される。調査で検出した河川確認面の土壌は黒色土と粗砂であり，平安時代の遺物を含む黒色土層部が，埋没前最終の河道であったことが窺われる。

古墳時代には，検出し得た全ての竪穴住居跡が主体であり，畑跡と考えられる畝状遺構群がこれに付随する。その範囲は，A区北東部及びC区北半部の河川跡右岸に限定され，調査区外北東部へ広がることは明白である。この地域は，調査内でも検出面の標高が最も高く，安定した地山の上に集落を構築した意図が窺い知れる。平安時代の遺構群は掘立柱建物跡が主体で，調査区からこの時期の竪穴住居跡は確認されない。これに付随するものとして井戸跡や円形土壙が配される。さらに，A区検出のSD377やB区のSD625，C区北西隅検出のSD640といった溝跡は，出土遺物からこれらと同時期に対比される。これらの遺構群は，古墳期の遺構配置とは対称的に，河川跡の左岸部を中心として分布する傾向が指摘できよう。前述の溝跡が河川跡を切ること，SB716～718の重複する建物跡が河川跡の粗砂層を掘り込んでいること，そしてA区では，SB1を含む当該期の遺構群が河川跡北側にも分布していることなどから，遺構構築期にある程度の幅は生じるものの，集落形成段階において河川跡は埋没直前か，すでにその機能を失っていたものと判断できる。B区を磁北に平行して北走する溝跡群は，昭和37年の耕地整理前まで使われていた排水路跡である。以上のような遺構の分布状況から，概括的には河川跡を境に北側で古墳時代，南・西側で平安時代の集落跡が形成されたと言えるであろう。

出土した遺物は大半が土器であるが，遺跡周辺は地下水位が高く涌水に恵まれた立地条件から，木製品の遺存状態が比較的良好な点が特徴である。時期別に，古墳時代では古式土師器を主体に，小型土器や手捏土製品，碧玉製管玉や砥石，河床部出土の木製品がある。平安時代では土師器（煮沸形態），須恵器（供膳・貯蔵形態），赤焼土器（供膳・煮沸形態），黒色土器（供膳・煮沸形態）を主体とし，木簡や紡織機などの木製品，硯や紡錘車の石製品，自然遺物等が出土している。

これら遺物の遺構毎の出土状況は，竪穴住居跡ではST702・708等の焼失家屋や住居内土壙を有するST711，河川堆積層に覆われたST5などが量的・質的にも多い。平安期の遺物の大半を包含するのは，SD377・625の溝跡及びA区SG200の黒色土層中である。グリッド単位の出土傾向では，A区東半部，B区東半部，C区北半部に量的なまとまりが見られ，遺構分布との相関が強いと理解される。

III 遺構と遺物

1 竪穴住居跡（第5～28図，表2～5，図版6～15・30）

調査で検出された竪穴住居跡は30軒であり，全て古墳時代に帰属する。平面形は，規模の大小に拘わらず方形で統一されるが，ＳＴ708は辺の長さが揃わない不整な台形を呈している。規模は，一辺の長さ3ｍ弱から7ｍ程までの範囲にあり，4～5ｍのものが主体を占める。これら住居跡の主軸方位は，長辺に主軸を置いた場合大別して3群のまとまりが捉えられる。すなわち，磁北に近く振れる角度が30°未満の値をとるＳＴ5・713等の一群，30°～65°の範囲にあるＳＴ7・708等の一群，70°以上の振れを持つＳＴ8・702等の一群である。住居跡相互の重複は，ＳＴ13→14→15という切り合い関係から少なくとも3期は認められる。以下では，30軒中7軒確認された焼失家屋を中心に，床面及び貯蔵穴と考えられる住居内土壙より一括的に遺物が出土したＳＴ5・702・708について，その概要を述べる。

ＳＴ5

〔位置・重複〕　A区北東部34・35－33・34Gに位置し，平安時代遺構確認面の下層より検出される。北辺の一部を平安時代のＳＫ80に切られる。

〔平面形・規模〕　南北6.4m，東西5.2mの長方形を呈する。検出面から床面までの深さは約10cmを測る。柱穴は確認できない。

〔床面・地床炉〕　地山を直接床面とし，ほぼ水平でほとんど凹凸は見られない。床面中央部北東寄りに，黒色の植物繊維（アンペラ）が粘土化した状態で遺存する。床面西半部ほぼ中央に径20～30cmを測る楕円形状の焼土3基が，東西方向に並んだ状態で確認された。

〔壁・周溝〕　壁は床面同様地山を直接利用しており，西壁でやや緩やかなものの全周で急激に立ち上がる。南西部では試掘トレンチにより地山まで掘り下げているため，壁面を破壊している。周溝は西辺において深さ5cm程の浅い溝が検出されるが，全周するものではない。東辺では床面が壁沿いに一段落ち込むことから，壁溝と判断される。

〔遺物〕　遺物は，南西部床面に偏って多く出土している。図上復元できた14点の土師器の器種は，器台（1点），坏（3点），甕（2点），甑（1点），壺（1点），甕（6点）で組成される。3は外面及び内面上半部に朱が施される。4の坏は体部から口縁部へ至る途中に段を形成し，6は頸部が内弯気味に屈曲して口縁に至る特徴が見られる。

ＳＴ702

〔位置・重複〕　C区北縁部ほぼ中央，46・47－34・35Gに位置する。北角部を耕地整理前の排水路跡に切られる。また，南東辺ではＳＴ703を切る。

〔平面形・規模〕　北角部未検出のため全体のプランは確認できないが，方形を呈し南北6.1m，東西6.2mを測る大型の住居跡である。検出面からの深さ15～30cmを測る。

〔床面〕　検出面下10cm前後で，東隅部を除くほぼ全体に炭化物が検出される焼失家屋である。西半部には植物繊維が，また全域で炭化材の散乱が認められる。炭化物層下，地山直上に灰色粘質土層が確認できた。一律に間層として堆積することから貼床と判断され，

これをもって床面とした。炉跡及び焼土は検出されない。

〔壁・壁溝〕　壁は地山を直接利用しており，床面よりほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は幅約20cm，床面からの深さ10cm前後で全周において掘り込まれ，北西辺ではやや広くなる。周溝は確認できない。

〔貯蔵穴〕　南角部に位置する。直径約40cm，深さ20cm程を測り円形を呈する。覆土は黒褐色粘質土の単層で，炭化物を斑状に含む。

〔遺物〕　遺物は古式土師器と土製品及び砥石が出土しており，住居跡30軒の中で出土量が最も多い。土師器の器種は，高坏・器台・坏・坩・甑・壺・甕で組成される。これらは，南角隅の貯蔵穴及びその付近の南西壁面沿いと，北西壁面沿いに密集して分布する傾向が指摘できる。特に，甕５個体は後者からまとまって出土しており，他の器種は全て前者からの一括的な出土であることは，住居内における構造や機能を探る点から注目される。高坏は，脚部が外反しながら緩やかに開いて孔が貫通するものと，中実の筒型脚で下半が外反しながら内弯気味に開くものが見られる。37の坩は頸部途中に大きく張り出す段を有し，球胴の体部下半に径５㎜程の穿孔が認められる。また体部には，斜状に交錯する数本の沈線が観察される。

ＳＴ708

〔位置・重複〕　Ｃ区北東部49～51－36～38Ｇに位置する。重複は，北西側に位置するＳＴ707を切る。

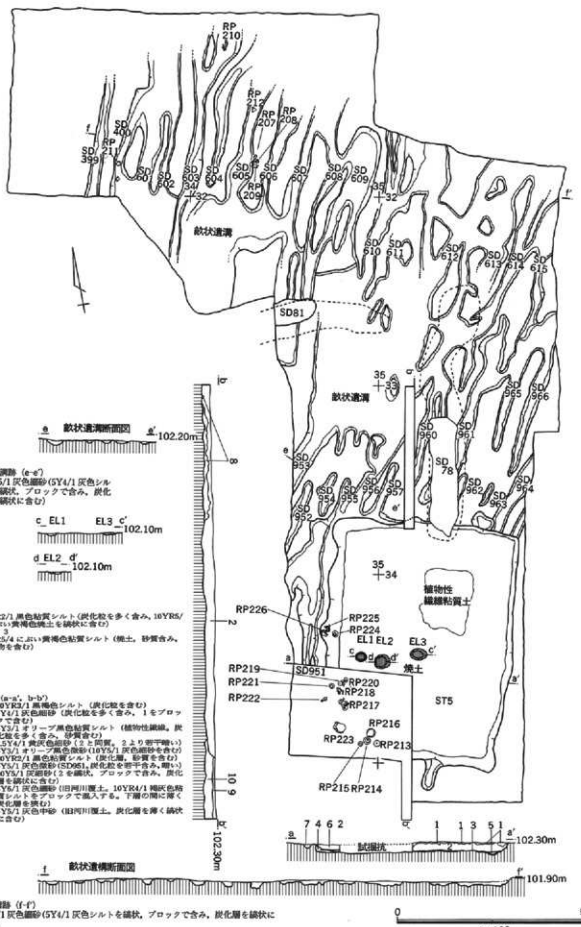
〔平面形・規模〕　検出南西辺7.3m，南東辺6.7mを測り，30軒中で最も大型の規模を有する。平面形は北東辺が不規則な曲線となるため，不整な台形を呈する。また北西辺では途中に，長さ1.4m，最大幅20cmの切り込みが認められる。

〔床面〕　遺構検出面から５cm前後掘り込んだ時点で，床面全体に広がる炭化物及び散在する炭化材が検出された。炭化物層は２～10cmの厚さで床面を覆い，これを取り除くと地山が現れ，直接床面としている。ＳＴ702同様焼失家屋であり，南西辺沿いと南東辺沿いの一部には各々，辺に平行する様に植物繊維層の堆積が認められ，壁根材または壁材の倒壊したものと捉えられる。北西辺部の床面一帯の広い範囲には焼土の点在が認められたが，火災時に二次的な焼成を受けた結果と考えられ，地床炉等には当たらない。

〔壁・壁溝〕　壁の立ち上がりは全周において急激で，南東壁はほぼ垂直に掘り込まれる。壁溝は北西壁沿いにのみ検出された。周溝は確認されない。

〔貯蔵穴〕　西角部に位置し，長径約１ｍの楕円形状を呈する。深さは約50cmを測り，床面よりすり鉢状に掘り込まれる。

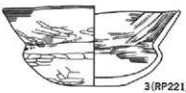
〔遺物〕　遺物には土師器，焼成された粘土塊，砥石がある。土師器の器種に高坏・坏・坩・壺が認められ，大半が貯蔵穴及びその周辺より一括して出土している。61（ＲＰ420）の口縁に棒状浮文を施す大型壺の出土状況は，上から圧し潰された状態で遺存しており，建物倒壊による破損と判断される。53の高坏は，坏部下半の稜が強く引き出される。



第5図　ST5竪穴住居跡・鉄状遺溝

1(RP215)

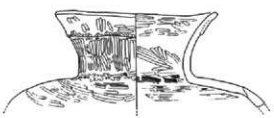
2(RP224)

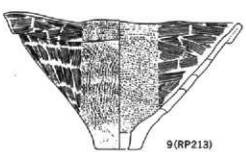

3(RP221)

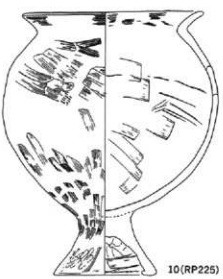
4(RP222)

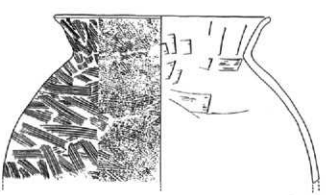
6(RP218)

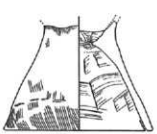
7(RP219)


8(RP214)


9(RP213)

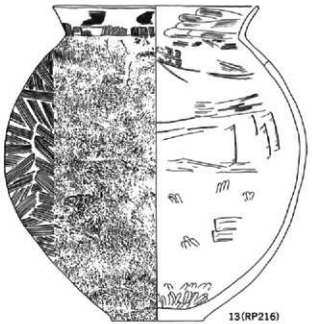

10(RP225)


11(RP223)

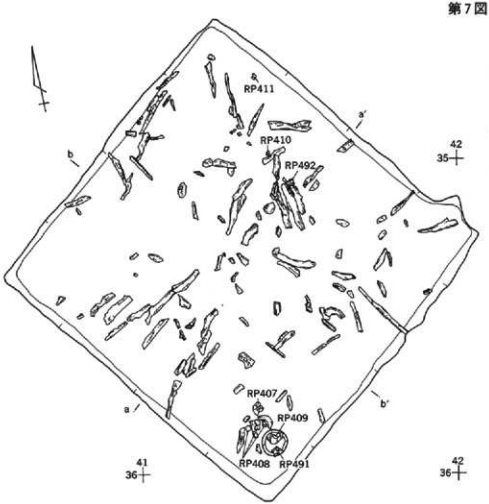

12(RP220)

0 10cm
1:3

第6図 ＳＴ５出土遺物(1)

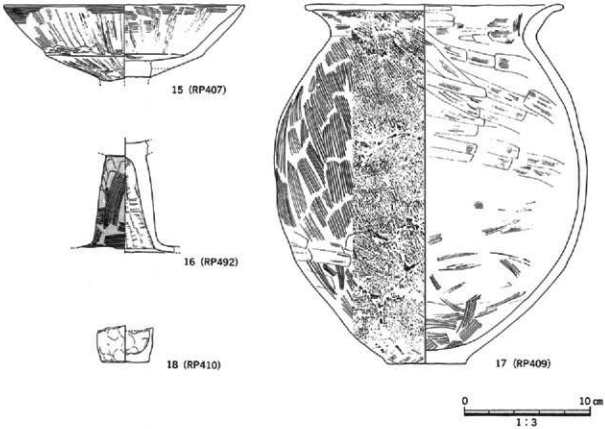


第7図　ＳＴ５出土遺物(2)

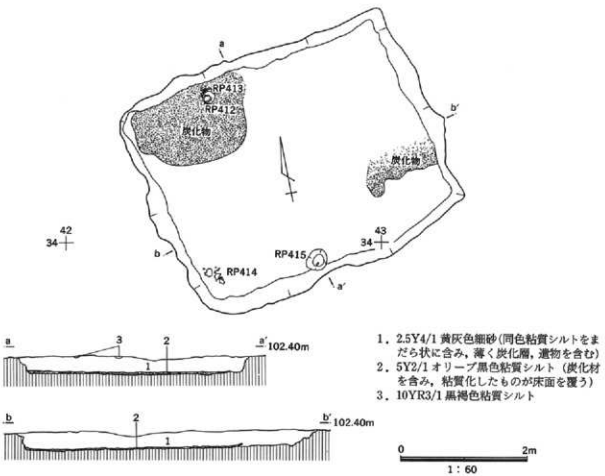


1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（炭化粒，遺物を含み，しまる）
2. 10YR4/6 褐色シルト（焼土。炭化物を塊で含む）
3. 10YR4/1 褐灰色シルト（薄く炭化層を形成する。敷物）
4. N1.5/0 黒色シルト（炭化材，焼土をまだら状に含む）
5. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト（1をブロックで含む）

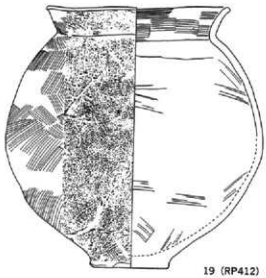
第8図　ＳＴ７竪穴住居跡



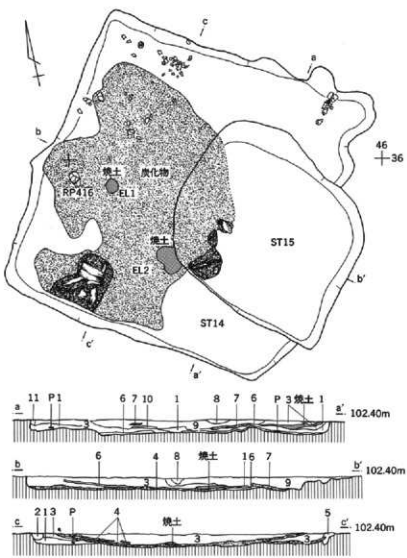
第9図 ＳＴ７出土遺物



第10図 ＳＴ８竪穴住居跡

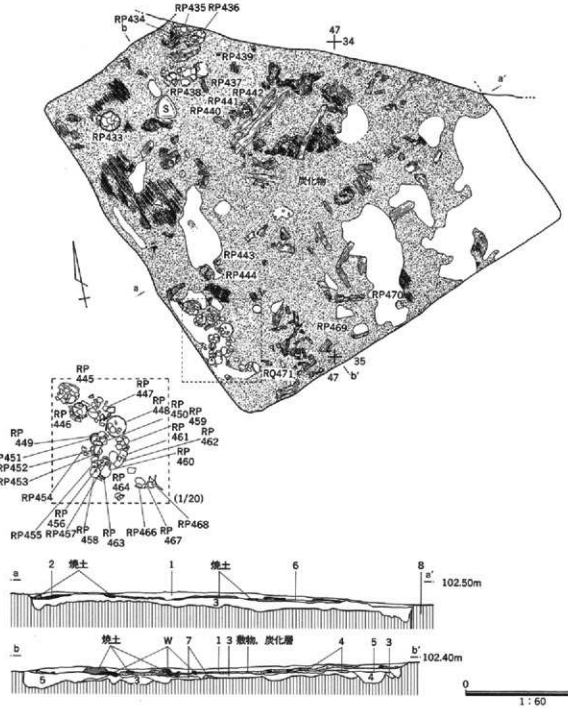


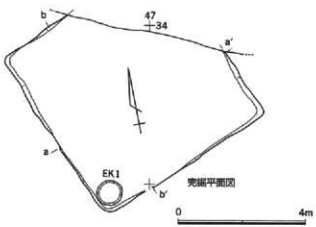
第11図　ＳＴ８出土遺物



1. 5Y4/1 灰色粘質シルト（遺物を含み，炭化粒，砂質を多く挟んで含む）
2. 2.5Y4/1 黄灰色シルト（炭化粒多く含む）
3. 5Y5/1 灰色細砂（１を全体に多く含む）
4. N1.5/0 黒色粘質シルト（炭化層で，焼土を含む）
5. 5Y5/1 灰色シルト（３を若干含む）
6. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト（植物性繊維の粘質土化したもの）
7. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト（ST15。炭化層で，焼土を含む）
8. 2.5Y4/1 黄灰色シルト（ST15。炭化粒を含み，砂質を含む）
9. 2.5Y4/1 黄灰色微砂（ST15。炭化粒，パミス粒若干含む）
10. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト（植物性繊維の粘質土化したもの。砂質多く含む）
11. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト

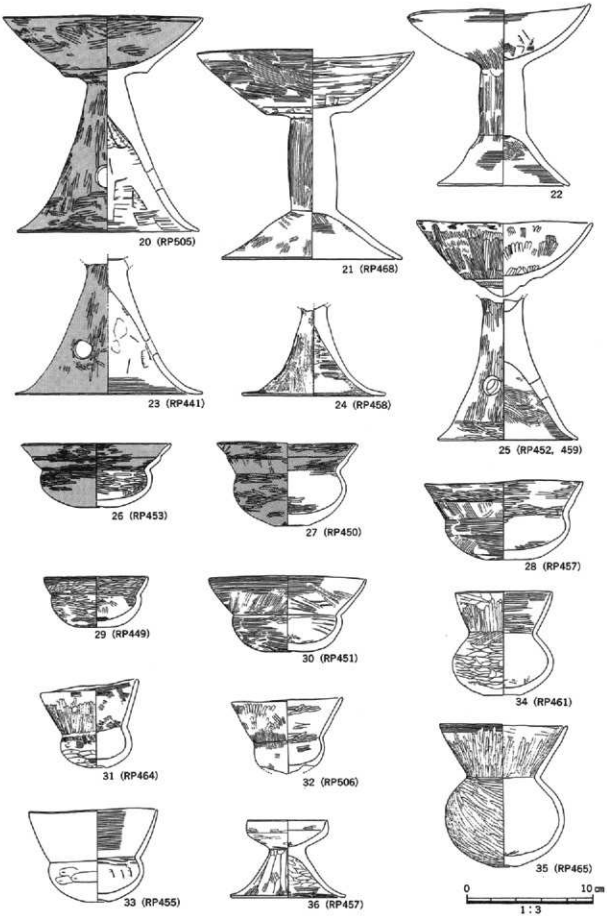
第12図　ＳＴ14・15竪穴住居跡



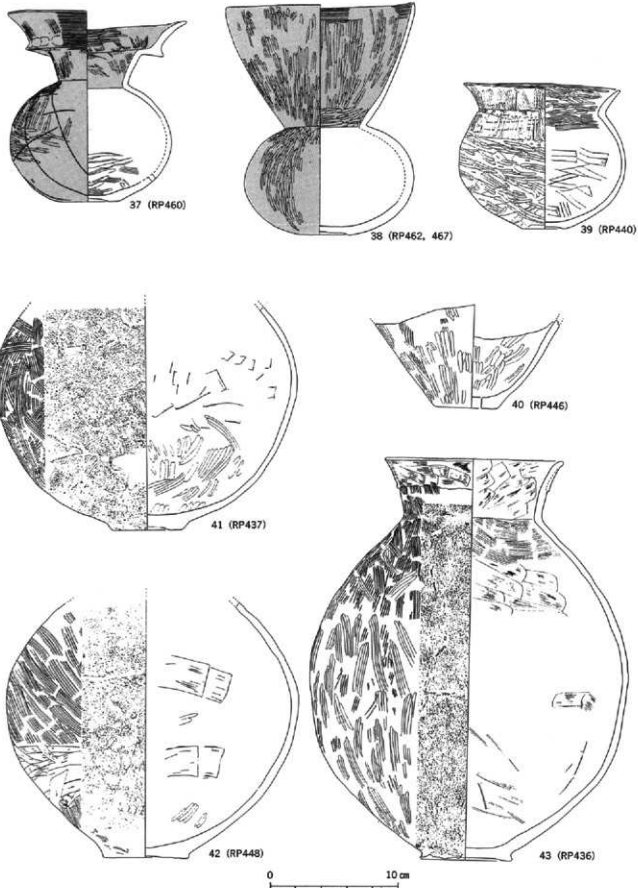


1．2.5Y4/1 黄灰色シルト（炭化物，焼土を多く含み，床面に1cm程の植物性繊維敷物，炭化層を形成する）
2．5Y7/1 灰白色細砂（炭化粒を含み，3との間に，薄く炭化層をつくる）
3．5Y4/1 灰色粘質シルト（貼床部。炭化粒を含む。地山，砂層のため，境が明確である）
4．2.5Y4/1 黄灰色微砂（10Y5/1 灰色粗砂（地山）を多く含む）
5．2.5Y4/1 黄灰色シルト（炭化粒を若干含み，2が下層に1cm程，層をつくる）
6．5Y5/1 灰色細砂（2と同質）
7．5Y5/1 灰色微砂（炭化粒を含み，地山，粗砂を含む）
8．2.5Y4/1 黄灰色シルト（旧排水路。玉石を含み，攪乱をうける）

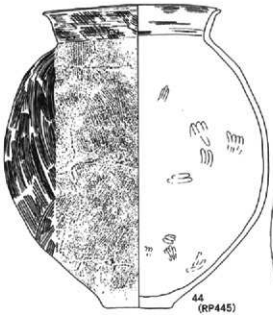
第13図　ＳＴ702竪穴住居跡

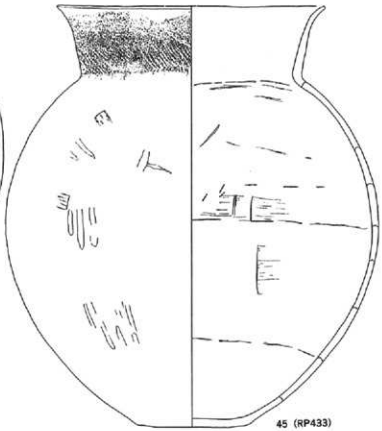


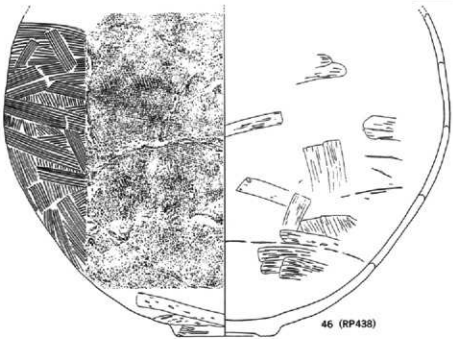
第14図　ＳＴ702出土遺物(1)



第15図　ＳＴ702出土遺物(2)


44
(RP445)


45 (RP433)


46 (RP438)

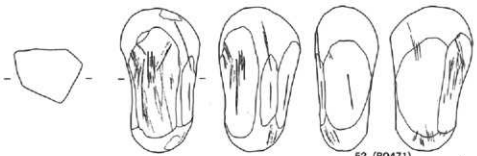
47
(RP454)

48 (RP463)

49
(RP456)

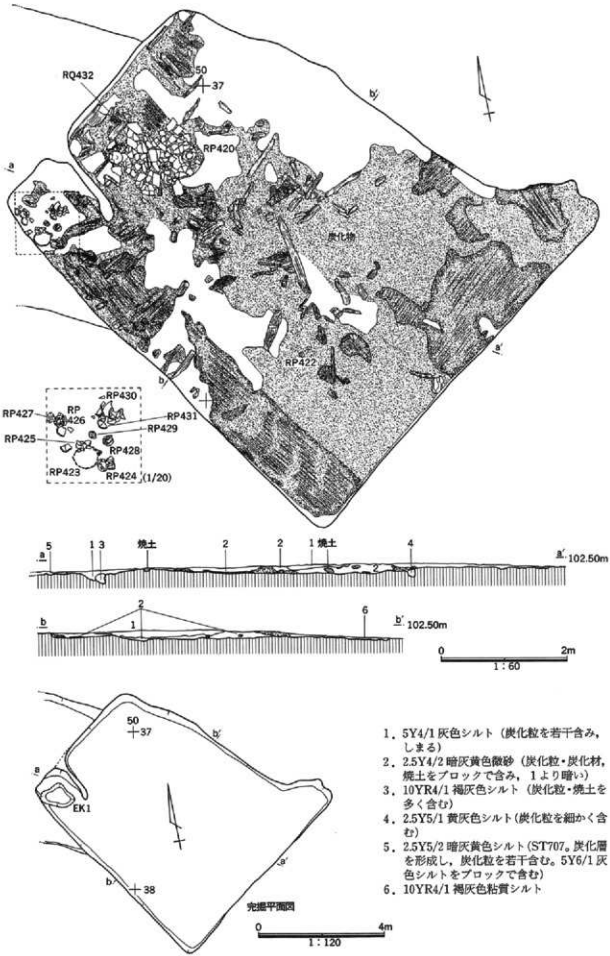
50 (RP469)

51
(RP444)


52 (RQ471)

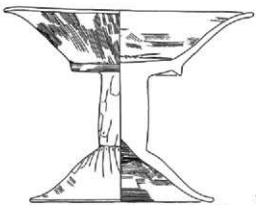
0 10cm
1:3

第16図　ＳＴ702出土遺物(3)



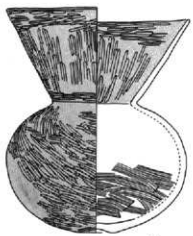
1．5Y4/1 灰色シルト（炭化粒を若干含み，しまる）
2．2.5Y4/2 暗灰黄色微砂（炭化粒・炭化材，焼土をブロックで含み，1より暗い）
3．10YR4/1 褐灰色シルト（炭化粒・焼土を多く含む）
4．2.5Y5/1 黄灰色シルト（炭化粒を細かく含む）
5．2.5Y5/2 暗灰黄色シルト（ST707。炭化層を形成し，炭化粒を若干含む。5Y6/1 灰色シルトをブロックで含む）
6．10YR4/1 褐灰色粘質シルト

第17図　ＳＴ708竪穴住居跡



53 (RP426)

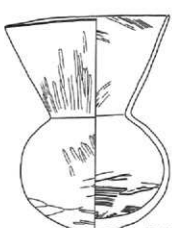
55
(RP427)



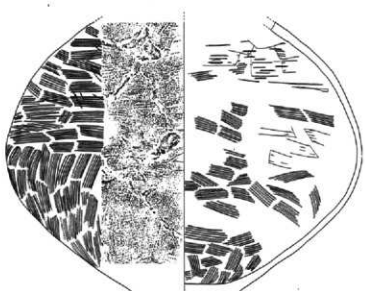
57
(RP431)

56 (RP425)

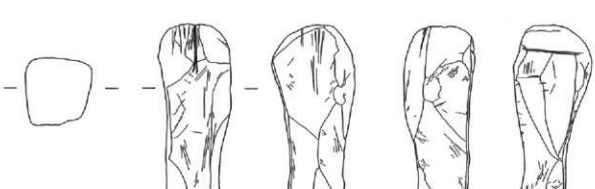
54 (RP428)



58 (RP424)



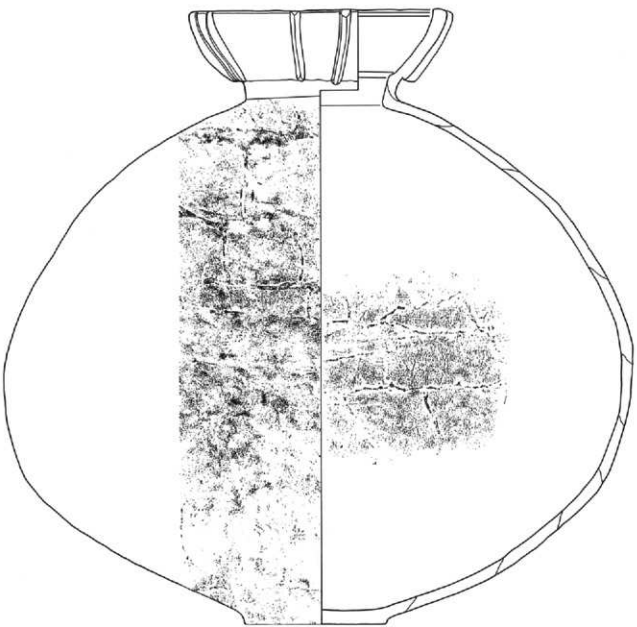
59 (RP423)



0 10cm
1:3

60 (RQ432)

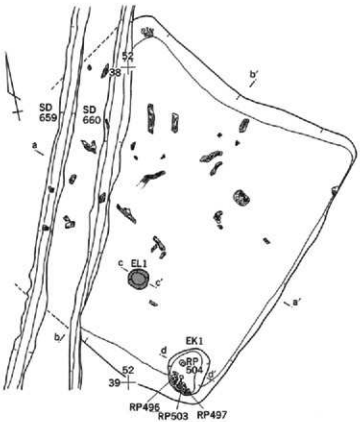
第18図　ＳＴ708出土遺物(1)



61 (RP420)

0 10cm
1:4

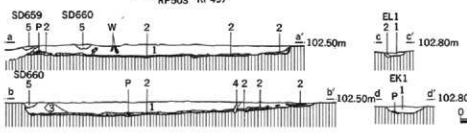
第19図　ＳＴ708出土遺物(2)



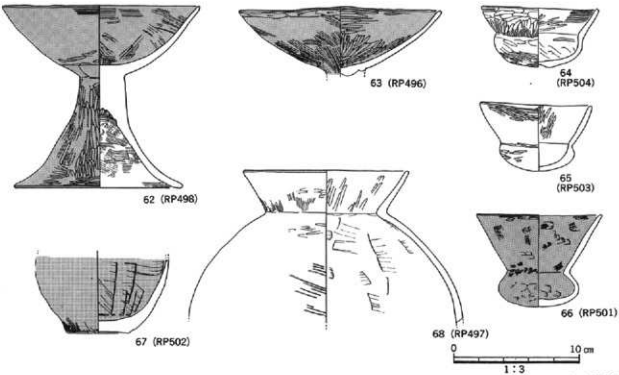
1．5YS/1 灰色細砂（炭化材を含み，パミス粒を含む）
2．N1.5/0 黒色微砂（遺物，炭化材，焼土粒を含み，炭化層を形成する）
3．7.5Y5/1 灰色細砂（炭化粒を多く含む）
4．2.5Y4/1 黄灰色シルト
5．10YR4/1 褐灰色シルト（炭化粒を若干含み，1をブロックで含む）

EK 1
1．2.5Y4/1 黄灰色細砂（炭化土を斑状に含み，2.5Y3/1 黒褐色粘質シルトを斑点状，2.5GY オリーブ灰色粘質シルトを斑状に混入する）

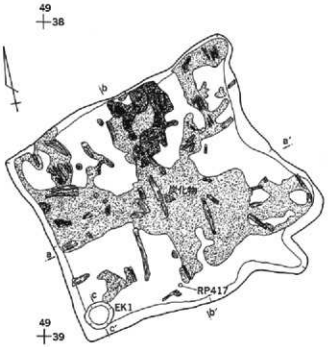
EL 1
1．2.5Y4/1 黄褐色細砂の焼土（10YR4/2 灰黄褐色を呈する）
2．2.5Y4/1 黄灰色細砂の焼土（7.5YR4/2 灰褐色焼土を斑状に含む）



第20図　ＳＴ711竪穴住居跡



第21図　ＳＴ711出土遺物

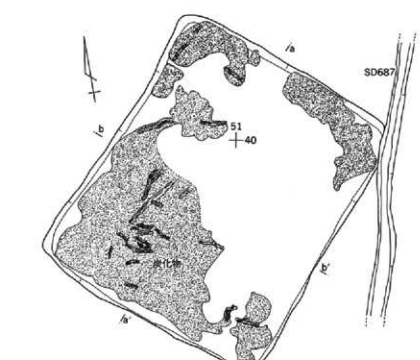


1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト(炭化粒を含み，パミスブロックを含む。砂質を多く含む)
2. N1.5/0 黒色微砂(炭化層を形成し，焼土ブロックを含む)
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト(焼土。若干炭化粒を含む)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト(パミスブロック塊で含み，砂質を含む)
5. 10YR4/2 灰黄褐色シルト(炭化層を形成し，焼土を含む)
6. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト

EK1

1. 5Y3/1 オリーブ黒色粘土質細砂(炭化物，未分解有機物を含む。2.5GY5/1 オリーブ灰色細砂を斑状に含む)
2. 2.5Y4/1 黄灰色砂(炭化物，未分解有機物をわずかに含む。ほぼ純粋)
3. 2.5Y3/1 黒褐色砂(炭化物に富む。2.5GY5/1 オリーブ灰色細砂を斑点状に含む。底面に炭化土を含む)

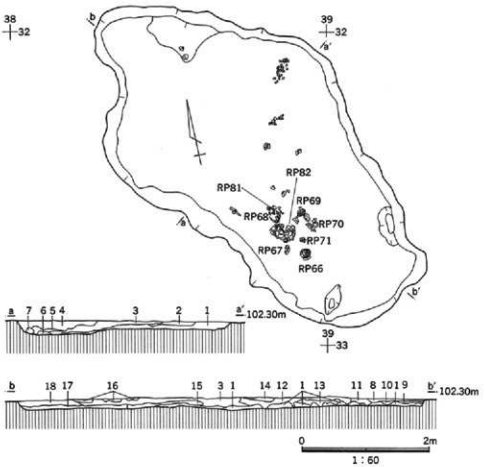
第22図　ＳＴ709竪穴住居跡



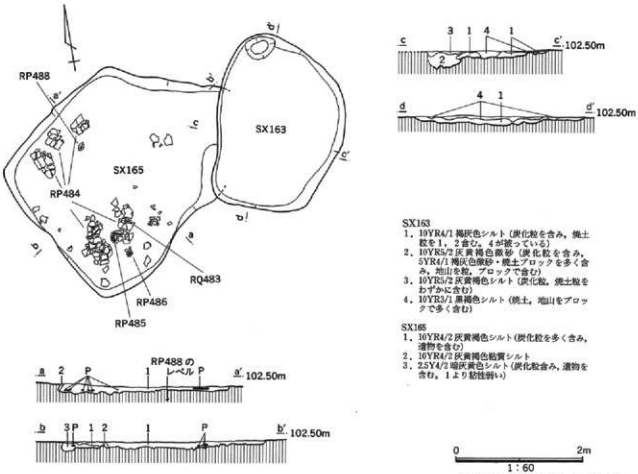
1. 5Y4/1 灰色微砂(炭化粒を含み，遺物を含む)
2. N1.5/0 黒色微砂(炭化層を形成し，焼土を含む)
3. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト

第23図　ＳＴ714竪穴住居跡

1. 2.5Y4/1 黄灰色微砂（炭化粒を含み，2と3と12を若干ブロックで含む）
2. 7.5Y6/1 灰色細砂（2.5Y3/1 黒褐色砂質シルトをブロックで混入し，1をまだらに含む）
3. 10YR2/1 黒色シルト（炭化粒を多く含み，4，2.5Y3/1 黒褐色砂質シルトをブロックで含み，17，細砂を薄く縞状に含む）
4. 2.5Y4/1 黄灰色シルト（炭化粒，遺物を含み，しまる）
5. 5Y4/1 灰色砂質シルト（炭化粒を含み，4より明るい）
6. 2.5Y4/1 黄灰色細砂（5をブロックで混入する）
7. 5Y5/1 灰色中砂（5をブロックで混入する）
8. 10YR3/1 黒褐色シルト（炭化粒，遺物を含む）
9. 5Y5/1 灰色細砂（12を薄く縞状に含み，炭化粒を含む）
10. 2.5Y4/1 黄灰色微砂（12を縞状に多く含み，遺物を含む）
11. 5Y5/1 灰色細砂（12を縞状に多く含み，遺物を含む）
12. 10YR2/1 黒色粘質シルト（炭化粒を含み，しまる）
13. 5Y3/1 オリーブ黒色微砂（12を縞状に含み，炭化粒，遺物を含む）
14. 2.5Y3/2 黒褐色シルト（上面に12をブロックで混入し，炭化粒，遺物を含む）
15. 2.5Y2/1 黒色微砂（3に混入し，地山を縞状に含む）
16. 2.5Y4/1 黄灰色シルト（炭化粒を含み，3に混入する）
17. 2.5Y4/1 黄灰色微砂（炭化粒を含み，地山をブロックで混入する，15より明るい）
18. 2.5Y4/1 黄灰色シルト（炭化粒を含み，しまる，9より明るい）



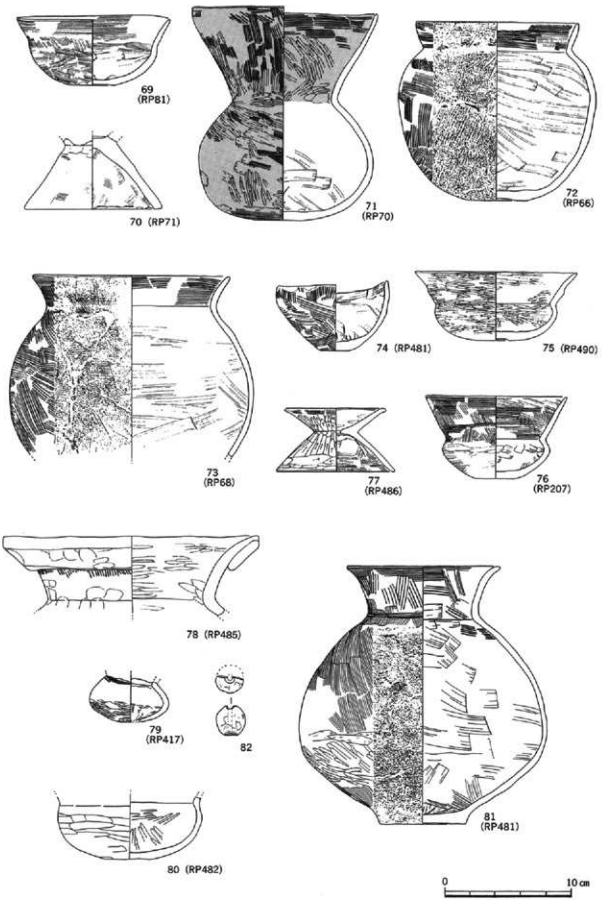
第24図　ＳＸ141遺構



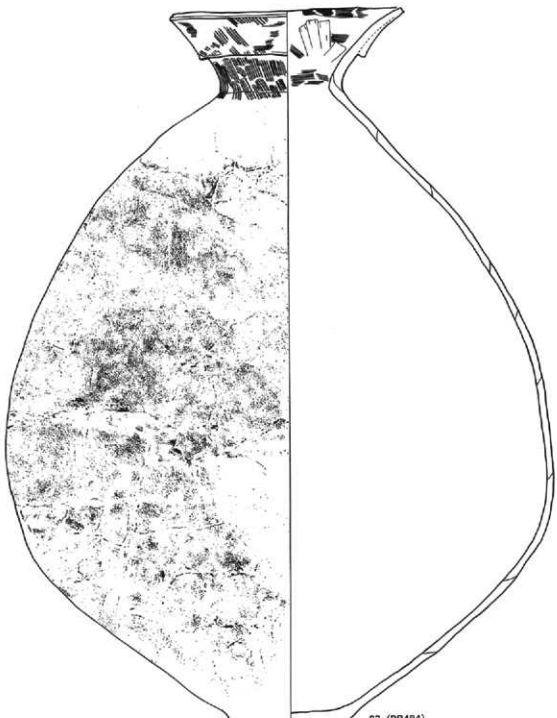
SX163
1. 10YR4/1 褐灰色シルト（炭化粒を含み，焼土粒を1，2含む，4が被っている）
2. 10YR5/2 灰黄褐色微砂（炭化粒を含み，5YR4/1 褐灰色微砂・焼土ブロックを多く含み，地山を粒，ブロックで含む）
3. 10YR5/2 灰黄褐色シルト（炭化粒，焼土粒をわずかに含む）
4. 10YR3/1 黒褐色シルト（焼土，地山をブロックで多く含む）

SX165
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト（炭化粒を多く含み，遺物を含む）
2. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（炭化粒含み，遺物を含む，1より粘性弱い）

第25図　ＳＸ163・165遺構



第26図　S X141・143，S T17・164・701・709出土遺物



0　10cm
1：4

第27図　ＳＸ165出土遺物

表2 竪穴住居跡観察表(1)

	平面形・規模・方向・覆土	床面・壁・壁溝・周溝	ピット・貯蔵穴・炉	出土遺物
ST 9 (43・44 / 33・34 G)	遺構検出面で，北西半部を切る上層の浅い溝跡を確認し，東辺でST10を切る，東西5.2m×南北5.7mの方形で方位は北東南西軸を長軸とし，N-70°-Eを測る。床面積は29.6㎡を測る。覆土は，基本的に1層で炭化粒，砂質を含む黄灰色粘質シルトで明検である。	床面は地山で，確認面から12cmを掘り込み，平坦で1cm程の炭化層，焼土ブロックを挟む粘質土（アンペラ）層を確認する。立ち上がりは垂直で，北・南辺部に20~40cm幅のU字，方形を呈する浅い壁溝を設ける。東半部にかけて削平が著しい。	未検出	単純口縁壺片等で破片は，やや多い。
ST 12 (34 / 44・45 G)	SD650，SP500に切られる東西4.2m×南北3.9mの方形で，北辺中央に突出部分がある。東西軸を長軸とし，N-94°-Eを測る。覆土は，ほぼ1層で黄灰色粘質シルトのブロック，炭化粒を若干含む灰色細砂である。床面積は16.4㎡を測る。	床面は地山で，確認面から6cmを掘り込み，床面は若干凹凸がある。立ち上がりは上部の削平が著しく不明だが，壁溝部分についてはほぼ垂直で，南・東辺部で15~25cm幅のU字半円形を検出する。	南角隅に南北径36cm×東西径40cmで深さ11cmのピットを検出する。	床面よりRP480。他に，彩色の顕部の長い坩片がある。破片は，微量である。
ST 13 (44・45 / 35 G)	南辺部の一端でST14に切られ，東西3.1m×南北2.5mの方形で，東南部に東にのびる溝がある。東西軸を長軸とし，N-74°-Eを測る。床面積は7.8㎡を測る。覆土は炭化粒を若干含む黄灰色微砂の単一層で不明瞭である。	床面は地山で確認面から3cmを掘り込む。ほぼ平坦である。削平が全体に著しいが，東辺部を除き，壁溝は明瞭で幅20cm×30cm深さ10cm程のU字半円形の溝が巡っている。立上がりは，壁溝部についてのみ垂直で上部は，削平される。	未検出	わずかに土師器片が出土する。
ST 16 (44・45 / 36~38 G)	北辺でST17を切り，東辺部に溝が突出する。東西5.0m×南北5.5mの方形で，南北軸を長軸とし，N-31°-Eを測る。床面積は27.5㎡を測る。覆土は基本的に1層で，炭化粒，砂質を含む褐灰色粘質シルトであり，明瞭である。	床面は地山で，確認面から13cmを掘り込み，ほぼ平坦である。一部，炭化層を薄く形成する。黒褐色粘質シルトが1cm程で床面に広がる。立ち上がりは西辺部において垂直で，上部削平が著しい。壁溝，周溝は未検出である。	南角隅に南北62cm×東西16cmのピットを検出し，覆土は1層が灰色砂，2層は黒色炭化土で間層に黒褐色粘質シルトをブロックで混入する。西辺中央部にも径55cmのピットを確認し，覆土は黒褐色粘質シルトである。	短い中実で中が空洞の高杯片，彩色でくぼみ部のある坩片，単純口縁，複合口縁，口縁部に面をつくる甕片，短く外傾する鉢片などで，破片は多い。
ST 17 (44・45 / 36 G)	南半部の大半をST16に切られ，東西3.0m×南北検出長1.2m以上で方形と推測される。北東南西軸で，N-22°-Eを測る。覆土は，炭化粒を若干，パミス粒を含む灰色粘質シルトである。	床面は地山で，確認面から18cmを掘り込み，凹凸が目立つ。北辺部で垂直な立ち上がりを示す。壁溝，周溝は未検出である。	北東角隅に南北37cm×東西40cm深さ20cmのピットを検出する。覆土は基本的に1層で，黒褐色粘土質シルトを斑状に含み，下面に炭化土，焼土砂を帯状ブロックで含む。	土製の貫通孔のある玉他，破片も微量である。
ST 20 (46 / 36 G)	東辺の一部をSD656に切られ，ST701の南辺を切る東西3.0m×南北2.8mの方形である。北東南西軸を長軸とし，N-38°-Wを測る。床面積は，8.4㎡である。覆土は基本的に1層で，灰色中砂である。壁際の落ち込みに灰色シルトが炭化粒，砂質をまだらに含み堆積する。灰色中砂は，灰色シルトを縞状に含む。	床面は地山で，確認面から2cmを掘り込み，平坦である。上部がほとんど削平であるため，直床面である。立ち上がりは，壁際の一部で垂直と確認する程度で不明である。壁溝は，北・南辺部で壁際の隅4cm，深さ2cm程度のU字形の落ち込みが確認できる程度である。	北辺，中央西寄に南北27cm×東西28cm深さ5cmのピットEP1，東辺中央部に26cm×26cmのピットEP2を検出する。覆土は，EP1がやや粘度質で炭化物，未分解有機物を含む黒褐色細砂，EP2が炭化粒，砂質を含む，黄灰色粘質シルトである。	土師器片を数えるのみである。

表3 竪穴住居跡観察表(2)

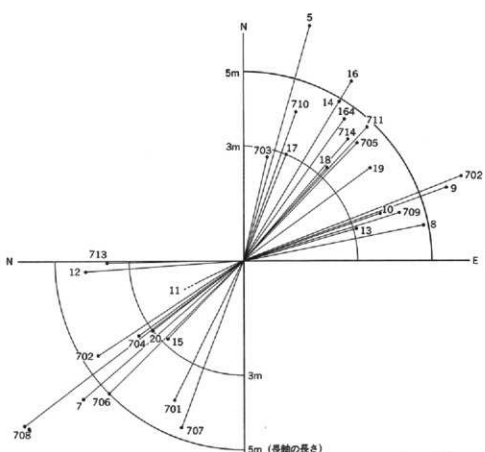
	平面形・規模・方向・覆土	床面・壁・壁溝・周溝	ピット・貯蔵穴・炉	出土遺物
ST 701 (46・47 / 35・36 G)	南辺をST20, SD656に切られ、東西4.1m×南北3.9mの方形である。北西南東軸を長軸とすると、N-64°-Wを主軸にもつ。床面積は16.0m²で、覆土は1層で、炭化粒、砂質土を含む灰色シルトである。	床面は地山で、確認面から3cmを掘り込み、平坦である。上部がほとんど削平をうけ、直床面である。一部床面に炭化層を形成する黒色シルト（アンバラ）を検出する。立ち上がりは、確認できる部分で急斜である。壁溝、周溝は未検出である。	EK 1は東角隅に径45cm×43cm, 深さ10cmで, 覆土は3層, 上より黒褐色粘土質細砂, 灰色砂, 黄灰色細砂である。EK 2は北辺中央部に径43cm×43cm, 深さ8cmで, 黄灰色細砂を堆積する。EK 3は西辺中央部に径40cm×35cm, 深さ20cmで, 黒褐色粘土質細砂, 灰色砂を堆積する。	床面より RP482。彩色の小型鉢片他微量である。
ST 703 (47 / 34・35 G)	北角をST702に切られる。東西2.8m×南北2.8mの方形で, 南北軸を主軸とすると, N-13°-Eを測る。床面積は, 7.8m²で, 覆土は, 炭化粒, 砂質を若干含む黄灰色シルトで大変不明瞭である。	床面は地山で, 確認面から3cmを掘り込み, 凹凸がある。床面に1～2cmの粘性の強い灰色シルト（アンバラ）を検出する。立ち上がりは, 上部がかなり削平をうけ不明であるが, 確認できる部分で垂直である。壁溝が幅20cm, 深さ5cm以上の半円, 方形で南・東辺部において若干検出する。	未検出	床面より RP478, 479。破片は台付甕片, 彩色のくぼみ底鉢片他。少量である。
ST 704 (47・48 / 35・36 G)	SD656を切り, SP522に切られる東西3.4m×南北3.4mの方形で, 北西南東軸を主軸に, N-36°-Wを測る。床面積は, 11.6m²である。覆土は, 基本的に1層で炭化粒を若干含む灰色細砂である。壁際上面に炭化粒を多く含む, 同色シルトが多く堆積する。下面は不明瞭である。	床面は地山で, 確認面から5cmを掘り込み, 平坦である。立ち上がりは垂直である。西辺部で, 幅5cm, 深さ5cmのU字形の壁溝を検出する。北・南辺部でも幅25cm, 深さ4cmの方形の浅い掘り込みを検出する。	西辺中央部に, 径27cm, 深さ15cmのピットを検出する。覆土は, 地山のブロックを含む灰色細砂である。	破片で, 単純口縁甕片, 彩色の土師器片他微量である。
ST 705 (48 / 36・37 G)	SD656を切り, SP527に切られる。東西4.3m×南北3.6mの方形である。北東南西軸を長軸とし, 主軸は, N-44°-Eを測る。床面積は, 15.5m²である。覆土は, 基本的に1層で, ST704の覆土と同質で, 灰色細砂と同色シルトの混合層である。上面壁際にはパミス粒を含むST704の灰シルトが, 多く堆積する。下面は不明瞭である。	床面は地山で, 確認面から10cmを掘り込み, ほぼ平坦である。南辺が削平を著しくうけており, 直床面である。残存部分で, 垂直な立ち上がりを確認できる。壁溝, 周溝は未検出である。	未検出。検出面で確認できた, 南角隅のSP527が削平をうけた直床面のピットと推測されるが, 明らかでない。	破片で単純口縁甕片他微量である。
ST 706 (48・49 / 34・35 G)	北・東辺部を道路部に切られ, 東西4.9m×南北5.0mの方形と推測される。北東南西軸とすると, N-45°-Wを測る。床面積は, 24.5m²以上である。覆土は, 暗灰黄色シルトで炭化粒を含み, 一部炭化層を含む。	床面は地山で, 確認面から5cmを掘り込む。上部大半が, 削平をうけ, ほとんど直床面しか残っておらず, 若干凹凸がある。立ち上がり, 壁溝, 周溝も不明であるが, 壁際等残存部で垂直で, 壁下に道路部を除き, 幅6～20cm, 深さ5cm以上のゆるやかなU字, 半円形の掘り込みが廻える。	南角隅に, 南北59cm×東西59cmの土師器を含む貯蔵穴を検出する。覆土は, 基本的に1層で, 炭化土, 未分解粘土化有機物を挟み, 炭化土, 焼土を帯状に混入する灰色粘土質シルトである。	単純口縁甕片, 壺片他少量である。
ST 707 (49 / 36・37 G)	東辺部をST708に切られる。東西検出長2.8m以上×南北4.7mの方形と推測される。東西軸で, 主軸はN-70°-Wを測る。床面積は, 13.2m²以上である。覆土はST706と同質で炭化層を形成し, 炭化粒を含み, パミスをブロックで含む。不明瞭である。	床面は地山で, 確認面から3cmを掘り込む。削平を著しくうけ, 北・西辺部以外は, 若干凹凸がある直床面のみである。立ち上がりは, 残る北西部の壁溝と推測される幅50cm, 深さ10cmのゆるやかな掘り込み部分について急斜である。	未検出	単純口縁甕片のみで微量である。

表4 竪穴住居跡観察表(3)

	平面形・規模・方向・覆土	床面・壁・壁溝・周溝	ピット・貯蔵穴・炉	出土遺物
ST 710 [47・48 / 37・38 G]	SD656に中央部を切られ、SP528を南辺部で切る東西3.6m×南北4.1mの方形である。南北軸を長軸に、N-20°-Eの主軸を測る。床面積は14.8m²である。覆土は基本的に1層で炭化粒を若干含み、砂質を多く含む褐灰色粘質シルトである。	床面は地山で、確認面から4cmを掘り込む。上部が全体に削平をうけ、特に北辺部が著しく底床面である。平坦だが若干中凹凸がある。立ち上がりは北辺以外で垂直であり、幅15~30cm、深さ5cm程の半円形の壁溝を検出する。	南角隅に南北径39cm×東西径39cm、深さ6cmを測るピットを検出する。覆土は河砂~粗砂を多量に混入し、未分解有機物、酸化鉄を含む灰色砂である。ピット底面に炭化土が広がる。	単純口縁甕片、折返口縁の壺片、小型鉢片他。破片は少量である。
ST 712 [46・47 / 37・38 G]	ST164と西南辺部を切られる東西4.4m×南北4.6mを測る方形である。北西南東軸を長軸とすると、N-33°-Wに主軸を測る。床面積は20.2m²である。覆土は、炭化粒、パミス粒、砂質を含み、上面に炭化層が広がる黄灰色シルトである。	床面は地山で、確認面から10cmを掘り込む。床面は、若干凹凸があるが削平をうけるが、ST164に切られる西南辺部を除き、概して立ち上がりは垂直である。壁溝は20~30cm幅で、深さ8cmのU字、半円形である。	北角隅に、南北径84cm×東西径80cm、深さ17cmを測る貯蔵穴を検出する。覆土は、1層目が砂性の強い炭化物、粘土化した有機物、酸化鉄、黒色粘土質、黒褐色粘土質シルトで、2層目が1層をブロックで含む灰色砂で、間に地土ブロックを含む。	床面より RP477。単純口縁壺片他、破片は、やや多い。
ST 713 [47・48 / 38・39 G]	東辺部の一部をSP534に切られる東西3.6m×南北3.6mを測る方形である。南北軸を主軸で、N-1°-Wを測る。床面積は、13.0m²である。覆土は、基本的に1層で炭化粒、砂質を若干含む黄灰色シルトで、上面に炭化層を縞状に多く含む灰色シルトを堆積する。不明瞭である。	床面は地山で、確認面から10cmを掘り込む。床面は平坦で2cm前後のオリーブ黒色粘質土(アンベラ)が広がり、上に炭化層が一部被る。立ち上がりは垂直で、壁溝は周辺部においてのみ幅25cm、深さ8cmの半円形を確認する。	北辺中央に幅45cm、深さ20cmのピットを検出する。覆土は炭化粒、砂質を含む灰色シルトである。また、北辺中央に、幅18cm、深さ12cmのピットを検出し、覆土は微砂である。	単純口縁甕片他、破片は少量である。
ST 164 [45・46 / 38 G]	北辺部において、ST712を切る。東西4.6m×南北3.9mの方形で、北東南西軸を長軸に、N-36°-Eを測る。床面積は17.9m²である。覆土は基本的に1層で、炭化粒、ブロック、遺物を含み、床面に炭化層を厚く形成し、粗砂を含みしまる灰色微砂である。不明瞭である。	床面は地山で、確認面から21cmを掘り込む。床面は平坦で一部黒色粘質シルト(アンベラ)を確認する。立ち上がりはほぼ垂直で、壁溝は南辺部において、幅8cm、深さ4cmのU字の若干の掘り込みを確認する。	西辺中央に、幅60cm、深さ18cmのピットを検出する。覆土は黒色シルトで、炭化物が密集し、全体に炭化している。	床面より RP481。単純口縁壺片、鍛のある小形坩片他。破片は多い。
ST 10 [44 / 33・34 G]	西半部をST9に切られる東西検出長1.3m×南北3.8m で方形と推測され、北東南西軸で、N-71°-Eを測る。覆土は単一層で黄灰色粘質シルトをまだらに含む灰色細砂で、ST9との切合は不明瞭である。床面積は、4.9m²以上である。	床面は地山で、確認面から4cmを掘り込み、残存部分は平坦である。立ち上がりは、上部の削平が著しく不明だが、東辺部において急斜な立ち上がりを確認する。東辺部に60cm幅の、おだやかな半円の壁溝を設ける。	未検出	坩片、中実で中が空洞の高杯片他。破片少量である。
ST 11 [43 / 32・33 G]	北半部大半を排水路、道路に切られ、東西検出長1.4m×南北検出長1.0m以上の方形と推測され、北東南西軸で、N-27°-Wを測る。	未検出	未検出	未検出
ST 18 [45・46 / 37 G]	北辺でST19を切り、SD655を切る。東西2.8m×南北3.3mの隅丸方形で、南北でN-42°-Eを測り、床面積は9.2m²である。覆土は1層で炭化粒、パミス粒を含み、灰オリーブ色シルトの塊を含む黄灰色シルトであり、明瞭である。	床面は地山で、確認面から13cmを掘り込み、凹凸が顕著である。立ち上がりは急斜であるが、上部は削平をうけ不明である。壁溝、周溝は明らかでないが、壁際に20cm程の半円形の掘り込みが検出される。アンベラ痕なし。	未検出	彩色のくぼみ底の坩片他。破片少量である。
ST 19 [45・46 / 36・37 G]	南東辺、角をST18に切られる東西3.7m×南北4.1mの方形で、北東南西軸でN-54°-Eを測り、床面積は15.2m²である。覆土は炭化粒を含む灰色シルトでST18と同質であるが、色調は暗い。明瞭である。	床面は地山で、確認面から6cmを掘り込み、平坦である。立ち上がりはほぼ垂直で、北西辺においてU字形の幅11cm、深さ4cmの壁溝が認められる。アンベラ痕なし。	未検出	未検出

表5　竪穴住居跡観察表(4)

遺構番号	平面形	主軸方位（長軸）	規模(m)	深さ(cm)	面積(㎡)	床面状況	壁	壁溝 周溝	ピット 貯蔵穴	炉	出土遺物	備考
ST5	方形	西北軸 N36°E	6.4×5.2	26	30.3	地山 アンペラ	急斜	壁溝 東辺部検出 周溝 西辺部検出	不明	中央部1 中央西寄2	床面より RP213～226 他。破片としては除かれかにみとる RP片、単純口縁の破片等多い。	平安期の竪下よりアラシ検出、SD664他。北辺で焼成跡確認を切る。
ST7	不整方形	北西南東軸 N41°W	5.5×5.4	13	30.2	地山 炭化層	垂直	壁検出	南角隅1 (貯蔵穴)		覆土より、RP407、408、409、他、破片は単純口縁の破片等多い。	SD641～643、SP486に切られる。焼失家屋。
ST8	方形	北東西南軸 N79°E	4.8×3.7	24	17.8	地山 炭化層	急斜	未検出			覆土より RP412～415他。破片は甲片、単純口縁破片、口縁部に沿が入る破片、底片等多い。	SD644、645に切られる。焼失家屋。
ST14	方形	南北軸 N1°E	4.9×4.7	18	23.0	一部粘質 炭化層	垂直	壁溝 貯蔵部 検出		中央南寄1 中央西寄1	覆土より RP416。他、破片は単純口縁、隆帯口縁の破片、くぼみ部のある甲片等多い。	ST15に切られ、ST13を切る。焼失家屋。
ST15	隅丸方形	北西南東軸 N46°W	2.9×2.6	14	7.5	ST14の覆土、アンペラ	ゆるやか	周溝 東辺部 検出			破片は、隆帯口縁の破片、底片等やや多い。	ST14を切る。
ST700	方形	北東西南軸 N69°E	6.2×6.1	周辺まで 最大 10	37.8	黒褐 炭化アンペラ	垂直	壁溝 全周	南角隅1 (貯蔵穴)		覆土より、RP433～471、EKより、RP505～507。破片は単純、隆帯口縁の破片、底面に木目痕等の底片、底片等多い。	ST705、SD650を切る。焼失家屋。
ST708	不整台形	北西南東軸 N32°W	7.3×5.9	10	43.1	地山 炭化層	上部斜平 急斜	壁溝 北西辺 検出	西角隅1 (貯蔵穴)		覆土より RP418～431、RP432、EKより RP439～431。破片は二重口縁破片、断面の底片、単純口縁の破片、沈線の底片等多い。	ST707を切る。焼失に焼出痕跡ある。焼失家屋。
ST709	不整方形	北東西南軸 N75°E	4.3×3.5	18	15.1	地山 炭化層	垂直	未検出	南角隅1		覆土より RP417。破片は、土師細片が少量のみである。	SD655に切られる。焼失家屋。
ST711	方形	北東西南軸 N45°E	4.8×4.2	18	20.2	地山 炭化層	垂直 北東辺部平 不明	未検出	南角隅1 (貯蔵穴)	中央南寄1	EKより、RP496、497、502～504。底片は、くぼみ部のある甲片、断面の小型底片、底片が多い。	SD659、660に切られる。焼失家屋。周辺、焼跡他。
ST714	方形	北東西南軸 N41°E	4.2×4.0	3	16.8	地山 炭化層	上部斜平 不明	壁溝 北西辺 検出		中央西寄1	底片で、単純口縁の破片多い。	SD687に切られる。焼失家屋。

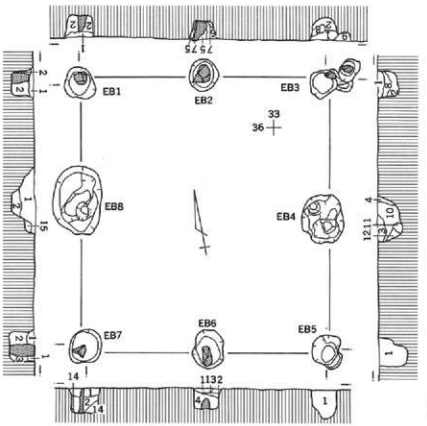


第28図　竪穴住居跡主軸方位と長軸一覧

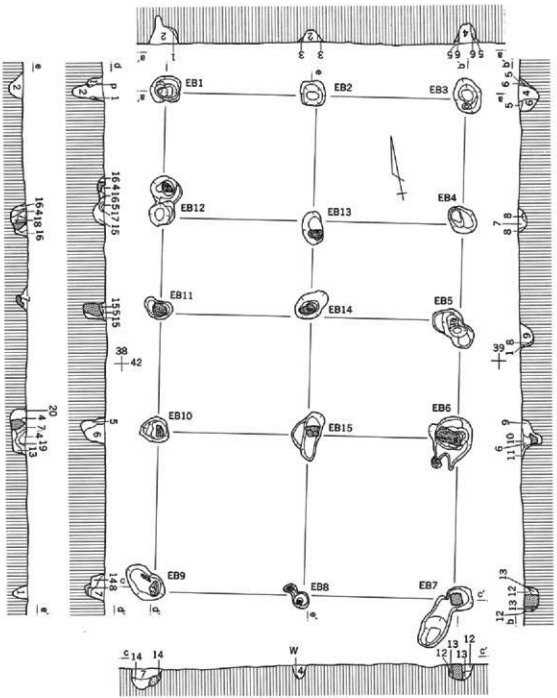
2 掘立柱建物跡（第29～33図，表6，図版16～20）

調査で掘立柱建物跡は9棟検出された。これらは，検出状況や出土遺物からいずれも平安時代の建物跡と考えられる。建物規模が2×2間のものが3棟（SB1・6・718），2×3間が2棟（SB715・717），2×4間で総柱となるものが1棟（SB2），2×5間が1棟（SB3），3×5間が1棟（SB716）であり，SB4は東側が調査区外へ延び，現況排水路に切られるため全体規模は不明である。分布状況では，2×2間で柱間距離がほぼ等間なSB1・6を除き，SD377溝跡以東の河川跡蛇行部に偏る傾向を示す。この2棟以外の身舎方向は，南北棟の主軸方位を持つものが多く，東西方向に傾くのはSB3のみである。重複関係はSB716～718の3棟に見られ，柱穴同士の切り合いからSB718→717→716の順に構築されたと考えられる。このうちSB718と717は，桁行に各々2間と3間という違いが見られるものの，規模や方向がほぼ同一なことから建替えたものとして捉えられる。重複関係からは3時期の変遷が窺われるが，他の建物跡を含め出土土器に大きな時期的隔たりは見られず，より近接した年代での変遷と考えて大過なかろう。

出土遺物は，9棟のうちSB715を除いて，須恵器，黒色及び内黒土器，赤焼土器片が柱穴覆土より出土している。器種では回転糸切り坏・甕片が主体で，坏には墨書土器が数点存在する。柱根はSB1・2・716で残存し，他の建物跡にもアタリ部を検出できるものがある。SB2では，何基かの柱穴周辺に幾つかのピットが掘り込まれ，柱根を遺存するものもあることから，支え柱の存在も考えられる。また，根固め石も出土している。



第29図 SB1掘立柱建物跡

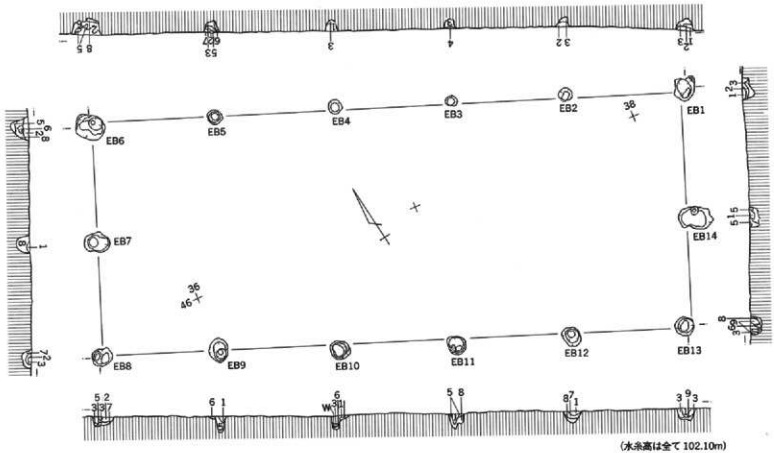


（水糸高は全て 102.40m）

1．10YR1.7/1 黒色粘土質シルト（炭化物を混入する。2.5Y4/1 黄灰色シルト質細砂をブロック状に混入し，未分解有機物を含む）
2．2.5Y2/1 黒色粘土質シルト（炭化物を含み，10YR4/1 褐灰色シルト，2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト，5Y4/1 灰色粘土をブロック・斑状にまだらに混入する）
3．2.5Y4/1 黄灰色細砂
4．10YR3/1 黒色粘土質シルト（炭化物を含み，2，2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルトをブロックで，10YR4/1 褐灰色粘土を斑状に混入する）
5．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（炭化物を含み，2，5Y3/1 オリーブ黒色シルト，2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルトをブロック，斑状に含む）
6．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（炭化物を含み，1，7，5Y4/1 灰色粘土，2.5Y4/2 暗灰黄色細砂をブロック，斑状に混入する）
7．10YR2/1 黒色粘土質シルト（炭化物を含み，1，8，5Y4/1 灰色粘土，5Y3/2 オリーブ黒色細砂をブロック，斑状にまだらに混入する）
8．2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト（均一層）
9．2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト（11 と 10YR1.7/1 黒色粘土をブロック又は雲状に混入する。よくしまる）
10．2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト（固くしまる。5Y4/1 灰色粘土質シルトを斑状に混入する）
11．5Y4/1 灰色粘土質シルト（2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルトをブロック状に混入する）
12．2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト（1 と 2.5Y4/1 灰色シルトの撹乱層）
13．2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト（均一層）
14．5Y5/1 オリーブ灰色粘土（同色シルトをブロックで含む，2.5Y4/2 暗灰黄色細砂を斑状に混入する）
15．2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト（炭化物を点状に含み 5Y4/1 灰色細砂を全体に混入する。16 より暗い）
16．2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト（7 を雲状，斑状に含む）
17．5Y4/1 灰色粘土質シルト（均一層）
18．2.5Y3/2 黒褐色細砂（10YR2/1 黒色粘土質シルトと 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルトを斑状に含む）
19．2.5Y4/1 黄灰色シルト（5Y4/1 灰色粘土質シルト，10YR2/1 黒色粘土質シルトをブロックで，まだら状に混入する）
20．2.5Y3/1 黒褐色シルト（同色粘土質シルトと 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルトをブロック状に含む）

0　1:50　2m

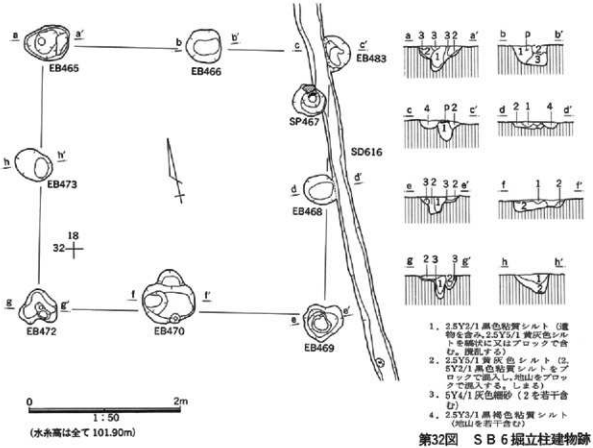
第30図　ＳＢ２掘立柱建物跡



1．10YR3/1 黒褐色粘質シルト（炭化粒，有機物，粗砂を含む）
2．10YR2/1 黒色粘質シルト（炭化粒，有機物を含み，粗砂を多く含む）
3．2.5Y4/1 黄灰色シルト（炭化粒，有機物，砂質を含み，1をブロック・レンズ状に混入する）
4．2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト（有機物，粗砂を含む）
5．2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト（有機物，粗砂を含む）
6．5Y4/1 灰色微砂（炭化粒，有機物を含む）
7．2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト（炭化粒，有機物，砂質を含む）
8．5Y4/1 灰色細砂（有機物，砂質を含み，1，5を縞状に含む）
9．5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト（炭化粒，有機物，砂質を含む）

0　4m
1：160

第31図　ＳＢ３掘立柱建物跡



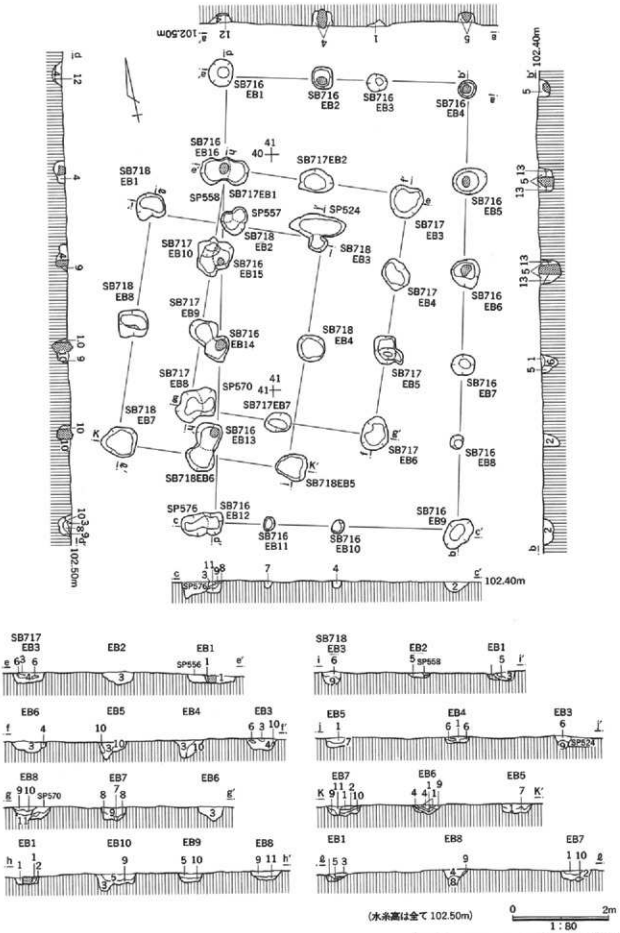
1．2.5Y2/1 黒色粘質シルト（遺物を含み，2.5Y5/1 黄灰色シルトを縞状に又はブロックで含む。攪乱する）
2．2.5Y5/1 黄灰色シルト（2.5Y2/1 黒色粘質シルトをブロックで混入し，地山をブロックで混入する。しまる）
3．5Y4/1 灰色細砂（2を若干含む）
4．2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト（地山を若干含む）

第32図　ＳＢ６掘立柱建物跡

SB716
1．10YR2/1 黒色粘土質シルト（遺物を含み，6をブロックで混入し，河砂含む）
2．10YR2/1 黒色粘土質シルト（遺物を含み，河砂（粗砂～砂利）を混入する。均一的）
3．10YR2/1 黒色粘土質シルト（10YR4/1 褐灰色砂質シルトを斑文状に混入する）
4．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（黒色炭化土を斑状に含む。5Y4/1 灰色細砂をブロック状に含む。河砂混入）
5．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（河砂～砂利を多量に混入する）
6．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（細根，未分解有機物を多く含む。かなり粘る）
7．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（10YR4/1 褐灰色砂質シルトを斑状に含む）
8．10YR1.7/1 黒色粘土質シルト（やや腐植質，酸化鉄を帯びる）
9．2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト（細砂を混入し，4，8，10をブロック，霜状に混入する）
10．攪乱層（10YR3/1 黒褐色粘土質シルトに，2.5Y5/1 黄灰色砂質シルトが塊状に混入。炭化土を斑状に含む）
11．2.5Y3/1 黒褐色粘土（河砂，層上部に入る）
12．5Y4/1 灰色細砂（4を霜状に混入する）
13．粗砂～砂利～小礫層

SB717
1．10YR2/1 黒色粘土質シルト（黒色炭化土を斑状に含む。5Y4/1 灰色細砂をブロック状に含み，河砂混入し，酸化鉄分含む）
2．10YR2/1 黒色粘土質シルト（2.5Y4/1 黄灰色細砂をブロックで含む）
3．10YR2/1 黒色粘土質シルト（河砂～小礫を多く含む）
4．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（河砂～砂利を多く含み，黒色粘土質シルトを帯状に混入する）
5．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（河砂を混入し，SB716の4との混合物を斑状に含む）
6．10YR4/1 褐灰色粘土質シルト
7．2.5Y4/1 黄灰色粘土質細砂（河砂を混入する）
8．2.5Y4/1 黄灰色粘土質細砂（9のブロックを若干含む。自然層）
9．攪乱層（5の基本土に 7.5Y4/1 灰色砂質シルトをブロックでまだらに含み，10YR2/1 黒色腐植有機質土を塊で含む）
10．河砂層（3，10YR1.7/1 黒色粘土質シルト，2.5Y4/1 黄灰色細砂のブロックをまだら状に混入する）
11．2.5Y4/1 黄灰色細砂（9の混合物を斑状，霜状に混入する）

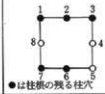
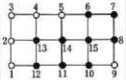
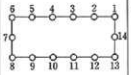
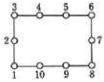
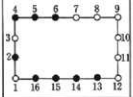
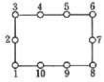
SB718
1．10YR1.7/1 黒色粘土（6，10，2.5Y4/2 暗灰黄色粘土をブロック，斑状に含む）
2．10YR1.7/1 黒色粘土（10をブロックで含む）
3．10YR2/1 黒色粘土質シルト（10YR3/1 黒褐色粘土質シルトを霜状に混入する。酸化鉄分を含む）
4．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（1をまだらに混入し，河砂を塊で含む。2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルトをブロック状に混入する）
5．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（黒色炭化土と 5Y4/1 灰色砂をブロック，斑状に含む。全体に砂質がかる）
6．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（1，黒色腐植有機質土，河砂を霜状，斑状に含む）
7．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（2.5Y3/1 黒褐色の砂質シルトに部分的に移行する。2.5Y4/1 黄灰色砂質シルトを大ブロックで混入する）
8．10YR2/1 黒色粘土質シルト（細根，未分解有機物を含む。河砂を少量含む。柔かい）
9．2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト（1，2.5Y4/2 暗灰黄色粘土，細砂をブロック又は斑状に含む）
10．2.5Y4/1 黄灰色粘土質細砂（1をブロック状に含む）
11．10YR3/2 黒褐色粘土質細砂（部分的にシルトで，1と9と 2.5Y4/2 暗黄色粘土の斑文をまだらに混入する）
12．2.5Y3/1 黒褐色砂（地山をブロック状に含む。漸移層）



(水糸高は全て 102.50m)

第33図　ＳＢ716～718掘立柱建物跡

表6　掘立柱建物跡観察表

	構成図	方向	規模	柱間寸法	掘り方・覆土	出土遺物	備考
SB 1	 ●は柱根の残る柱穴	南北軸 N-11°-E	南北 3.6m 東西 3.2～3.3m 11.5m² (3.6坪)	南北 EB3・4間 1.9m EB4・5間 1.7m EB7・8間 2.0m 東西 EB2・3間 1.7m 他 1.6m(約5尺)	径40～108cm。 不整円形，不整楕円形。 覆土は，2～3層で，シルトと砂層。 確認面からの深さは，26～38cm。	EB4，6より須恵器坏片出土。糸切。墨書。	柱根のないEB4，5，8は掘り返し，再利用。
SB 2		長軸 N-12°-E	梁行 4.1～4.2m 桁行 6.6m 27.1m² (8.5坪)	梁行 EB1・2間 2.0m 桁行 EB3・4・5・6間 1.7，1.5，1.3m EB2・13・14・15・8間 1.8，1.0，1.6，2.2m EB1・12・11・10・9間 1.6，1.3，1.5，2.2m 他 2.1m(7尺)	径26～78cm。 不整円形，不整楕円形。 覆土は，基本的に2層で，粘土質シルト。 確認面からの深さは，18～39cm。	EB1，2，3，4，6，7，9，13で，赤焼，須恵器，内黒坏片甕片出土。EB6より桃の種。	総柱で，EB3が，SD341を切り，EB5・SP284，EB6・SP413～415，EB7・SP417～420，EB12・SP289，EB13・SP287，SB15・SP421を各々切る。
SB 3		長軸 N-59°-W	梁行 4.9～5.0m 桁行 12.4～12.6m 60.8m² (18.8坪)	梁行 EB6・7間 2.5m EB14・1間 2.6m 桁行 EB1・2間 2.0m EB3・4間 2.5m EB4・5間 2.5m EB5・6間 2.6m EB8・9間 2.6m EB10・11間 2.5m EB11・12間 2.5m 他 2.4m(8尺)	径15～55cm。 不整円形。覆土は，2～3層で粘土質シルトに粗砂を含んでいる。 確認面からの深さは，20～39cm。	EB1，13より赤焼，須恵器坏片が出土。	SP446がEB14を切る。 比高差かなり低く，上部削平をつける。
SB 4	 数字はSP番号	東西検出軸 N-80°-W	南北 3.9m 東西検出部 1.8～2.0m以上 7.0m²以上 (2.0坪以上)	南北 EB433・434間 1.9m 東西 EB432・435間 1.8m 他 2.0m(約7尺)	径49～78cm。 不整円形，不整楕円形。 覆土は，2～3層で粘土質シルト。 確認面からの深さは，22～30cm。	EB433より赤焼，須恵器，坏片，甕片が出土。	東半部，排水路により未検出。
SB 6	 数字はSP番号	南北軸 N-13°-E	南北 3.5m 東西 3.7～3.9m 13.0m² (4.1坪)	南北 EB472・473間 1.8m EB468・483間 1.8m 東西 EB432・435間 1.8m EB469・470間 2.0m 他 2.0m(約7尺)	径43～82cm。 不整円形。覆土は，基本的に3層で，粘質シルト，シルト，細砂。 確認面からの深さは，9～33cm。	EB483よりほぼ完形の須恵器坏。糸切。	EB468，483がSD616に切られる。
SB 715		長軸 N-9°-E	梁行 4.0m 桁行 5.5m 22.0m² (6.9坪)	梁行 EB1・2間 1.9m EB2・3間 2.1m EB7・8間 2.0m EB7・8間 2.0m 桁行 EB3・4間 1.9m EB8・9間 2.4m EB9・10間 1.3m 他 1.8m(6尺)	径22～53cm。 不整円形。覆土は，3層で，粘土質シルトと細砂。 確認面からの深さは，9～24cm。		SP829を切る。柱根は残らずアタリ検出。
SB 716		長軸 N-13°-E	梁行 5.1～5.2m 桁行 9.5～9.7m 48.5m² (15.2坪)	梁行 EB1・2・3・4間 2.1，1.2，1.9m EB9・10・11・12間 2.5，1.4，1.2m 桁行 EB5・6・7・8・9間 1.9，1.7，1.9m EB13・14・15間 1.9，1.8m 他 2.0m(約7尺)	径18～56cm。 不整円形。覆土は，1～2層で，粘土質シルトに河砂を含む。 確認面からの深さは，13～45cm。	EB8，12，13より赤焼，須恵器坏片出土。糸切。	EB13で，SB718，EB6を切り，EB14，15，16でSB717，EB9，10，1を切る。 桁行の間尺が大きく違う。
SB 717		長軸 N-20°-E	梁行 4.0m 桁行 4.9～5.1m 20.4m² (6.4坪)	梁行 EB1・2間 2.0m EB2・3間 2.0m EB6・7間 2.1m EB7・8間 1.9m 桁行 EB4・5間 1.7m EB9・10間 1.8m EB10・1間 1.7m 他 1.6m(約5尺)	径30～53cm。 不整円形，不整楕円形。 覆土は，2～3層で，粘土質シルトに河砂を含む。 確認面からの深さは，15～37cm。	EB1，3，4，5，6より，赤焼，須恵器，内黒坏片甕片出土。糸切。墨書。	
SB 718		南北軸 N-20°-E	南北 4.8～5.2m 東西 3.7～3.8m 17.8m² (5.6坪)	南北 EB3・4間 2.3m EB4・5間 2.5m EB7・8間 2.6m EB8・1間 2.6m 東西 EB6・7間 1.8m 他 1.9m(約6尺)	径31～55cm。 不整円形，隅丸方形。覆土は，基本的に2層で，粘土質シルト。 確認面からの深さは，10～36cm。	EB6より，内黒，両黒，坏片出土。糸切。	

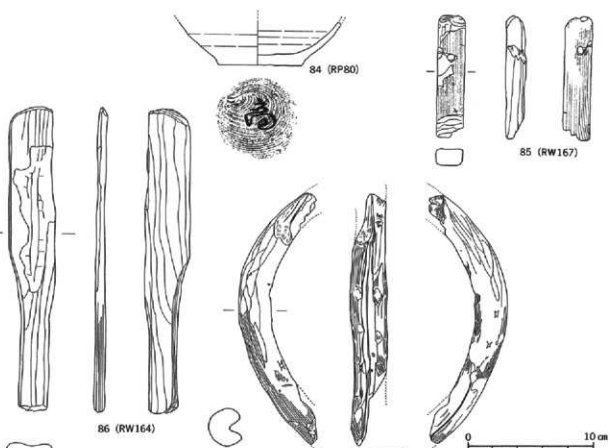
3　井戸跡（第34～36図，図版21・22）

ＳＥ181　Ａ区中央部のＳＤ390に北接して検出された，井桁組の構造を持つ井戸跡である。井戸跡の分布形態として建物跡に付随する構成要素が一般的であるが，調査では本井戸跡の主体となるべき建物跡が確認できなかった。

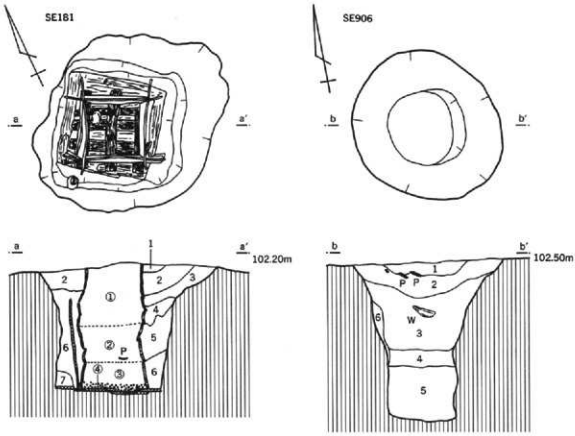
掘り方の検出プランは，長径1.70×短径1.36m を測る不整楕円形を呈し，深さは確認面から1.04m を測る。周壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり，東側では途中から緩やかに外反する。平坦な基底面には，井戸枠の沈下防止対策として幅５～８cm，長さ50～55cm，厚さ１cm前後の矢板材が，縦横交互で二重ないし三重の方形状に敷かれている。井戸枠となる矢板は幅７～18cm，長さ68～79cm，厚さ１cm内外の板材を使用し，先端を凹・凸状またはほぞ穴状に加工して８段に組み上げている。また底面敷板上には，約５mm径の石灰岩を５cm程の厚さに敷き詰めていることから，水の浄化を謀ったことが理解される。

遺物は実測可能なものとして掘り方埋土より底部に墨書のある須恵器坏(84)，井戸枠内から木製品３点（85～87）が出土している。枠内最下層の底面直上より，断片資料だが赤焼土器の回転糸切り坏が出土しており，掘り方出土の須恵器と合わせその構築年代は概ね９世紀後半と比定される。

ＳＥ906　Ｃ区西辺部ＳＢ715の南側に位置する素掘りの井戸跡である。掘り方は径1.20m 前後の不整円形を呈し，検出面からの深さは1.20m を測る。覆土は５層に分かれ，下層部は細砂のグライ化層，上層部は木片を多く含む黒色土が堆積する。遺物は須恵器・赤焼土器・土師器の各器種が出土しているが，破片資料なため年代を特定するには充分でない。



第34図　ＳＥ181出土遺物



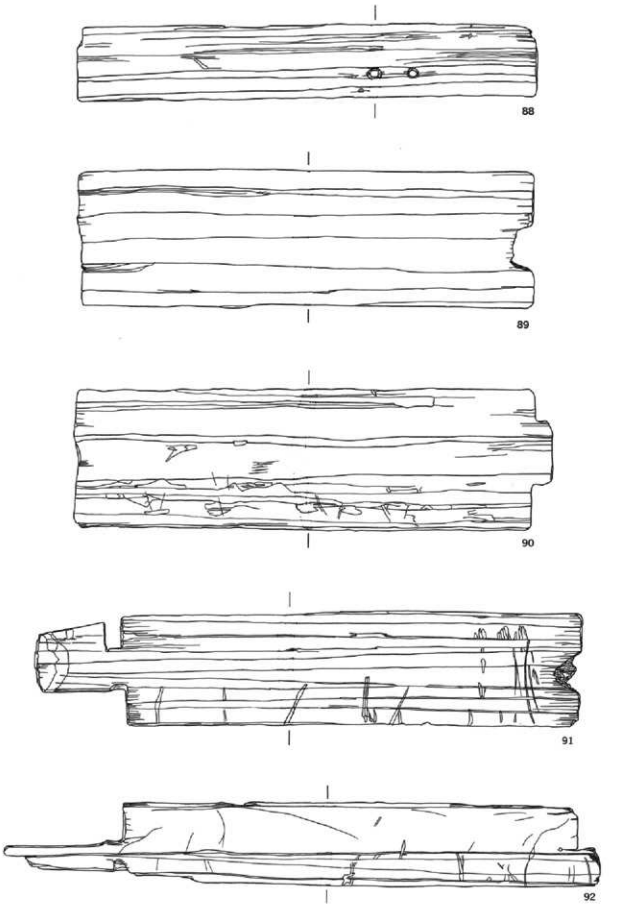
SE906
1．7.5YR2/1 黒色粘質シルト（固くしまる。パミス粒を含み，細根を含む。炭化物を縦状に含み，遺物を含む）
2．10YR2/1 黒色粘土質シルト（炭化物を混入し，未分解有機物をはさむ。層上部に土器を含む）
3．10YR3/1 黒褐色粘土質シルト（細根他。未分解有機物に富む。柔かく，よく粘る。木片，カヤを含む）
4．5Y3/1 オリーブ黒褐色粘土質細砂（有機物に富む）
5．5Y4/1 灰色砂（ロジを多く含む。やや泥炭質。均一的）
6．2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト（純粋層）

SE181
① 10YR2/1 黒色粘土質シルト（酸化鉄溶脱。10YR4/1 褐灰色シルトを縦状に含み，粗砂～小礫を全体に混入する。層上部で炭化物を少量含む。未分解有機物を全体に混入する）
② 10YR2/1 黒色粘土質シルト（①に同じ。腐植～ほぼ炭化した木枝，未分解有機物を多量に混入する）
③ 10YR2/1 黒色粘土質シルト（①に同じ。細根・未分解有機物を含む）
④ 5Y4/1 灰色細砂（灰白色石灰岩と少量の礫を散きつめる）

1．2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト（10YR1.7/1 黒色粘土質シルト～粗砂混じりをブロックで含み，2.5Y4/1 黄灰色シルト塊をまだらに混入する）
2．2.5Y3/2 黒褐色細砂（10YR1.7/1 黒色粘土質シルト～粗砂混じりを縦状に含み，1を斑状に 2.5Y4/1 黄灰色シルトをブロック状に混入する）
3．10YR1.7/1 黒色（粗砂混じり）粘土質シルト～2をまだら状に混入する攪乱層
4．2.5Y3/1 黒褐色粘土（10YR1.7/1 黒色粗砂混じり粘土質シルトを層状に含む。未分解・ほぼ粘土化した有機物をはさむ）
5．10YR1.7/1 黒色（粗砂混じり）粘土質シルト（未分解・腐植有機物を多く含む）
6．5Y4/1 灰色細砂（細根。未分解・腐植有機物を多く含む）
7．2.5Y4/1 黄灰色粘土（10YR1.7/1 黒色粗砂混じり粘土質シルトをブロック状に含む）

0　1m
1：30

第35図　ＳＥ181・906井戸跡



第36図　ＳＥ181井戸跡

4 土 壙（第37・38図，図版23・28）

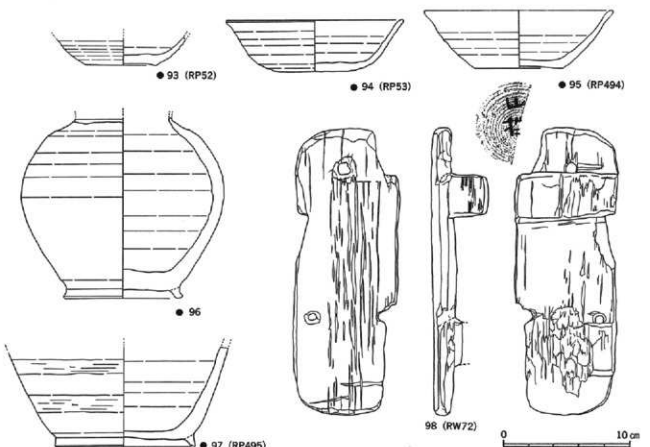
土壙として登録した遺構は53基を数え，全て平安時代に帰属する。これらは，その形態や規模等の特徴から幾つかの類型化が可能である。ここでは，以下に分類する類型において代表的な土壙を取り上げ，その概略を述べる。

A類：径２ｍ未満，深さが20cm未満の，略円形を基調とし断面形が浅い船底形を呈する土壙を一括して本類とする。ＳＫ22・40・903・905等が該当し，最も多いタイプである。覆土は黒色粘質土を基調とする。遺物は破片資料が主体であるが比較的多く包含されるのが特徴で，ＳＫ903出土の須恵器壷(96)・鉢(97)は一次的在り方の遺存状況を示す。

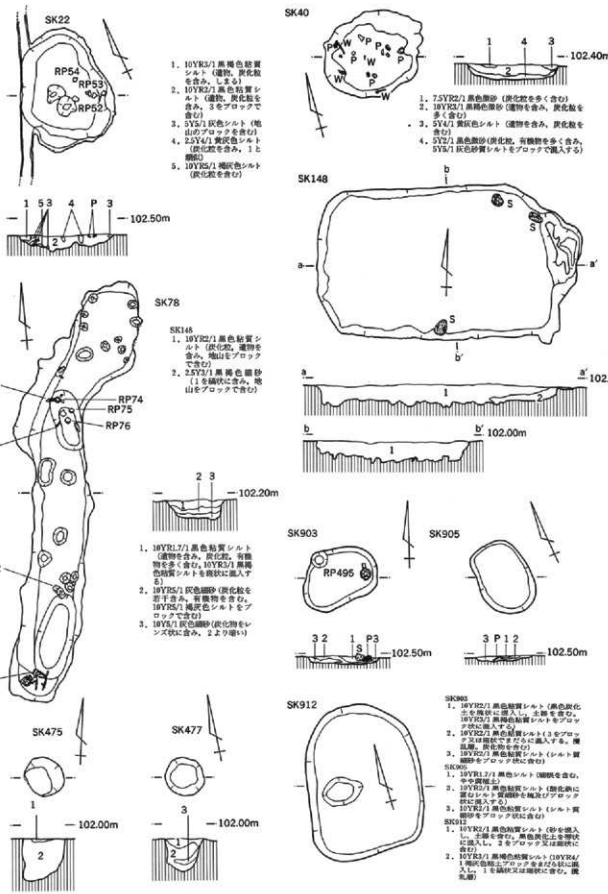
B類：径１ｍ未満，深さが50cm以上を測るもので，径が小さい割りに掘り込みの深いのが特徴である。ＳＫ475・477の二例が該当し，Ｂ区西半中央部のＳＢ６南側に分布する。側壁の断面形態が円筒状を呈し，覆土は黒色粘土を基調とする人為的埋土である。

C類：長径２ｍ以上を測る大型の土壙で，ＳＫ148・912に代表される。平面形は隅丸長方形で，深さは30cm以下である。ＳＫ148は底面がかなり凹凸で，覆土は黒色土の単純層で成り自然堆積でないことが明白である。ＳＫ912は底面にピット状の掘り込みを有する。

D類：長径が５ｍ以上の長大な一群で，形態的には溝状に近い細長い土壙である。ＳＫ78等がこの類型に属し，Ａ区北東域で３基がコの字状に並んで分布する。確認面からの深さは一定せず，底面はいたる所に掘り込みが見られる。出土遺物には木製品が多く認められるのが特徴的で，赤焼土器を主体に須恵器・内黒土師器坏が覆土中から出土している。



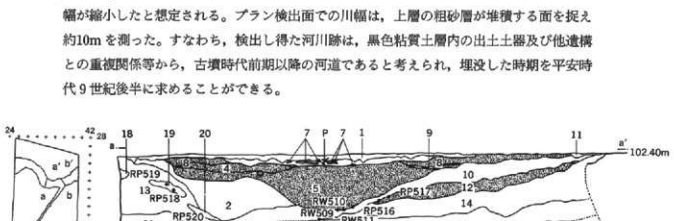
第37図 土壙出土遺物



第38図 ＳＫ22・40・78・148・475・477・903・905・912土壙

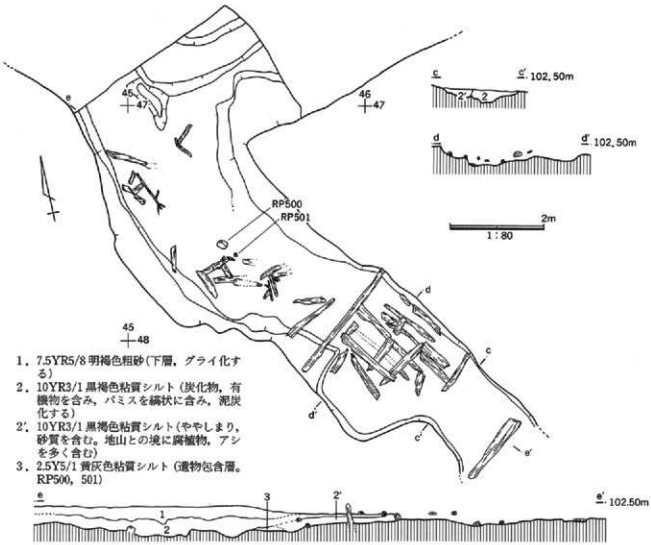
5　河川跡（第39～44図，図版24・25）

ＳＧ200は，A～C調査区のほぼ中央部を東西方向に横断する。河川跡検出面の覆土は平安時代の遺物を多く含む黒色粘質土と粗砂に分かれる。A区東辺部ではこの黒色粘質土が広範に堆積するため，木製品を含めた当該期の遺物が一括出土している。幅３ｍのトレンチを２箇所に設定して掘り下げたところ，粗砂層の下層に遺物を包含する粘質土が確認され，川幅が広がるものと判断された。したがって河床と考えていた粘質土層をさらに掘り込んだところ，覆土中より古式土師器片が出土したため，河床はより下がることが判明した。断面調査の結果，粗砂層が上下２層に堆積しており，河川は２度の洪水を起こしたことが窺える。河道が形成され，洪水を繰り返す毎に遷ばれた粗砂の堆積により，徐々に川幅が縮小したと想定される。プラン検出面での川幅は，上層の粗砂層が堆積する面を捉え約10ｍを測った。すなわち，検出し得た河川跡は，黒色粘質土層内の出土土器及び他遺構との重複関係等から，古墳時代前期以降の河道であると考えられ，埋没した時期を平安時代９世紀後半に求めることができる。



1. 10YR2/1 黒色粘質シルト（遺物を含み，炭化粒，有機物を含む）
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト（炭化粒を多く含み，細砂を互層に多く含む。5Y5/2 灰オリーブ色微砂をブロックで含む）
3. 7.5Y5/6 明褐色細砂（２を縞状に siltで含む）
4. 5Y5/2 灰オリーブ色粘砂（２を縞状に siltで含む）
5. 10YR5/1 灰色細砂（下面中央部について，粘砂が薄し最下面は，礫質。5の下面より RW509，510，511）
6. 10YR2/2 黒褐色粘質シルト（有機物を多く含み，7をブロックで含む）
7. 10YR4/2 炭黄褐色粘質シルト（６と同質で，７を縞状に含む）
8. 2.5Y7/4 浅黄色粘質シルト（パミス）
9. 5Y5/1 灰色細砂（９を縞状に多く含み，炭化粒，有機物を含む。上面のたくしまり，下面粗砂に漸化する）
10. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト（有機物を含む）
11. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト（炭化粒，有機物を含む。RW512）
12. 10YR2/1 黒色粘質シルト（１と同質で，８のブロックを含む。）
13. 2.5Y4/1 黄灰色粘砂（炭化粒，有機物を含み，粘質土を縞状に含む。RP516，517）
14. 5Y4/1 灰色粗砂と 10YR4/1 褐灰色粘質シルトの互層（15～20 を成す含み，2.5Y4/1 黄灰色粘質シルトを縞状に含む。RP520）
15. 7.5Y4/1 黄灰色粘質シルト（炭素物，玉，礫を含み，中砂を含む）
16. 7.5Y5/1 灰色細砂と 10YR4/1 褐灰色粘質シルトの互層（13 と同質で，炭化粒，腐植物を多く含み，下面粗砂に漸化する）
17. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト（礫を縞状に含み，加工痕のある材を含み，遺物を含む。RP522）
18. 10YR5/1 灰色粘質シルト（下層につれて礫を粗くなり，礫化する。RP521）
19. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
20. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト（遺物を含む。RP518，519）
21. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト（炭化粒を含む）
22. 10YR2/1 黒色粘質シルト（炭化粒を多く含む）
23. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト（炭化粒を多く含む）
24. 10YR5/1 灰色粗砂（17 と同質で，下層につれて礫を粗くなり，礫化する）
25. 10YR5/1 灰色細砂と 10YR2/1 黒色粘質シルトの互層（炭化粒を含み，6'をブロックで混入する）
26. 10YR2/1 黒色粘質シルト（有機物を含む）

第39図　ＳＧ200河川跡断面図

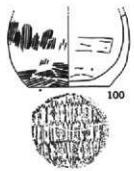


第40図　ＳＧ200河川跡木組

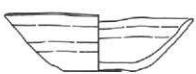
第40図は，Ｃ区南部45・46－47・48Ｇに検出された木組で，河川より水を引くための用水路跡と考えられる。ＳＧ200より南東方向へ引かれ，検出できた長さは約９ｍである。幅0.9～3.5m を測り，南東部ほど狭まる。深さは検出面より16～66cmを測り，南東部がやや高くなる。木組は，水路中央部に1.2m 前後の杭を打ち込み，ほぞ穴を空けた丸太状の横木と組んだ状態で検出された。また，横木に直交する材や倒れた杭なども存在し，木組全体の長さは4.4m に及ぶ。床面直上から土師器器台（99）や甕の口縁部が出土しており，これら出土遺物や堆積土から住居跡群と同じ時期に構築されたと考えられる。

河川跡の出土遺物は，上部粗砂層を境にして平安時代と古墳時代に分けられる。平安時代の遺物には，土師器（甕・鉢），須恵器（坏・高台坏・甕），赤焼土器（坏・高台坏），黒色土器（坏・高台坏），木製品（木簡・椀など），石製品（紡錘車），自然遺物（種子）がある。坏類には墨書土器が多く，111の底部に役所を意味する「調所」の文字が認められる。須恵器甕（122・123）では，口唇を短くつまみ上げる特徴が見られる。木簡（125，第３号）には日付や公根額が記されている。古墳時代の遺物の大半は木製品で，粗砂層直下より天童市西沼田遺跡に類似する加工木（129・132・134・135）がまとまって出土している。

99 (RP501)

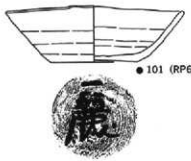

100

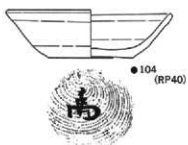
●103 (RP394)

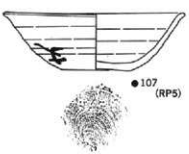

●106

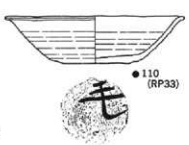
●109 (RP402)

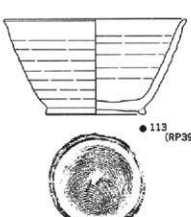
●112 (RP399)

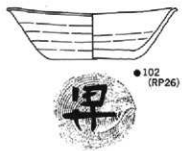

●101 (RP60)

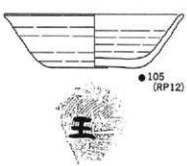

●104 (RP40)

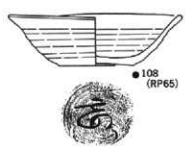

●107 (RP5)

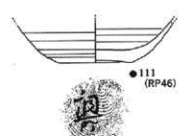

●110 (RP33)

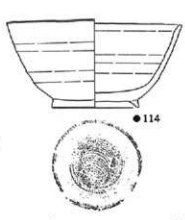

●113 (RP398)


●102 (RP26)

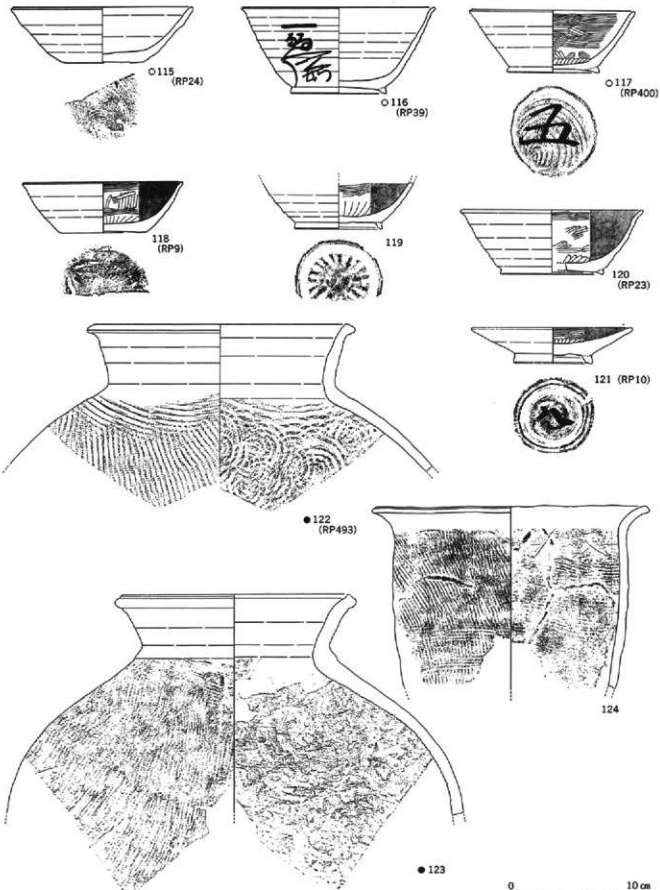

●105 (RP12)


●108 (RP65)

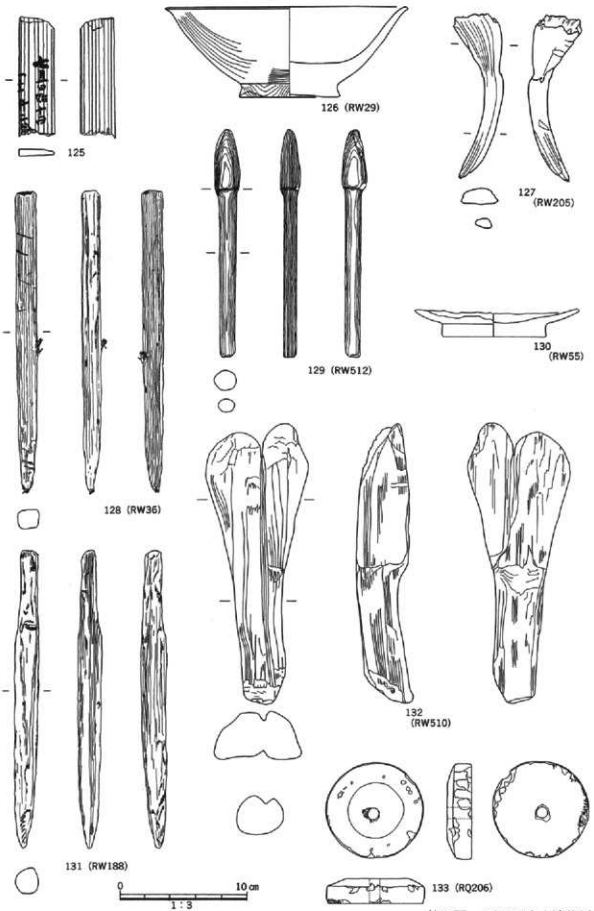

●111 (RP46)


●114

第41図　ＳＧ200出土遺物(1)



第42図　ＳＧ200出土遺物(2)



第43図　ＳＧ200出土遺物(3)

第44図　ＳＧ200出土遺物(4)

6 溝 跡（第45～55図，図版26～28）

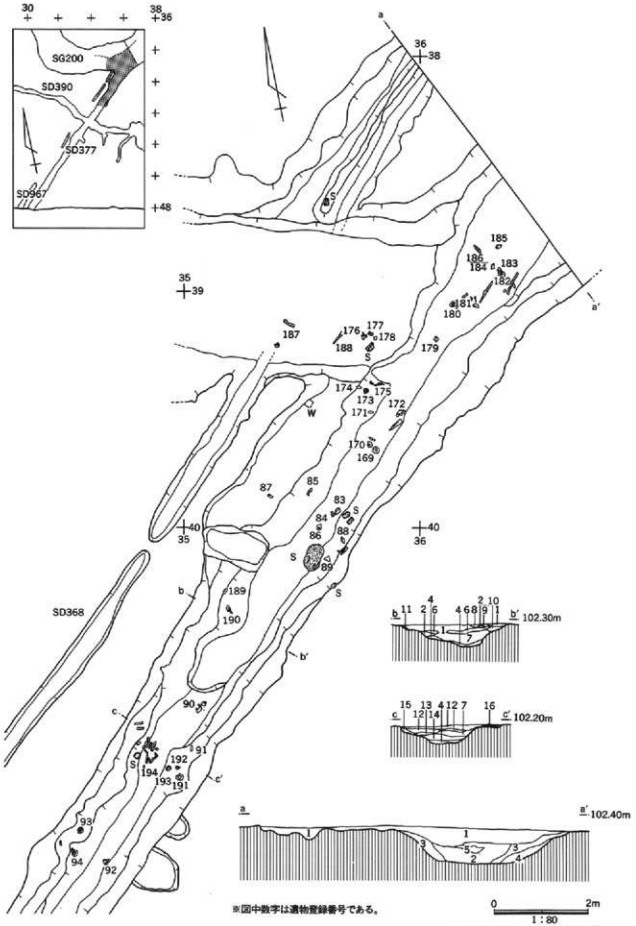
調査で確認し得た溝跡及び畝状遺構は，257条である。ここでは，墨書土器を主体に平安時代の遺物が一括出土したＳＤ377，ＳＤ625の２条の溝跡についてその概要を述べる。

ＳＤ377はＡ区南半の中央部で検出した，ＳＧ200より南西方向に延びる溝跡である。検出長は約60m，幅1.8～3.2m，深さ32～76cmを測る。主軸方位はＮ－45°－Ｅで，ほぼ直線的な走向をとる。側壁の立ち上がりが一様ではなく，段を築く掘り方が両側で認められ，北半ほど緩やかで南半部においてはやや急傾となる。底面レベルは，河川跡と重複する付近で一段深く掘り込まれて低くなるが，南向するに従い若干の起伏を有しながら緩い傾斜で徐々に下がる。河川跡との切り合いについて，プラン検出時にその重複関係は確認できなかったが，断面観察の結果溝跡は河川跡を切ることが判明した。覆土は，遺物を含む黒色粘質土の間に砂層が堆積し，遺物包含層を上下に分ける。この間層の砂は，河川跡重複部付近では粗砂を主体として厚く堆積するが，南下するにつれて粒子が細かくなる。

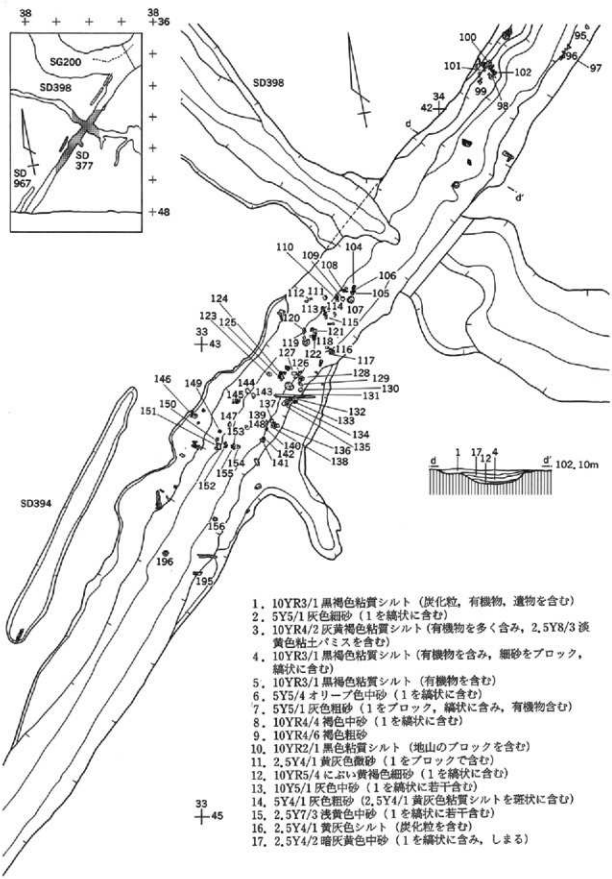
遺物は須恵器・赤焼土器・内黒土師器の各器種が認められ，番号を付して取り上げた完形・半完形品は113点を数える。器種では須恵器坏（138～151）が圧倒的に多く，底部切離の手法によりヘラ切りと回転糸切りの２類に大別される。138は底径が口径の６割を越え体部の外傾度が小さいヘラ切り坏で，他に比べ形態的に古い様相を示す。主体を占める回転糸切り坏は，口縁部の外反するものが多く見られる。赤焼土器・内黒土師器の有台坏を含めこれらの底部もしくは体部には，「王」「高」「田宅」等の墨書が認められる。154の体部外面に三体の人物が表され，また内面には「一等書生伴」と読める墨書が横位で記されている。木製品では，公稷の請求文書と考えられる木簡（165，第二号）が出土している。また164は，本溝跡の西隣りを並行して走るＳＤ967より出土した，上級官司から被管官司に宛てた下達文書と考えられる，年代の明記された木簡（第一号）である。

ＳＤ625は，Ｂ区東半部で検出された主軸を南北方向にとる溝跡である。ＳＧ200を切り，「く」の字状に曲がる近代の排水路跡に南・北部を切られるため，検出し得た長さは約35mである。幅1.9～4.0m，確認面からの深さ18～48cm，主軸方位はＮ－17°－Ｅを測る。掘り方は底面に向かって緩やかに掘り込まれ，検出北半部では底面中央部を一段深く掘り込んでいる。底面レベルは南端部が101.82m，北端部で101.55mと若干の起伏を持ちながら北に向かって緩やかに下がる。覆土は，黒褐色粘質土の単一層である。

出土遺物は土器が大半を占め，曲物底や棒状の加工木が数点存在する。土器では，須恵器坏・高台坏・甕，赤焼土器坏・高台坏・皿・甕・鉢・鍋，黒色（内黒・両黒）土器高台坏の各器種が出土しており，登録して取り上げた数は164個体である。遺物の分布状況は，22－32Ｇに位置する窪地状の落込みに密集する傾向を示し，意識的に一括廃棄した状況が推測される。この地点に遺存する土器の器種では須恵器坏が圧倒的に多く，またそのほとんどが墨書土器である。文字には，「丽」もしくは「一丽」「生」「石」「田高」などが認められる。これら墨書文字は底部内外面や体部にも見られ，一個体の数箇所に書かれる例もある。このような墨書土器の一括出土状況からは，祭祀的な様相が窺い知れる。



第45図　ＳＤ377溝跡(1)

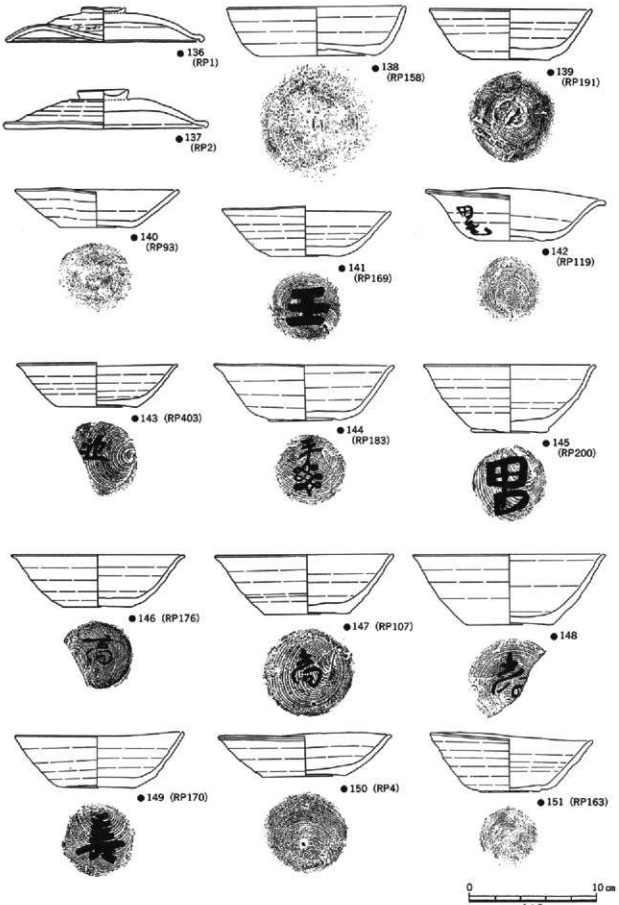


1．10YR3/1 黒褐色粘質シルト（炭化粒，有機物，遺物を含む）
2．5Y5/1 灰色細砂（1を縞状に含む）
3．10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト（有機物を多く含み，2.5Y8/3 淡黄色粘土ブロックを含む）
4．10YR3/1 黒褐色粘質シルト（有機物を含み，細砂をブロック，縞状に含む）
5．10YR3/1 黒褐色粘質シルト（有機物を含む）
6．5Y5/4 オリーブ色中砂（1を縞状に含む）
7．5Y5/1 灰色粗砂（1をブロック，縞状に含み，有機物含む）
8．10YR4/4 褐色中砂（1を縞状に含む）
9．10YR4/6 褐色粗砂
10．10YR2/1 黒色粘質シルト（地山のブロックを含む）
11．2.5Y4/1 黄灰色微砂（1をブロックで含む）
12．10YR5/4 にぶい黄褐色細砂（1を縞状に含む）
13．10Y5/1 灰色中砂（1を縞状に若干含む）
14．5Y4/1 灰色粗砂（2.5Y4/1 黄灰色粘質シルトを斑状に含む）
15．2.5Y7/3 浅黄色中砂（1を縞状に若干含む）
16．2.5Y4/1 黄灰色シルト（炭化粒を含む）
17．2.5Y4/2 暗灰黄色中砂（1を縞状に含み，しまる）

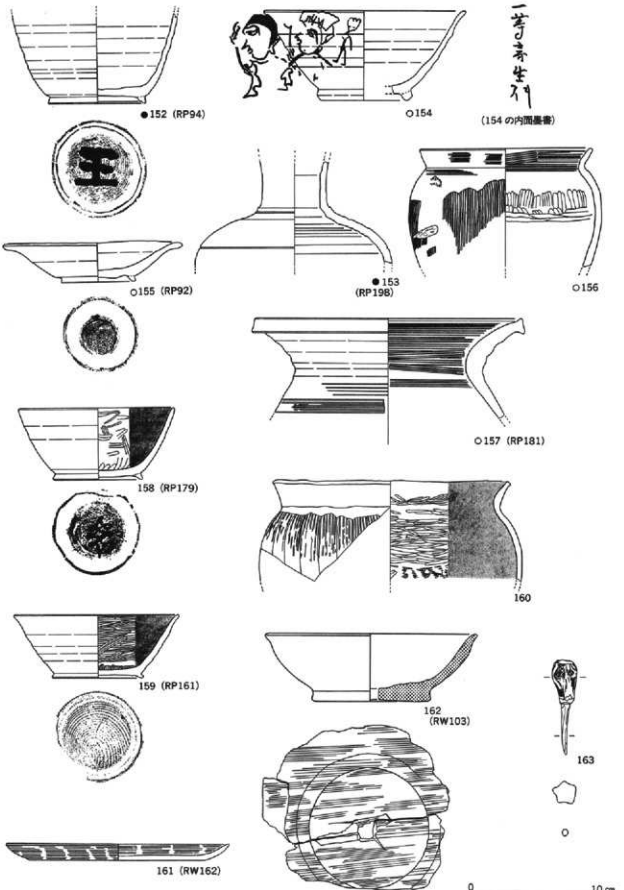
※図中数字は遺物登録番号である。

0 2m
1：80

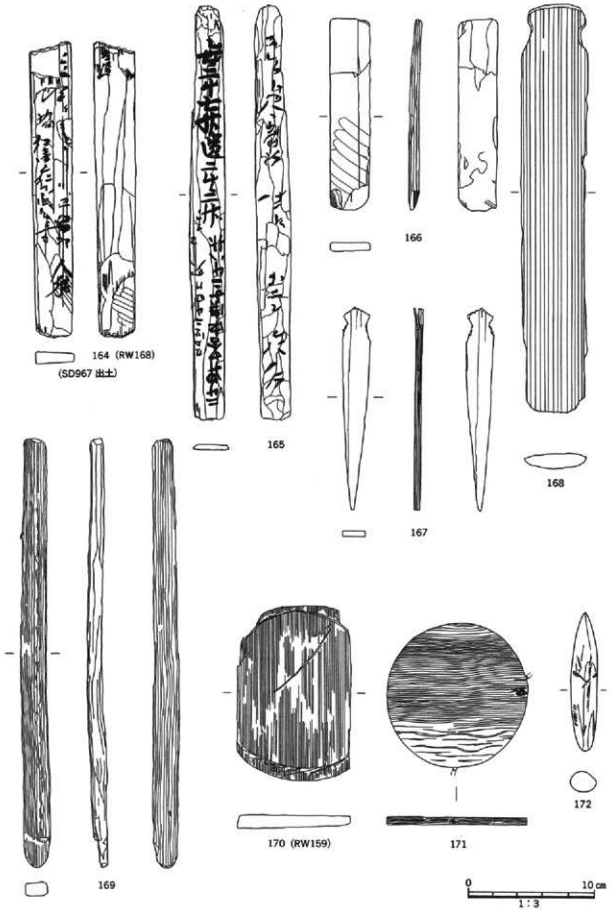
第46図　ＳＤ377溝跡(2)



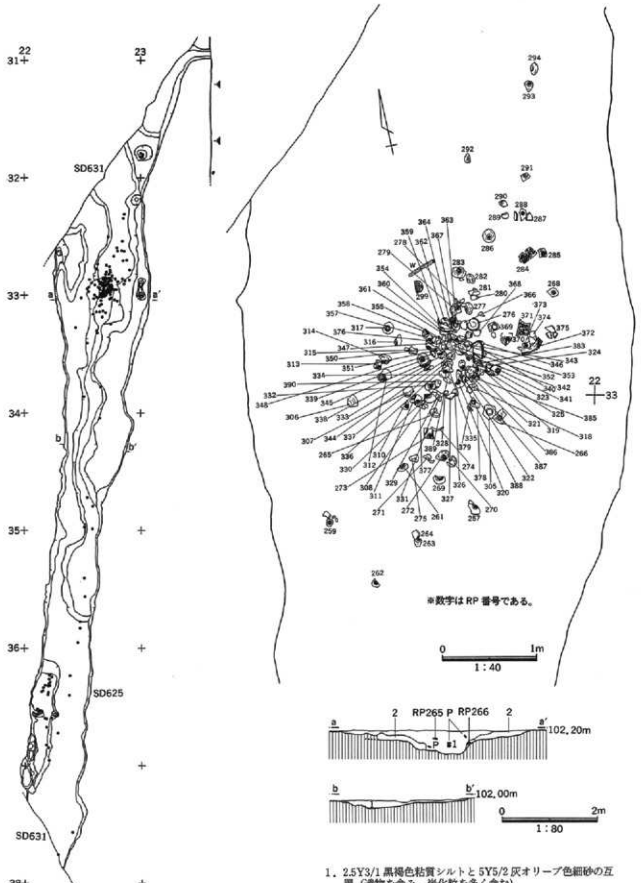
第47図　ＳＤ377出土遺物(1)



第48図　ＳＤ377出土遺物(2)

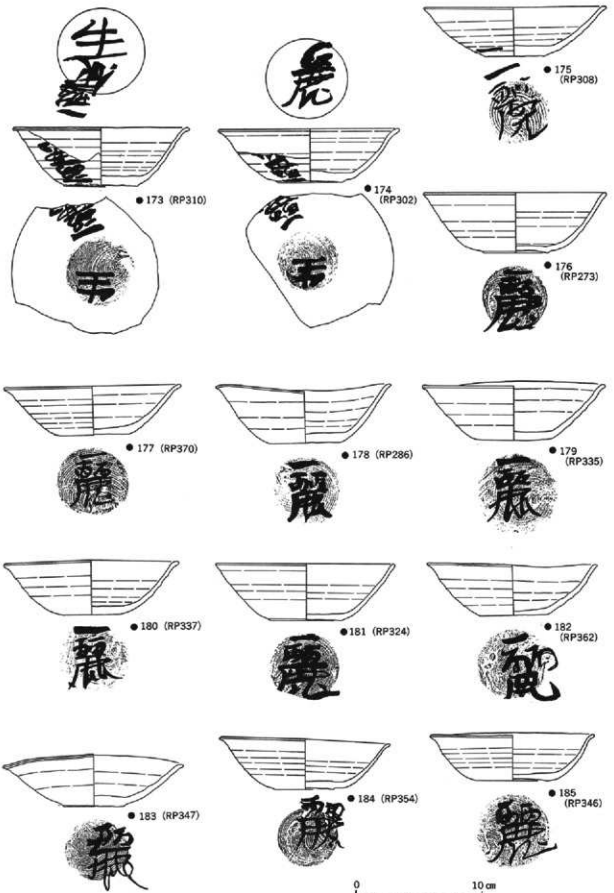


第49図　ＳＤ377出土遺物(3)

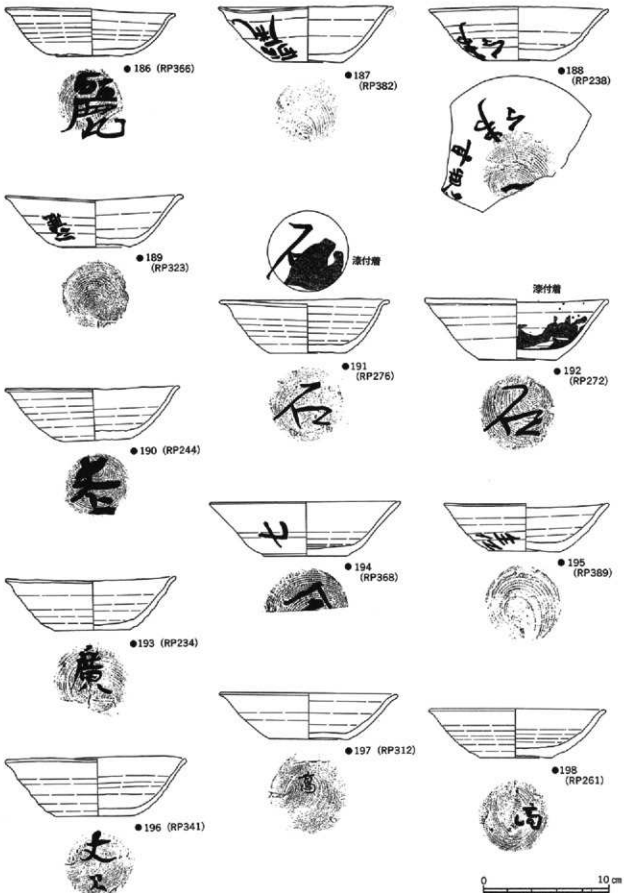


1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルトと5Y5/2 灰オリーブ色細砂の互層（遺物を含み，炭化粒を多く含む）
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト（旧河川覆土で，有機物を多く含み，地山の粗砂にもぐる）

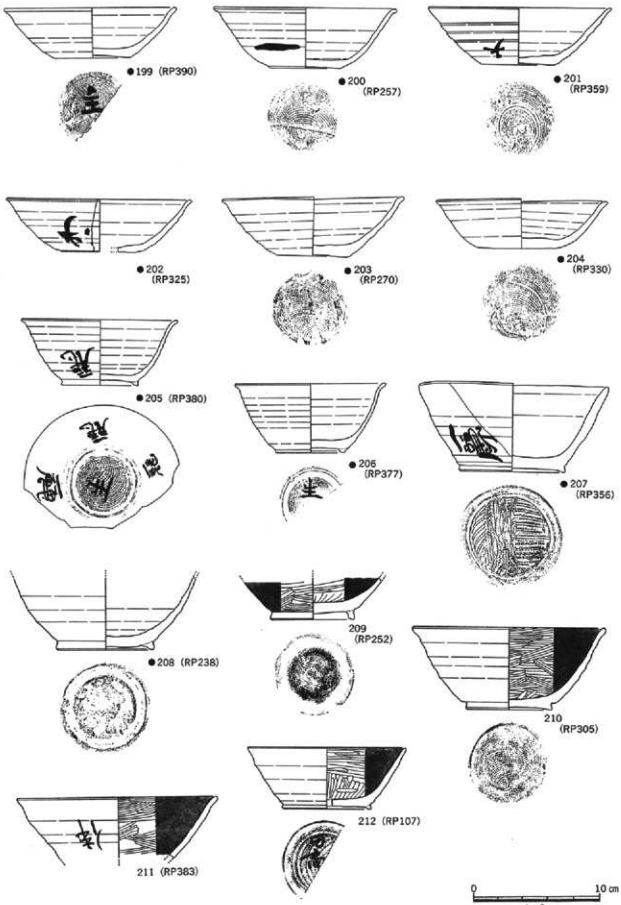
第50図　ＳＤ625溝跡



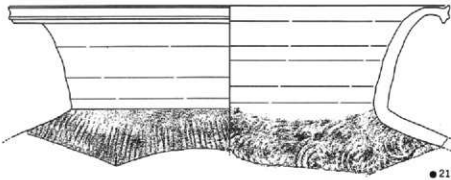
第51図　ＳＤ625出土遺物(1)



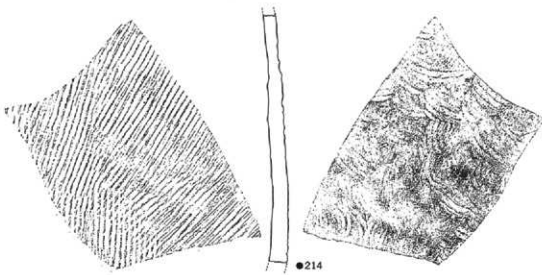
第52図　ＳＤ625出土遺物(2)



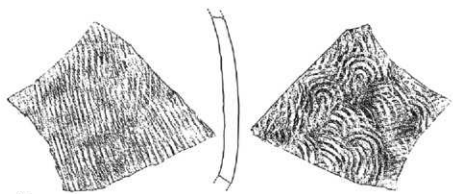
第53図　ＳＤ625出土遺物(3)



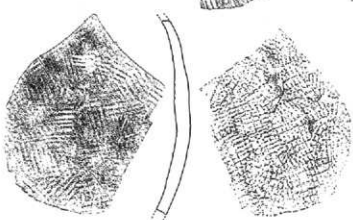
●213 (RP372)



●214



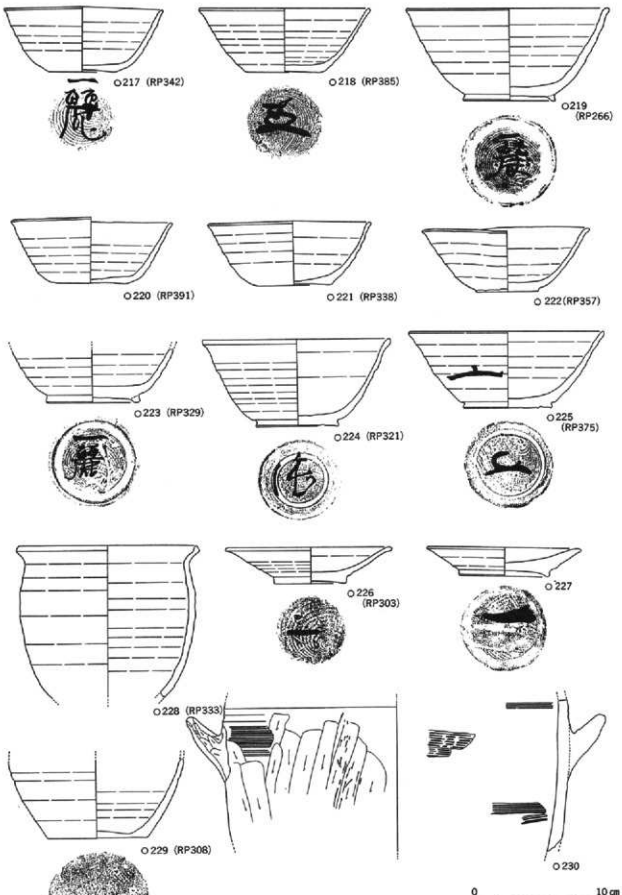
●215
(RP250)



●216 (RP307)

0 10cm
1:3

第54図　ＳＤ625出土遺物(4)



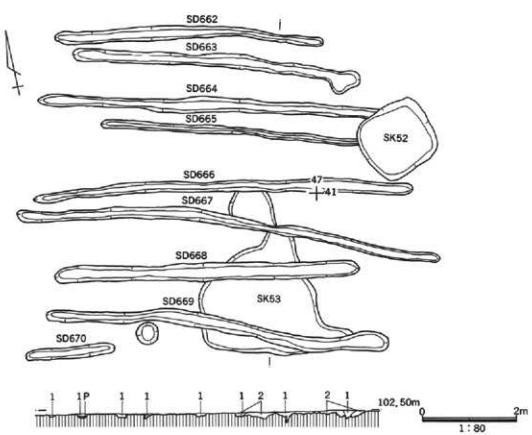
第55図　ＳＤ625出土遺物(5)

7　畝状遺構・その他（第56・57図，図版28）

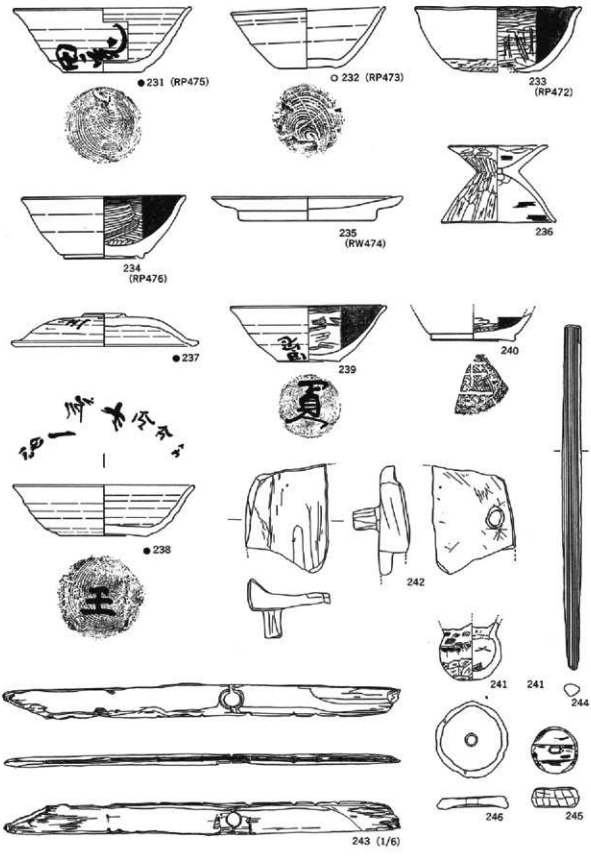
畑跡と考えられる畝状遺構はA区で8群，C区で3群を各々検出している。時期的には古墳時代と平安時代とに分類が可能である。第56図は，C区中央部の河川跡以北に検出した古墳時代の畝状遺構群である。検出長1.2～9.8m，幅20～60cm，確認面からの深さ3～9cmを測り，東西方向の基軸を持つ。遺物はSD669より古式土師器の器台（236）が出土しており，年代は竪穴住居跡群に併行する4世紀前半と考えられることから，居住区に付随するものと推定される。

性格不明遺構として登録したのは27基である。古式土師器を包含し，時期的に竪穴住居跡群と併行するA区検出のSX141，C区検出のSX165については，その出土遺物をすでに前掲した。その他，C区中央部でSX165に隣接して検出されたSX163は，隅丸台形を呈し，覆土全体に焼土を多量に混入する遺構である。

第57図は，その他一括した完形土器が出土したSD640溝跡，及び包含層出土として取り上げた主な遺物について実測図化したものである。SD640は，C区北西隅部で検出した幅3m程の溝跡である。流水方向・規模・覆土・出土遺物の様相がSD377に類似しており，その北東延長線上に位置することからSD377の延伸である可能性が高い。233は底部及び体部下半にヘラ削りを伴う内黒土師器坏で，他の出土土器に比べやや時期が溯る資料である。包含層出土の238は須恵器坏底部内面が転用硯として二次利用され，内面体部に筆を整えたと思われる墨痕や習書文字が見られる。241の土師器は器面に調整が施される小型土器，242は風字硯，243は紡錘機，246は赤焼土器坏底部を転用した紡錘車である。



第56図　C区検出畝状遺構



第57図　ＳＤ640・ＳＤ669，包含層出土遺物

表７ 遺物観察表(1)

挿図番号	遺物番号	部	種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部	調整技法 外面	内面	出土地点・層位	備考
第6図	1	土師器	小形壺	104		65	4		ハケ目→ミガキ ケズリ→ナデ	ミガキ ハケ目→ナデ	ST5 (RP215)	
	2		坏	125		(65)	4	ケズリ	ハケ目→横ナデ	ハケ目→横ナデ ミガキ	〃 (RP224)	
	3			139	50	63	5	ケズリ	ハケ目→ミガキ ケズリ	ハケ目・ケズリ→ナデ	〃 (RP221)	内外面朱塗り
	4			(160)	20	(59)	5		ミガキ	ミガキ	〃 (RP222)	
	5		器台	95	(98)	80	6		ハケ目	ハケ目・ナデ	〃 (RP226)	
	6		坩	110	32	138	5		ハケ目→ミガキ	ミガキ・ナデ	〃 (RP218)	外面二次焼成
	7		甕	119		(82)	4		ハケ目→ナデ ミガキ	ハケ目 ヘラナデ	〃 (RP219)	
	8		壺	126		(75)	6		ハケ目→ミガキ	ハケ目→ミガキ ナデ	〃 (RP214)	
	9		甑	187	37	108	4		ハケ目	ハケ目	〃 (RP213)	
	10		台付甕	143	81	207	6		ハケ目→ナデ	ヘラナデ	〃 (RP225)	
	11		甕	(170)		(150)	6		ハケ目	ヘラナデ	〃 (RP223)	
	12		台付甕		(110)	(86)	6		ハケ目	ヘラナデ	〃 (RP220)	
第7図	13		甕	(165)	71	(199)	5	ケズリ→ナデ	ハケ目	ヘラナデ ミガキ	〃 (RP216)	
	14				59	(183)	6		ハケ目→ミガキ	ヘラナデ ミガキ	〃 (RP217)	
第9図	15		高坏	(190)		(58)	7		ハケ目・ケズリ・ミガキ→横ナデ	ハケ目→ミガキ	ST7 F_1 (RP407)	
	16					(89)	10		ケズリ→ナデ	ヘラナデ	〃 〃 (PR492)	外面朱塗り
	17		甕	240	63	283	6		ハケ目 ハケ目→ナデ	ハケ目→ヘラナデ	〃 EK1 (RP409)	
	18	土製品	手捏	43	37	29	4	ケズリ	ナデ	ナデ	〃 F_2 (RP410)	
第11図	19	土師器	甕	144	60	207	6	ケズリ	ハケ目	ハケ目→横ナデ ヘラナデ	ST8 F_1 (RP412)	
第14図	20		高坏	157	143	171	4		ハケ目→ミガキ	ミガキ ヘラナデ	ST702 EK1 (RP506)	内外面朱塗り，煤付着 脚部に３単位の穿孔
	21			171	142	166	6		ケズリ・横ナデ→ハケ目	ヘラナデ ハケ目	〃 F_2 (RP468)	
	22			144	104	144	6		ケズリ→ハケ目・横ナデ	ハケ目，横ナデ	〃	外面朱塗り，煤付着脚部に３単位の穿孔
	23				144	(108)	6		ハケ目→ミガキ・横ナデ	ヘラナデ，横ナデ	〃 F_1 (RP441)	
	24				114	(60)	6		ハケ目→ミガキ	ハケ目，横ナデ，ヘラナデ	〃 〃 (RP458)	
	25			140	111	160	10		ハケ目→ミガキ	ハケ目，横ナデ	〃 〃 (RP452)	脚部に３単位の穿孔
	26		坏	(118)	20	(50)	4		ミガキ	ミガキ	〃 〃 (RP453)	内外面朱塗り
	27			111	25	66	4		ハケ目→ミガキ	ミガキ	〃 〃 (RP450)	内外面朱塗り
	28			125	28	63	5		横ナデ→ミガキ ハケ目・ミガキ	ミガキ	〃 〃 (RP457)	
	29			(83)		(40)	6		横ナデ→ミガキ	横ナデ→ミガキ	〃 〃 (RP449)	
	30			(120)	30	(60)	5		横ナデ・ミガキ→ハケ目	横ナデ→ナデ・ミガキ	〃 〃 (RP451)	
	31		小型壺	80		70	4		ミガキ ハケ目・ケズリ	ハケ目→ナデ	〃 〃 (RP464)	内外面煤付着
	32			90		(38)	4		ハケ目，ミガキ	ミガキ	〃 〃 (RP506)	二次焼成
	33			103		73	4		ミガキ ケズリ	横ナデ ハケ目	〃 〃 (RP455)	
	34			77	28	82	5		ハケ目→ミガキ	ミガキ	〃 〃 (RP461)	外面煤付着
	35			101	15	113	4		ハケ目→ミガキ	ヘラナデ→ミガキ	〃 F_2 (RP465)	
	36		器台	64	90	61	4		ハケ目，ケズリ，ミガキ	ミガキ ケズリ，ハケ目	〃 F_1 (RP457)	
第15図	37		坩	141	55	151	6	ケズリ	ナデ・ハケ目→横ナデ ハケ目→ミガキ	ハケ目→ミガキ ハケ目→ナデ	〃 〃 (RP460)	内外面朱塗り体部に沈線，下半に穿孔
	38			147	36	183	7	ケズリ	ハケ目→ミガキ	ミガキ	〃 〃 (RP462)	内外面朱塗り，煤付着
	39		甕	126	34	114	4		ハケ目→ミガキ ケズリ→ミガキ	ハケ目，ミガキ ヘラナデ	〃 〃 (RP440)	
	40		甑		46	(82)	5		ハケ目→ミガキ	ミガキ	〃 〃 (RP446)	
	41		甕		56	175	5		ハケ目，ミガキ	ヘラナデ，ミガキ	〃 〃 (RP437)	
	42		壺		66	200	5		ハケ目 ケズリ，ナデ	ヘラナデ，ミガキ	〃 〃 (RP448)	
	43			(140)	74	318	6		ハケ目 ハケ目→ミガキ	ヘラ目，ヘラナデ	〃 〃 (RP436)	
第16図	44		甕	150	56	240	5		ケズリ→ハケ目	ハケ目，ミガキ	〃 〃 (RP445)	
	45			(122)	(80)	335	5		ハケ目 ナデ	ヘラナデ	〃 〃 (RP433)	
	46				84	(256)	5	ケズリ	ハケ目	ハケ目，ヘラナデ	〃 〃 (RP438)	
	47	土製品	手捏		26	37	4		ナデ	ナデ	〃 〃 (RP454)	
	48				24	29	4		ナデ	ナデ	〃 〃 (RP463)	
	49				30	29	4		ナデ	ナデ	〃 〃 (RP456)	
	50				34	30	4		ナデ	ナデ	〃 〃 (RP460)	

表8　遺物観察表(2)

挿図番号	遺物番号	器	種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切離	調整技法 外面	内面	出土地点・層位	備考
第16図	51	土製品	手捏		32	30	4		ナデ	ナデ	ST702 F_1 (RP444)	
	52	石製品	砥石	(最大長)114		(最大幅)64		(最大厚)42			〃 F_2 (RQ471)	
第18図	53	土師器	高坏	196	144	155	6		ハケ目→ミガキ ケズリ・ハケ目	ハケ目→ナデ ハケ目→横ナデ	ST708 F_1 (RP436)	
	54		坏	116	22	54	6		ハケ目・横ナデ	ハケ目・横ナデ	〃 〃 (RP430)	
	55		小型坩	94	28	68	4		ケズリ・横ナデ	ハケ目・ミガキ	〃 〃 (RP427)	
	56				25	(80)	4	ケズリ	ミガキ ハケ目	ミガキ ヘラナデ	〃 〃 (RP425)	
	57		坩	144	23	178	4		ハケ目→ミガキ	ミガキ ハケ目	〃 F_2 (RP431)	内外面朱塗り
	58			128	28	170	5		ミガキ ケズリ	ハケ目・ナデ	〃 F_1 (RP434)	
	59		壺		76	220	5		ケズリ→ハケ目	ハケ目→ヘラナデ	〃 〃 (RP423)	
	60	石製品	砥石	(最大長)140		(最大幅)64		(最大厚)53			〃 〃 (RQ432)	
第19図	61	土師器	壺	280	150	650	12		ハケ目→ミガキ	ハケ目	〃 〃 (RP420)	口縁部棒状浮文，二次焼成
第21図	62		高坏		133	144	5		ケズリ・ミガキ	ハケ目→ミガキ ハケ目・横ナデ	ST711 EK1 (RP498)	内外面朱塗り・煤付着
	63			158		(56)	4		ケズリ→ハケ目	ミガキ	〃 〃 (RP496)	内外面朱塗り
	64		坏	92	12	48	4		ハケ目・ミガキ・ケズリ	横ナデ・ミガキ ヘラナデ	〃 〃 (RP504)	
	65		小型坩	88		54	4		ミガキ	ミガキ	〃 〃 (RP503)	
	66			(96)		73	4		ハケ目・ミガキ・ケズリ	ミガキ・ナデ	〃 〃 (RP502)	内外面朱塗り
	67		鉢		48	(60)	5		ハケ目	ヘラナデ	〃 〃 (RP502)	内外面朱塗り
	68		甕			(20)	5		ハケ目→ミガキ	ミガキ ヘラナデ	〃 〃 (RP497)	
第26図	69		坏	120	32	56	5		横ナデ ケズリ→ハケ目	横ナデ ハケ目・横ナデ	SX141 (RP81)	
	70		台付甕		108	(30)	7		ハケ目・ケズリ	ハケ目	〃 (RP71)	
	71		坩	145		169	4		ハケ目・ケズリ・ミガキ→ナデ	ハケ目・ミガキ ヘラナデ	〃 (RP70)	内外面朱塗り
	72		甕		44	(140)	5	ケズリ	ハケ目	ハケ目 ヘラナデ	〃 (RP66)	
	73			150		(140)	5		ハケ目・横ナデ	ハケ目→横ナデ ヘラナデ	〃 (RP68)	
	74		鉢	86	23	56	4		ハケ目	ハケ目・ヘラナデ	SX164 F_1 (RP481)	
	75		坏	(127)	20	(54)	5		ケズリ→ミガキ	ミガキ	SX143 (RP490)	内外面朱塗り
	76			(108)	26	65	4		ハケ目→横ナデ ハケ目・ケズリ	ハケ目→横ナデ	〃 F_1 (RP207)	
	77		器台	92	78	(50)	4		ケズリ→ナデ・ミガキ	ハケ目 ナデ	SX65 F_1 (RP186)	
	78		壺	(202)	(130)	(700)	11		ハケ目・ケズリ	ケズリ・ミサキ	〃 〃 (RP485)	
	79		小型坩			(34)	4		ケズリ・ミガキ・ナデ	ヘラナデ	ST709 F_1 (RP417)	
	80		坏		32	(52)	5		ケズリ→横ナデ	ミガキ	ST701 F_1 (RP482)	
	81		壺	(122)	68	(200)	4	ケズリ	ハケ目・ケズリ・ミガキ	ハケ目・ヘラナデ	ST164 F_2 (RP481)	
	82	土製品	土玉	(長)23		(幅)23					ST17	
第27図	83	土師器	壺	250	12	760	8		ケズリ・ハケ目→ナデ	ハケ目・ナデ	SX165 (RP484)	
第34図	84	須恵器	坏		65	(36)	4	回転糸切	ロクロ痕	ロクロ痕	SE181 (RP80)	墨書土器
	85	木製品	札	(最大長)96		(最大幅)22		(最大厚)16			〃 F_3 (RW167)	
	86		ヘラ	〃 240		〃 37		〃 7			〃 F_2 (RW164)	
	87		不明	〃 198		〃 25		〃 30			〃 〃 (RW165)	
第36図	88		井戸枠	〃 485		〃 78		〃 14			〃	
	89			〃 482		〃 146		〃 17			〃	
	90			〃 507		〃 150		〃 16			〃	
	91			〃 578		〃 120		〃 19			〃	
	92			〃 632		〃 89		〃 18			〃	
第37図	93	須恵器	坏		50	(22)	4	回転糸切	ロクロ痕	ロクロ痕	SK22 (RP52)	
	94			(140)	(64)	41	4	〃	〃	〃	〃 (RP53)	
	95			(140)	(67)	47	5	〃	〃	〃	SK901 F_1 (RP494)	墨書土器
	96		壺		90	(140)	10	〃	〃	〃	SK903 F_1	
	97		鉢		114	(78)	13	高台ナデツケ	ロクロ痕・ケズリ	〃	〃 〃 (RP495)	
	98	木製品	下駄	(最大長)227		(最大幅)81		(最大厚)20			SD78 F_2 (RW72)	
第41図	99	土師器	器台	84		99	72		ミガキ	ミガキ ハケ目・ヘラナデ	SG200 F_3 (RP501)	脚部に3単位の穿孔
	100		鉢		64	(56)	4	ムシロ状圧痕	ハケ目	ヘラナデ	〃	

表9 遺物観察表(3)

掲図番号	遺物番号	器種		計測値(cm) 口径	底径	器高	器厚	底部切離	調整技法 外面	調整技法 内面	出土地点・層位		備考
第41図	101	須恵器	坏	149	69	45	4	回転糸切	ロクロ痕	ロクロ痕	SG200	(RP60)	墨書土器
	102			(134)	66	41	4	〃	〃	〃	〃	(RP26)	〃
	103			142	54	44	4	〃	〃	〃	〃	(RP394)	〃
	104			133	68	38	5	〃	〃	〃	〃	(RP40)	〃
	105			(142)	64	43	5	回転糸切・ケズリ	〃	〃	〃	(RP12)	〃
	106			149	60	46	4	回転糸切	〃	〃	〃 F_4		〃
	107			146	54	46	4	〃	〃	〃	〃	(RP5)	〃
	108			136	58	41	4	〃	〃	〃	〃	(RP65)	〃
	109			(141)	52	39	3	〃	〃	〃	〃	(RP402)	〃
	110			142	54	38	3	〃	〃	〃	〃	(RP33)	〃
	111				58	(32)	4	〃	〃	〃	〃	(RP46)	〃
	112		高台坏	146	73	61	4	〃	〃	〃	〃	(RP399)	〃
	113			(144)	78	75	6	〃	〃	〃	〃	(RP398)	
	114			140	69	70	4	〃	〃	〃	〃		
第42図	115	赤焼土器	坏	(142)	63	44	5	〃	〃	〃	〃	(RP24)	
	116		高台坏	152	76	68	4	〃	〃	〃	〃	(RP39)	墨書土器
	117			132	74	50	4	〃	ロクロ痕・ナデ	ミガキ	〃	(RP400)	〃
	118	黒色土器	坏	(126)	68	40	4	ヘラナデ	ロクロ痕	〃	〃	(RP9)	
	119		高台坏		69	(37)	4	ナデツケ跡	〃	〃	〃 F_4		
	120			(146)	62	51	4	回転糸切	〃	〃	〃	(RP23)	
	121		皿	(128)	63	29	7	高台ナデツケ	〃	〃	〃	(RP10)	墨書土器
	122	須恵器	甕	(218)		(116)	9		格子状タタキ	青海波アテ・ハケ目	〃	(RP493)	
	123			(190)		(122)	9		平行タタキ	青海波アテ	〃		
	124	土師器		(228)		(142)	7		ハケ目	ハケ目	〃		
第43図	125	木製品	木簡	(最大長)96		(最大幅)29		(最大厚)6			〃		
	126		椀	(129)	81	(15)	5				〃 F_1	(RW29)	
	127		加工木	(最大長)130		(最大幅)37		(最大厚)13			〃 F_3	(RW205)	
	128		棒	〃237		〃16		〃15			〃 F_1	(RW36)	
	129		矢	〃179		〃20		〃16			〃 F_{10}	(RW512)	
	130		箆	189	80	72	7				〃 F_2	(RW66)	
	131		棒	(最大長)234		(最大幅)19		(最大厚)20			〃 F_1	(RW188)	
	132		加工木	〃220		〃80		〃37			〃 F_4	(RW510)	
	133	石製品	紡錘車	〃76		〃76		〃20			〃 F_1	(RQ206)	
第44図	134	木製品	加工木	〃624		〃59		〃24			〃 F_{13}	(RW515)	
	135			〃652		〃69		〃45			〃 F_8	(RW511)	
第47図	136	須恵器	蓋	156		28	6		ロクロ痕・ケズリ	ロクロ痕	SD377	(RP1)	転用硯
	137			164		33	6		ロクロ痕	〃	〃	(RP2)	〃
	138		坏	142	94	39	5	ヘラ切・ヘラナデ	〃	〃	〃	(RP158)	
	139			130	62	41	4	ヘラ切	〃	〃	〃 F_1	(RP191)	
	140			128	59	30	4	ヘラ切・ヘラナデ	〃	〃	〃 〃	(RP93)	
	141			135	58	39	4	回転糸切	〃	〃	〃 〃	(RP169)	墨書土器
	142			144	54	42	3	〃	〃	〃	〃	(RP119)	〃
	143			127	62	35	3	〃	〃	〃	〃	(RP403)	〃
	144			144	58	47	4	〃	〃	〃	〃 F_2	(RP183)	〃
	145			(136)	62	54	4	〃	〃	〃	〃 F_1	(RP200)	〃
	146			(136)	54	41	4	〃	〃	〃	〃 〃	(RP176)	〃
	147			140	67	47	4	〃	〃	〃	〃 〃	(RP107)	〃
	148			(132)	70	56	5	〃	〃	〃	〃 〃		〃
	149			133	58	55	3	〃	〃	〃	〃	(RP170)	〃
	150			137	65	32	4	〃	〃	〃	〃	(RP4)	

表10 遺物観察表(4)

挿図番号	遺物番号	器種		計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切離	調整技法 外面	内面	出土地点・層位	備考
第47図	151		坏	130	48	48	5	回転糸切	ロクロ痕	ロクロ痕	SD377 F_1 (ZP163)	
第48図	152	須恵器	高台坏		77	(71)	4	〃	〃	〃	〃 (ZP94)	暴書土器
	153		壺			(80)	5		〃	〃	〃 F_1 (ZP196)	
	154	赤焼土器	高台坏	160		71	3	回転糸切	〃	〃	〃 F_1	人面墨書土器
	155		皿	142	59	31	6	〃	〃	〃	〃 (ZP92)	
	156		甕	(136)		(94)	5		横ナデ ハケ目・ケズリ	ハケ目 ミガキ	〃 F_1	
	157			116		(79)	12		ロクロ痕・ハケ目	ロクロ痕・ハケ目	〃 〃 (ZP181)	
	158	黒色土器	高台坏	(122)	71	57	5	ナデツケ	ロクロ痕	ミガキ	〃 〃 (ZP179)	墨書土器
	159			(131)	73	50	5	回転糸切	〃	〃	〃 〃 (ZP161)	
	160		甕	(184)		(80)	5		ロクロ痕・ハケ目	〃	〃 〃	
	161	木製品	盤	176	139	13	4				〃 F_2 (ZW162)	
	162		椀	(167)	92	(53)	7				〃 (ZW103)	底部に単孔
	163		キリ	(最大長)75		(最大幅)20		(最大厚)17			〃 F_1	
第49図	164		木盾	〃 232		〃 32		〃 10			SD967 F_1 (ZW160)	両面ケズリ
	165			〃 327		〃 27		〃 4			SD377	〃
	166		札	〃 151		〃 32		〃 7			〃 F_2	片面ケズリ
	167		斉串	〃 160		〃 22		〃 5			〃	上半切り込み
	168		加工木	〃 322		〃 51		〃 12			〃	
	169		棒	〃 388		〃 21		〃 11			〃 F_2	
	170		曲物	〃 138		〃 90		〃 11			〃 (ZW159)	
	171			〃 116		〃 112		〃 6			〃 F_1	
	172	石製品	不明	(最大長)109		(最大幅)20		(最大厚)16	〃 〃			
第51図	173	須恵器	坏	(140)	56	47	3	回転糸切	ロクロ痕	ロクロ痕	SD625 F_1 (ZP310)	墨書土器
	174			(142)	49	(43)	4	〃	〃	〃	〃 F_2 (ZP302)	〃
	175			144	50	40	4	〃	〃	〃	〃 F_2 (ZP298)	〃
	176			(144)	50	(48)	4	〃	〃	〃	〃 〃 (ZP273)	〃
	177			(40)	56	39	4	〃	〃	〃	〃 〃 (ZP270)	〃
	178			138	55	41	4	〃	〃	〃	〃 〃 (ZP286)	〃
	179			144	64	47	4	〃	〃	〃	〃 F_2 (ZP325)	〃
	180			138	55	43	4	〃	〃	〃	〃 〃 (ZP337)	〃
	181			(140)	54	(45)	3	〃	〃	〃	〃 〃 (ZP324)	〃
	182			134	54	46	3	〃	〃	〃	〃 F_1 (ZP302)	〃
	183			146	48	42	6	〃	〃	〃	〃 F_2 (ZP347)	〃
	184			136	47	35	3	〃	〃	〃	〃 〃 (ZP354)	〃
	185			130	58	38	3	回転糸切→ヘラナデ	〃	〃	〃 (ZP346)	〃
第52図	186			133	52	38	3	回転糸切	〃	〃	〃 〃 (ZP366)	〃
	187			138	56	44	4	〃	〃	〃	〃 〃 (ZP382)	〃
	188			(142)	60	40	4	〃	〃	〃	〃 F_1 (ZP238)	〃
	189			(140)	54	41	3	〃	〃	〃	〃 F_2 (ZP323)	〃
	190			136	50	44	4	〃	〃	〃	〃 F_1 (ZP344)	〃
	191			135	58	39	3	〃	〃	〃	〃 〃 (ZP276)	〃，墨付着
	192			145	61	49	4	〃	〃	〃	〃 〃 (ZP322)	〃
	193			(134)	60	42	4	〃	〃	〃	〃 〃 (ZP234)	〃
	194			(150)	(70)	(43)	3	〃	〃	〃	〃 F_2 (ZP398)	〃
	195			130	58	39	5	〃	〃	〃	〃 (ZP386)	〃
	196			142	56	45	4	〃	〃	〃	〃 F_1 (ZP341)	〃
	197			148	60	37	5	〃	〃	〃	〃 〃 (ZP342)	〃
	198			(140)	58	39	5	〃	〃	〃	〃 〃 (ZP361)	〃
第図図	199			(136)	60	40	5	〃	〃	〃	〃 F_2 (ZP390)	〃
	200			144	57	48	3	〃	〃	〃	〃 F_1 (ZP337)	〃

表11 遺物観察表(5)

挿図番号	遺物番号	器種		計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切離	調整技法 外面	調整技法 内面	出土地点・層位	備考
第53図	201	須恵器	坏	143	61	45	4	回転糸切	ロクロ痕	ロクロ痕	SD625 F_2 (RP219)	墨書土器
	202			(146)	(60)	42	4	〃	〃	〃	〃 〃 (RP225)	〃
	203			143	60	49	4	〃	〃	〃	〃 F_1 (RP226)	
	204			135	62	40	5	〃	〃	〃	〃 F_2 (RP230)	
	205		高台坏	(124)	60	52	3	〃	〃	〃	〃 〃 (RP228)	墨書土器
	206			(126)	(54)	55	3	〃	〃	〃	〃 F_1 (RP227)	〃
	207			150	84	71	8	回転糸切・ミガキ	〃	〃	〃 F_2 (RP236)	〃
	208	赤焼土器			78	(57)	7	ナデソケ	〃	〃	〃 〃 (RP238)	内面及び底部煤付着
	209				66	(33)	4	〃	ミガキ	ミガキ	〃 F_1 (RP232)	
	210	黒色土器		(152)	68	65	5	回転糸切	ロクロ痕	〃	〃 〃 (RP235)	
	211		坏	(158)		(50)	5		〃	〃	〃 F_2 (RP233)	墨書土器
	212		高台坏	(124)	(70)	50	5	回転糸切	〃	〃	〃 F_1 (RP197)	〃
第54図	213	須恵器	甕	(348)		(111)	11		平行タタキ	青海波アテ	〃 F_1 (RP222)	
	214					(194)	12		〃	〃	〃	
	215					(138)	11		〃	〃	〃 F_1 (RP250)	
	216					(153)	11		〃	格子状アテ	〃 〃 (RP227)	
第55図	217	赤焼土器	坏	(136)	51	52	4	回転糸切	ロクロ痕	〃	〃 F_1 (RP242)	墨書土器
	218			(136)	58	51	3	〃	〃	〃	〃 〃 (RP245)	〃
	219		高台坏	(160)	72	73	5	〃	〃	〃	〃 F_1 (RP246)	〃
	220		坏	126	54	52	4	〃	〃	〃	〃 F_2 (RP231)	
	221			128	60	51	4	〃	〃	〃	〃 〃 (RP238)	
	222			132	50	48	3	〃	〃	〃	〃 〃 (RP237)	
	223		高台坏		73	(42)	5	〃	〃	〃	〃 F_1 (RP239)	墨書土器
	224			(148)	65	69	3	〃	〃	〃	〃 〃 (RP221)	〃
	225			(154)	70	61	6	〃	〃	〃	〃 〃 (RP275)	〃
	226		皿	(136)	57	29	4	〃	〃	〃	〃 F_2 (RP233)	〃
	227			(122)	72	23	8	回転糸切・ナデ	〃	〃	〃 〃	
	228		壺	(140)		(114)	5		〃	〃	〃 F_2 (RP232)	
	229		鉢		(78)	(62)	7	ヘラケズリ	〃	〃	〃 F_1 (RP208)	
	230		鍋			(119)	9		ロクロ痕・ハケ目・ナデ	ロクロ痕・ハケ目	〃 〃	
第57図	231	須恵器	坏	141	62	51	5	回転糸切	ロクロ痕	ロクロ痕	SD640 F_1 (RP475)	墨書土器
	232	赤焼土器		125	52	49	4	〃	〃	〃	〃 〃 (RP473)	ヘラ記号
	233	黒色土器		130	(70)	51	6	ケズリ	ロクロ痕・ケズリ	ミガキ	〃 〃 (RP472)	
	234		高台坏	128	62	49	6	回転糸切	ロクロ痕	〃	〃 〃 (RP476)	
	235	木製品	皿	151	106	19	7				〃 〃 (RW424)	
	236	土師器	器台	(80)	(90)	61	4		ハケ目・ナデ・ミガキ	ハケ目・ナデ	SD669	
	237	須恵器	蓋	138		30	5		ロクロ痕・ケズリ	ロクロ痕	38-35層	墨書土器
	238	黒色土器	坏	142	68	40	5	回転糸切	ロクロ痕	〃	42-41層	ロ，転用硯，習字
	239			(124)	50	44	5	〃	〃	ミガキ	36-47層	墨書土器
	240		高台坏		68	(22)	5	〃	〃	〃	31-44層	ヘラ書き文字「王」
	241	土師器	ミニチュア		19	(45)	5		ハケ目・ケズリ	ナデ・ミガキ	49-37層	
	242	石製品	硯	残長(87)		残幅(66)		高(48)			31-36層	
	243	紡錘車		(最大径)624		(最大幅)50		(最大厚)18			31-40層	
	244	木製品	棒	〃 272		〃 15		〃 10			42-41層	
	245			〃 37		〃 36		〃 16			21-34層	
	246	土製品		径(68)		厚(8)					36-37層	赤焼土器杯の底部転用

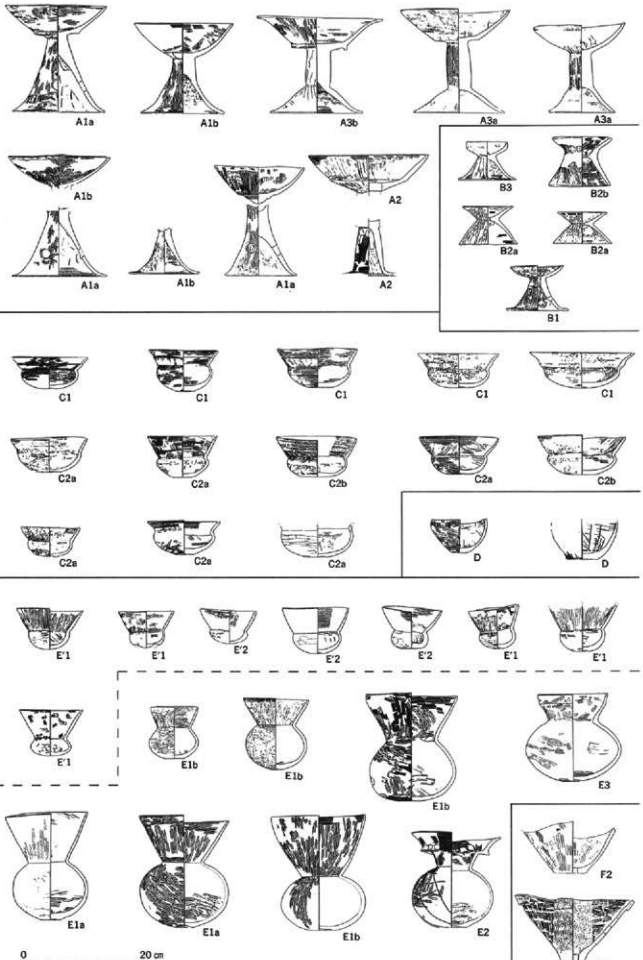
Ⅳ まとめと考察

今塚遺跡は，古墳時代前期（4世紀）と平安時代（9世紀）の複合遺跡である。調査の結果，古墳時代に帰属する竪穴住居跡30軒を主体に，旧河川跡・畑(畝)跡等が検出され，塩釜式に比定される古式土師器が一括的に出土している。平安時代では掘立柱建物跡9棟・井戸跡2基を主体に，土壙・旧河川跡・溝跡等が検出され，これらの遺構に伴う須恵器等の土器，木簡・紡織機をはじめとする木製品など多様な遺物が出土し，また墨書土器や木簡からは多くの文字資料を認めることができた。

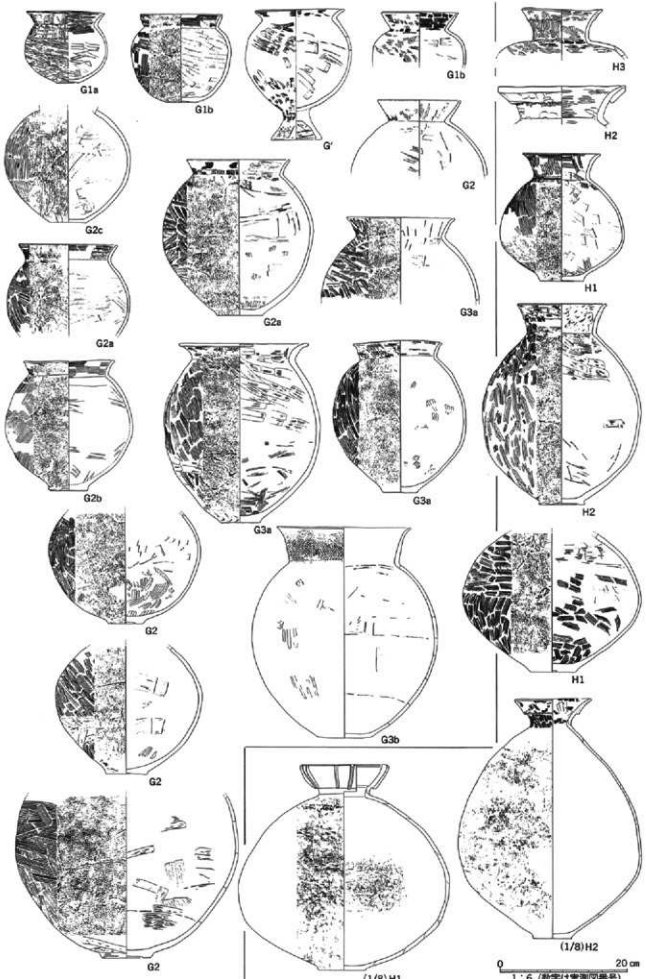
1 遺構の変遷と性格

古墳時代には，検出プランとは異なる川幅あるいは流路を示していたとも考えられる河道に沿い，その集落範囲を地形的に安定した右岸の微高地上に求めることができる。当該期の遺構は，竪穴住居跡，土壙，畑跡と考えられる浅溝状の畝跡が検出されている。調査区では確認されなかったが，ＳＴ702住居跡に遺存する竈（ＲＰ438）内から炭化米が出土したことは，明らかに稲作が行われていたことを実証するものであり，また河川跡左岸で検出された水引き用の水路跡などは，水田遺構の存在を想起させる。住居跡は，規模的な面や形状及びカマドを持たないことなど，この時代の一般例から外れるものではない。ＳＴ14等の重複関係から最低3時期の変遷が認められる。良好な遺物の遺存が焼失家屋に限られ，これらと重複する住居跡では極めて遺物量が少ないため，どの程度の時期幅があるのか等の検討ができなかった。また，住居跡相互の切り合いや規模の大小，主軸の傾きや周溝の有無などの比較要因から，ある程度の併存関係を捉えることは可能であろうが，構造的相違による先後関係は認め難い。焼失家屋７軒については，規模や方向性において異なる要素が認められるものの，出土土器の形態が類似し時期差を見い出せるものではなく，位置的関係からも同時存在の可能性は高いと考える。

平安時代になると，氾濫を繰り返した河川は砂の流入や堆積土によりほぼその機能を失い，それまで河道もしくは後背湿地であった左岸を中心として集落が営まれる様になる。河川跡右岸の古墳期遺構群には以降の重複が全く認められず，地盤的に安定した当該地をいかに利用していたか，疑問の残るところである。遺構群の配置状況から見て，居住域の中心はＳＤ377以東のＳＢ2・3等が位置する区域であると考えられ，井戸跡や土壙，畑跡が付随して一単位を構成し集落が形成される。建物跡は住居や倉庫，あるいは付属屋と考えられる９棟が認められ，ＳＢ716～718の３棟は重複している。これらは掘り方の仕様や規模，主軸方位が異なっており，何時期かの変遷過程が存在する。溝跡からは仁壽三年(853年)の年号が記された木簡が出土しており，当該期の出土土器も９世紀代が主体で10世紀まで降りるものは認められない。したがって，検出遺構の時期幅も９世紀内に納まるものである。遺跡の性格については，木簡の出土とその内容，墨書土器の一括出土と文字書体，「調所」や「書生」という文書作成に関する文字資料等々から推測して，一般農村と規定するよりは役所的な機能を備えた集落，あるいは祭祀関連の集落と想定される。



第58図　土師器集成・分類図(1)



第59図　土師器集成，分類図(2)

2 古式土師器の分類（第58・59図）

古式土師器の器種は高坏(A)・器台(B)・坏(C)・鉢(D)・坩(E)・甑(F)・甕(G)・壺(H)の８器種である。図上復元したものは大半が住居跡からの出土であり，その組成については前章に掲載したとおりである。

高坏(A)は脚部の形態から，外反しながら八の字形に広がるもの(A１)と，棒状で脚裾部がほぼ直角に開くもの(A２)，脚部上半が中実で下部は内弯しながら開くもの(A３)に３大別できる。さらに，A１類は脚部下半の穿孔の有無から細分が可能で，穿孔を有し坏部下端に稜を持つもの(A１a)と穿孔が無くやや器高の低いもの(A１b)がある。A３類は坏部の形態から体部が内弯しながら口縁に至る一般的なもの(A３a)と，体部下端の稜が強く引き出され口縁が大きく外反するもの(A３b)が見られる。

器台(B)は器高の低い小型なもので，脚部下半に穿孔を有し裾の広がるもの(B１)，X型を呈し受部～脚部に貫通孔は通るものの脚部穿孔の無いもの(B２)，貫通孔及び穿孔とも失われ受部口縁が垂直に立ち上がるもの(B３)に分類できる。さらにB２類は調整技法の差異から，ナデ・ミガキという二次調整を施すもの(B２a)と，ハケ目・ケズリの一次的な調整だけに簡略化され器面の粗雑なもの(B２b)に細分される。

坏(C)は，くの字状に開く口縁部の稜の有無により２大別（C１・C２）できる。稜を持つC１類は，丸底中央を窪めるものが多い。C２類は底部の特徴から窪み底または小平底のもの(C２a)と，底部をケズリにより作り出すもの(C２b)に細分される。

坩で法量的に小型なものは一括した。本報告書でいう小型坩と坏は，定型化した「小型丸底鉢」[1]として一括されるものであるが，器台との対応関係が明瞭なものは小型坩(E')として扱った。これらは口縁部の特徴から直立に近いもの(E'1)と，やや内弯しながら外傾するもの(E'2)が見られる。坩(E)はその形態から３大別が可能で，球形の体部に外傾する長頸の口縁部を持つもの(E1)，二重口縁を持ち外面の屈曲部が大きく引き出されるもの(E２)，比較的短い頸部に稜を持ち口縁が直立するもの(E3)がある。E１類は口縁部の外傾が直立気味なもの(E1a)と，内弯しながら立ち上がるもの(E1b)とに細分できる。

甑(F)は２点出土しており，複合口縁のもの(F1)と内外面ミガキ調整を施し形態的に有孔鉢に近いもの(F2)がある。

甕には球形胴の体部にくの字状に外反する単純口縁を持つ平底のものと，台付甕(G')がある。平底甕(G)は法量的相違が認められるものの，体部最大径と器高との相関により，最大径が器高より大きく全体的に小形なもの(G1)，最大径と器高の値が近似する球形のもの(G2)，最大径に対して器高が高いやや長胴形のもの(G3)に分類した。さらにこれらは，口縁部・口唇の形態や調整技法等の差異により細分されるが，ここでは割愛する。

壺(H)は形態的相違から，球形胴(H1)または長胴化(H2)した体下部が膨らみ最大径を下半部に有する特徴が見られ，張り付けによる複合口縁や棒状浮文を持つものが多い。

これら土器群の時期区分は塩釜式における辻氏の編年[2]でⅢ－２～３期に当てはめられる。

1) 次山　淳　「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集抜刷　1992
2) 辻　秀人　「東北（南部）Ⅰ　東北南部の古墳出現期の様相」『日本考古学協会1993年新潟大会シンポジウム2　東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993

1：3（数字は実測図番号）

第60図　墨書文字・記号集成

付　　編

「今塚遺跡　資料理科学的分析報告」

パリノ・サーヴェイ株式会社

今回の分析調査では，古墳時代前期（4世紀頃）の焼失住居跡から検出された炭化材および種子の同定を行い，当該期の住居構築材の用材選択や食用植物に関する情報を得る。同時に，炭化材を利用して放射性炭素（^{14}C）年代測定を行い，住居構築年代を確認する。また，溝の覆土を対象として花粉分析を実施し，当該期の古植生について検討する。

1．放射性炭素（^{14}C）年代測定結果

試料名	試料の質	樹　種　名	年　代 (1950年よりの年数)	Code No.
ST702	炭化材	イネ科タケ亜科の一種	2160± 80y. B. P 210 B. C.	Gak-17815
ST708	炭化材	イネ科タケ亜科の一種	1530± 80y. B. P A. D. 420	Gak-17816

2．花粉分析

(1) 試料　古墳時代前期の溝（SD604，SD629）の覆土からそれぞれ採取された試料2点である。

(2) 結果　SD604については，花粉化石が検出されなかった。SD629については，マツ属・コナラ属がわずかに2個体検出されたにすぎない。

3．種子同定

(1) 試料　ST702のRP438（壺形土器）内から検出された炭化種子である。

(2) 結果　同定の結果，すべて炭化米（イネの胚乳）であった。以下にその形態的特徴を示す。

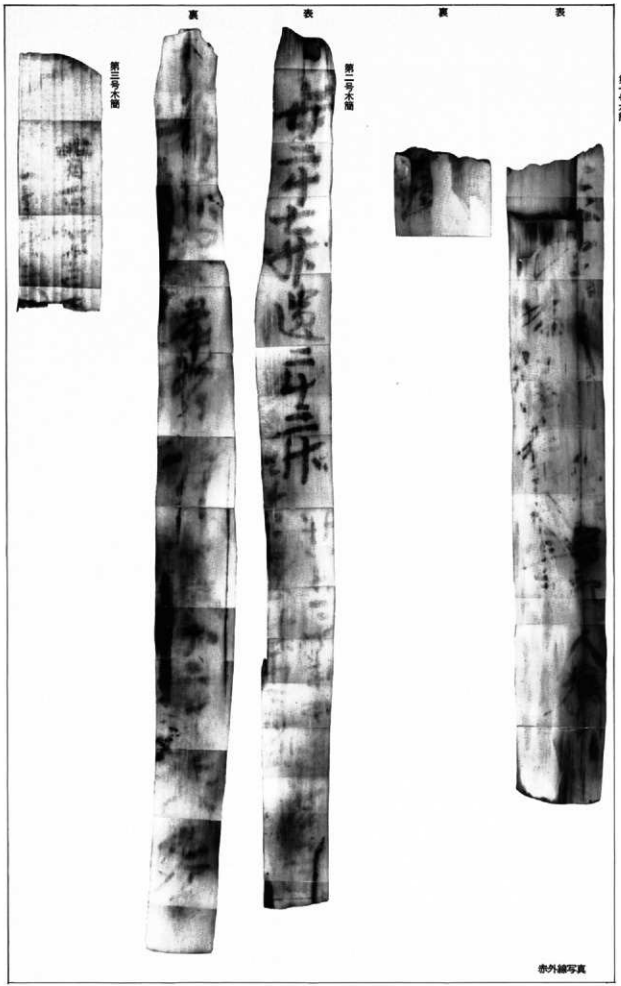
・イネ（Oryza sativa L.）　イネ科

胚乳が検出された。炭化しており，大きさは4㎜程度。胚が位置する部分は欠如して大きく窪んでいる。表面には縦に平行な隆起構造が数本認められる。炭化米は山形県でも江俣鳴遺跡や生石遺跡など数例が見られるが，今回検出されたものはこの中でも時代的に古い部類に入る。炭化米の形態は比較的小型で短粒なものがほとんどで，古墳時代出土の炭化米としては一般的な形態である。

4．炭化材同定結果

試料名	用　途	時代（放射性炭素年代測定値）	樹　種　名
ST702	住居構築材	古墳時代前期（2160±80y. B. P.）	イネ科タケ亜科の一種
ST708	住居構築材	古墳時代前期（1530±80y. B. P.）	イネ科タケ亜科の一種
ST709-1	住居構築材	古墳時代前期	サクラ属の一種
ST709-2	住居構築材	古墳時代前期	カエデ属の一種
ST714	住居構築材	古墳時代前期	アサダ
ST7	住居構築材	古墳時代前期	ハンノキ属の一種

※　パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した分析報告を抜粋したものである。


裏
表
裏
表
第三号木簡
第二号木簡
第一号木簡
赤外線写真

になっていた。兵士に差点されたものは一〇番に分かれ、各番が十日ずつ軍団の一部と考えられる。に上番することになっていた。年に三十日余の勤務ということになる。

本木簡は、「毎二斗七升遣二斗三升」と支出残高を記している点から類推すると、公廨支給に関するものかと考えられる。その場合、払田柵木簡を参照すると、酒世らの二斗四升四合は、日根八合とすれば三〇・五日分、中津子の二斗八升は三十五日分となる。これらの公廨額は、ほぼ兵士一年分（約三十日勤務）の番上根に相当するといえよう。

第三号木簡

上端および右側面は原状、左側面と下端欠損。裏面文字なし。

「七月一日始十日□」は、七月一日から十日までの十日間分の公廨の支給または請求を意味しているものと考えられる。第二号木簡と同様に公廨などの支給または請求木簡かと推測できる。

《まとめ》

一、第一号は上の役所から下の役所に宛てた命令書。命令内容は不明であるが年代が明記されている貴重な木簡である。年紀「仁寿参年六月三日」の仁寿参（三）年は八五三年。年号を記した木簡は、山形県内では川西町の遺伝遺跡木簡「寛平八年（八九六）」につぐ二例目の発見。

二、第二号に記された一人ひとりの量目（二斗八升、二斗四升四合）は、古代の役所が兵士に支給した一日の食料・米八合（現量三合二勺、〇・五六七ℓ）とすれば、ほぼ三十日分に相当する。おそらく、兵士は一年間、十日ずつ三回に分けてだいたい三十日勤務したので、その食料かと考えられる。

三、第三号も、第二号と同じ食料の支給または請求のことを記した木簡で、十日間単位に支給または請求となっている。

四、これらの木簡から判断すると、この遺跡は当時の役所（その性格は不明）

「今塚遺跡出土木簡の解説」

国立歴史民俗博物館　平川　南

《解　説》

第一号木簡

下端及び両側面は原状を止どめている。上端欠損。原状は短冊型で、その下半部が残存したのであろう。

【記載様式】「：奉行　職名＋人名

　　年　月　日　」

この記載様式から判断すると、書式は「公式令」の符式が合致する。つまり、符は所管の上級官司から被管官司に対して発せられる下達文書で、上申文書としての解に対するものである。「符到奉行」は符の実施を命ずる書止め文言、

　　（位　署）

また、本文書は「職名＋人名　となっている。解や移は位署がいずれも年月日

　　年　月　日」

の下および次行であるのに対し、下達文書の符では年月日の前に加署されるのである。「□部【人雄】の「人雄」の部分は筆が異なり、自署（サイン）と判断できる。

「仁壽」は八五一年（仁寿元年）～八五四年（仁寿四年＝斉衡元年）までの年号で、「仁壽参年」（仁寿三年）は西暦八五三年である。なお、本木簡の年号の記載のしかたは、「仁壽参年六月三日」のように、大字（参）と小字（六、三）を混用する例は、しばしば古代の文書にみえる。

本木簡は、文書内容を知ることができないが、文書の書式が符式である点、そして年代が明確に「仁寿三年（八五三）六月三日」と解読できた点、極めて貴重な史料の発見と言える。

第二号木簡

上・下端欠損。片面は天・地両方向から記載しているが、文字の重なりはみられない。墨痕は濃淡の差が著しいが、これは遺存状況によるのではなく、天方向（正位）をまず濃い墨で記し、そのうちに薄い墨で、地の方向（倒位）から記載したと判断できる。内容も加味するならば、一連の記載とみておくことができよう。

「毎二斗七升」＋「遺二斗三升」＝五斗、五斗＝「倹のうち、「〇〇毎二斗七升」を支出、その遺（のこり）二斗三升という意味である。倒位の部分は、〝人名（名のみ＋署目〟の記載となっている。酒世（さかよ）二斗四升四合、〇〇（人名）二斗四升四合、中津子（なかつこ）二斗八升。

この木簡の内容は、秋田県仙北郡払田柵跡出土の次の木簡が参考になると考えられる。

第三号木簡（秋田県払田柵跡調査事務所「払田柵Ⅰ　政庁跡」一九八五年）

・口　十火　大粮二石八斗八升

・口　二斗八升二合

内容は公粮の請求文書かと考えられる。出羽国の兵士は一団一千人である。兵士は令制の建前では食糧自弁とされたが、『三代実録』元慶五年（八八一）三月二十六日条によれば、元慶四年以前に出羽国二城（秋田城、雄勝城）の兵士一千人は日　八合の番上粮を支給されていたことがわかる。この木簡は兵士十火＝一〇〇人とすれば、人別二升八合八勺、日数にして三・六日分の請求額となる。

軍防令兵士簡点条によると、兵士は同戸のうち三丁ごとに一丁をあてること

報告書抄録

ふりがな	いまづかいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	今塚遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第7集
編集者名	須賀井新人・植松暁彦・黒坂広美
編集機関	財団法人　山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999−31　山形県上山市弁天二丁目15番1号　TEL　0236−72−5301
発行月日	西暦　1994年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
今塚（いまづか）	山形県山形市大字今塚（やまがたけんやまがたしだいじいまづか）	6201	136	38度17分19秒	140度19分29秒	19930531〜19931112〜	14,200	宅地造成及び分譲住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今塚	集落跡	古墳時代前期	竪穴住居跡　30軒 土壙　2基 畝状遺構　2群 河川跡　1条	古式土師器（高坏等） 木製品 石製品（管玉1点，砥石）	7軒の焼失家屋より塩釜式の土器が一括出土
		平安時代	掘立柱建物跡　9棟 井戸跡　2基 大型土壙　20基 溝跡　5条 畝状遺構　5群	須恵器（坏，甕） 赤焼土器（坏，甕） 黒色土器（坏） 石製品（硯，紡錘車） 木製品（木簡3点，紡織機，椀，皿）	木簡が3点出土し，「仁寿参年（853年）」の年号が付されている。 溝跡より墨黒土器が一括出土

図　　版

調査区遠景（南より）

「今塚の地名発祥の地」碑（南より）

B区設定状況（北より）

重機導入，粗掘状況（北より）

グリッド杭設定状況（西より）

A区北半部面整理作業（南より）

A区北東半部遺構精査状況（南より）

SD377溝跡掘下げ状況

SG200河川跡記録作業

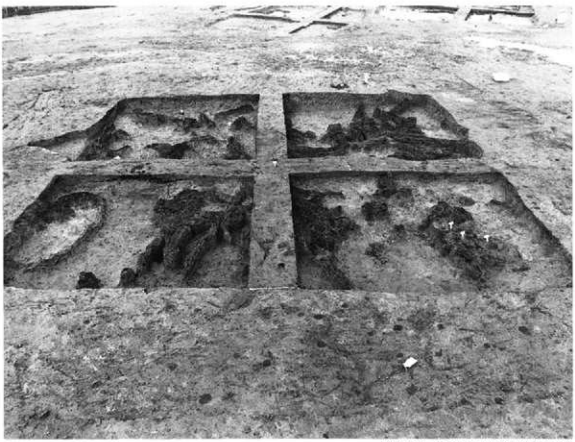
現地説明会

A区中央部遺構検出状況（南より）

A区中央部完掘状況（南より）

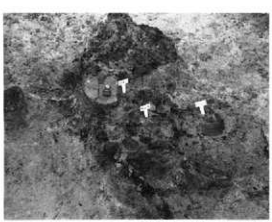
B区北半部完掘状況（西より）

B区南半部完掘状況（西より）



炭化材，遺物出土状況（南より）

炭化材出土状況



炭化材，遺物出土状況

ＥＢ１，ＲＰ491出土状況

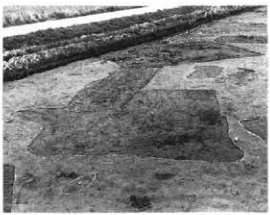
完掘状況（西より）
ＳＴ７

ＳＴ８土層断面（南より）

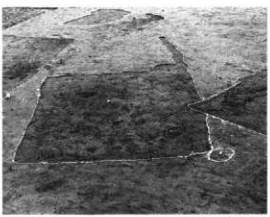
ＳＴ８遺物出土状況

ＳＴ９，10検出状況（南より）

ＳＴ９，10土層断面（南より）

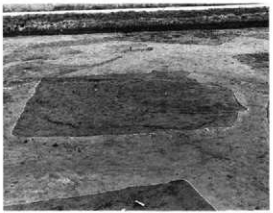


ＳＴ12検出状況（西より）

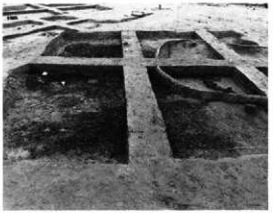


ＳＴ13検出状況（西より）

ＳＴ13完掘状況（西より）



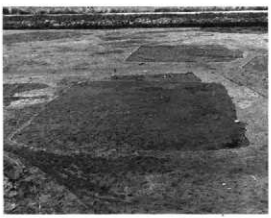
ＳＴ14，15検出状況（南より）



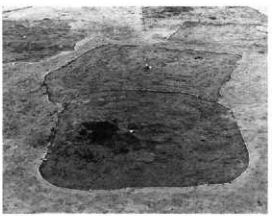
ＳＴ14土層断面，炭化材出土状況（南より）

ＳＴ14炭化材出土状況

ＳＴ14，15完掘状況（南より）

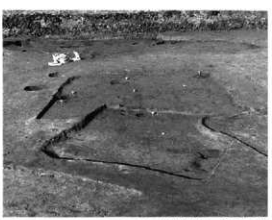


ＳＴ16，17検出状況（南より）



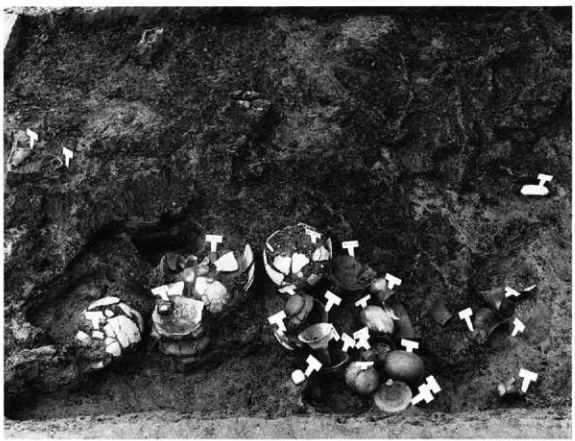
ＳＴ18，19検出状況（南より）

ＳＴ18，19土層断面（南より）



ＳＴ20，701完掘状況（南より）

炭化材，遺物出土状況（西より）



遺物出土状況
S T 702

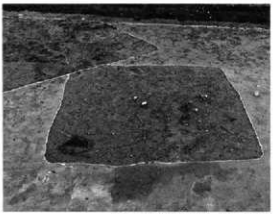
検出状況（南より）

遺物出土状況

遺物出土状況

ＥＢ１遺物出土状況（南より）

完掘状況（西より）
ＳＴ702



ＳＴ703検出状況（南より）

ＳＴ704，705検出状況（南より）

ＳＴ704完掘状況（東より）

ＳＴ705完掘状況（南より）

ＳＴ706検出状況（南より）

ＳＴ709検出状況（南より）

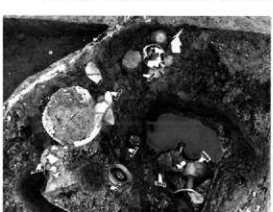
ＳＴ709炭化材出土状況（南より）

ＳＴ709完掘状況（西より）

ＳＴ708炭化材，遺物出土状況（西より）

ＳＴ707，708，709検出状況（南より）

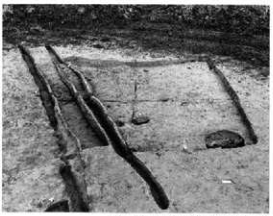
ＳＴ708炭化材，遺物出土状況（西より）



ＳＴ708ＥＫ１遺物出土状況

ＳＴ707，708完掘状況（西より）

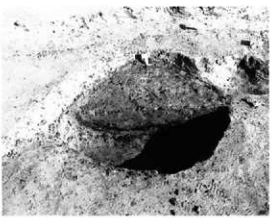
ＳＴ710完掘状況（南より）



ＳＴ711完掘状況（南より）

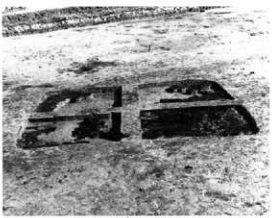
ＳＴ711，ＥＢ１完掘状況

ＳＴ712検出状況（南より）

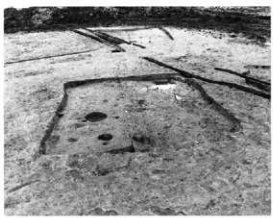


ＳＴ712，ＥＢ１土層断面

ＳＴ713土層断面（南より）



ＳＴ714炭化材出土状況（西より）



ＳＴ714完掘状況（南より）

ＳＴ164土層断面（南より）

ＳＴ164完掘状況（東より）

ＳＸ141土層断面（南より）

ＳＸ141遺物出土状況

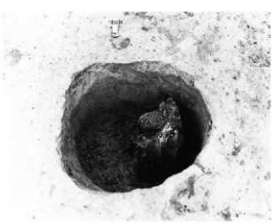
ＳＸ141遺物出土状況

ＳＸ163，165検出状況（西より）

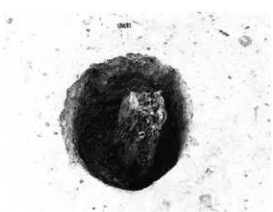
ＳＸ165土層断面（南より）

ＳＸ165遺物出土状況

完掘状況（南より）

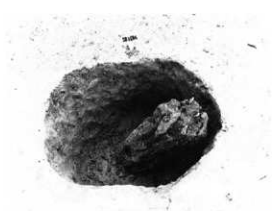


ＥＢ１完掘状況



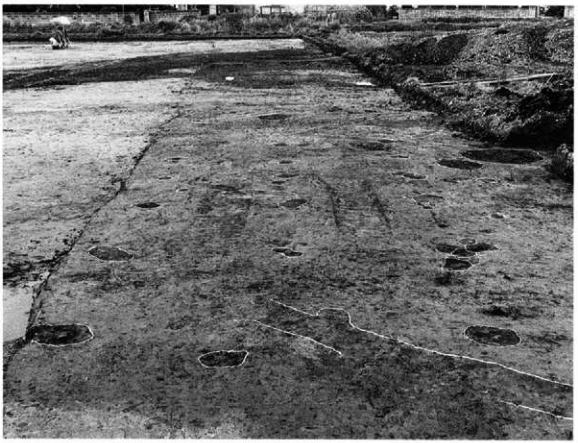
ＥＢ２完掘状況

ＥＢ３完掘状況



ＥＢ６完掘状況

ＳＢ１



ＳＢ２検出状況（南より）

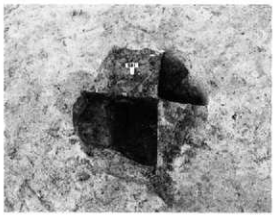
ＳＢ３完掘状況（南より）

ＳＢ６完掘状況（南より）

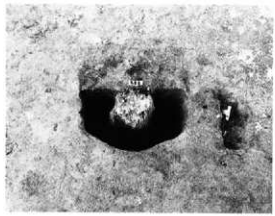
ＳＢ715完掘状況（南より）

SB716~718検出状況（南より）

SB716~718完掘状況（南より）



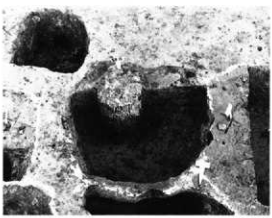
EB 1



EB 2

EB 5

EB 6



EB13

EB14

EB15

EB16
SB716

半截状況（南より）

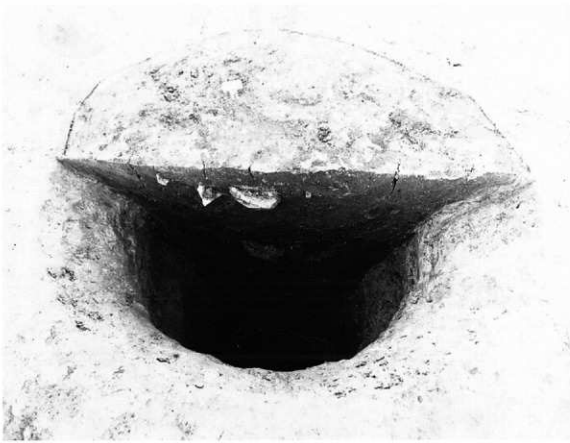
半截状況（南より）

半截状況（南より）

井戸枠内板材敷状況（南より）

井戸枠内遺物出土状況
S E 181

ＳＥ181完掘状況（南より）



ＳＥ906半截状況（南より）

ＳＫ40土層断面（南より）

ＳＫ148土層断面（南より）

ＳＫ475完掘状況（南より）

ＳＫ477完掘状況（南より）

ＳＫ901完掘状況（南より）

ＳＫ903完掘状況（南より）

ＳＫ905半截状況（南より）

ＳＫ912半截状況（南より）

検出状況（東より）

中央部土層断面（東より）
S G200

東半部土層断面（西より）

ＳＤ377東半部土層断面遺物出土状況（西より）

Ａ区東端部遺物出土状況（南より）

Ａ区，遺物出土状況

F_{8}下位層遺物出土状況

F_{16}層遺物出土状況

南端部水路板材出土状況（南より）

南端部水路，板材出土状況（南より）
ＳＧ200

遺物出土状況（南より）

遺物出土状況（南より）

検出状況（南より）

遺物出土状況（ＲＰ104～109）

遺物出土状況

遺物出土状況
ＳＤ377

一括遺物出土状況

土層断面一括遺物出土状況（南より）

遺物出土状況

一括遺物出土状況

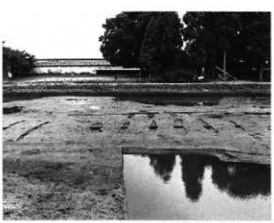
完掘状況（南より）
S D625

ＳＫ78土層断面（南より）

ＳＤ640土層断面（南より）

ＳＤ81土層断面（西より）

ＳＤ390土層断面（東より）



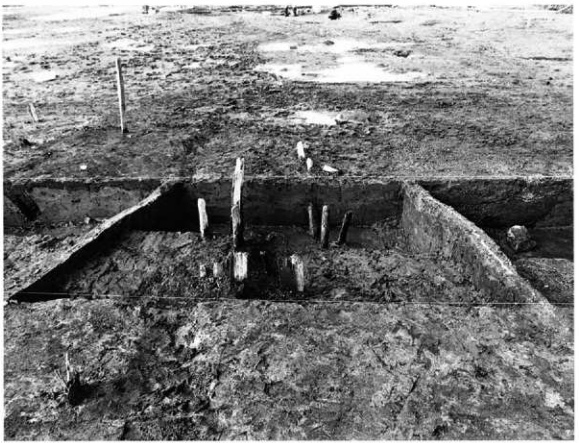
ＳＤ312～320土層断面（南より）

Ｃ区中央部畝状溝跡（西より）

ＳＸ143下位層畝状溝跡土層断面（北より）

ＳＸ143下位層畝状溝跡検出状況（北より）

検出状況（北より）



土層断面（南より）
B区排水路

出土遺物(1)

75

29

99

27

64

77

28

54

236

26

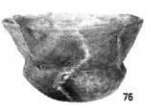
69

5

4

80

35


76

30

74

2

3

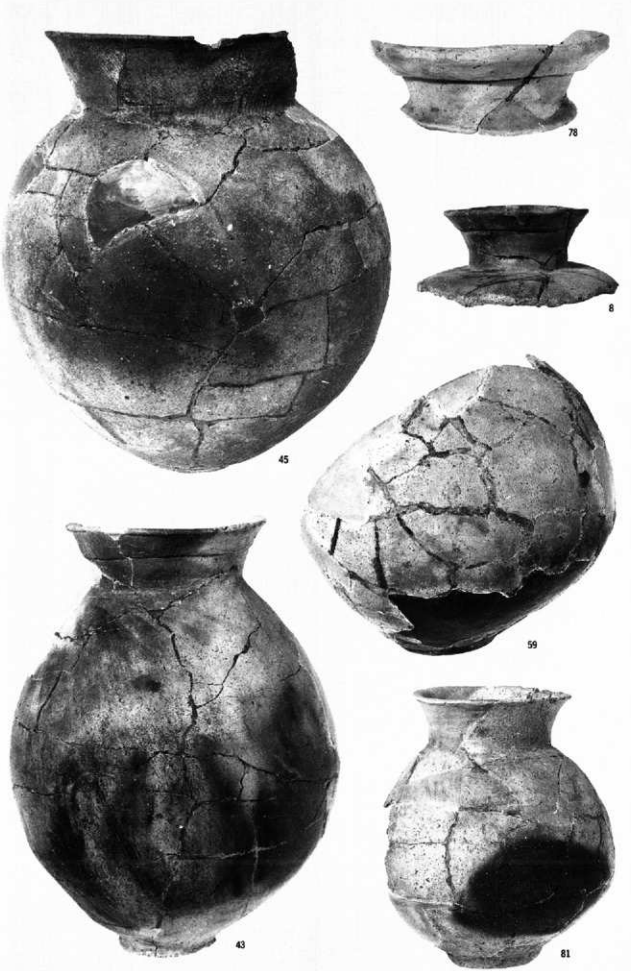
67

出土遺物(2)

出土遺物(3)

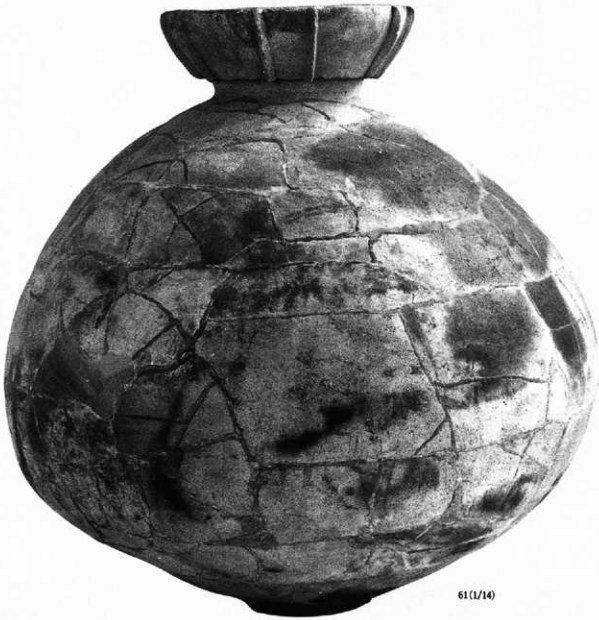
出土遺物(4)

13
14
41
19
17
42

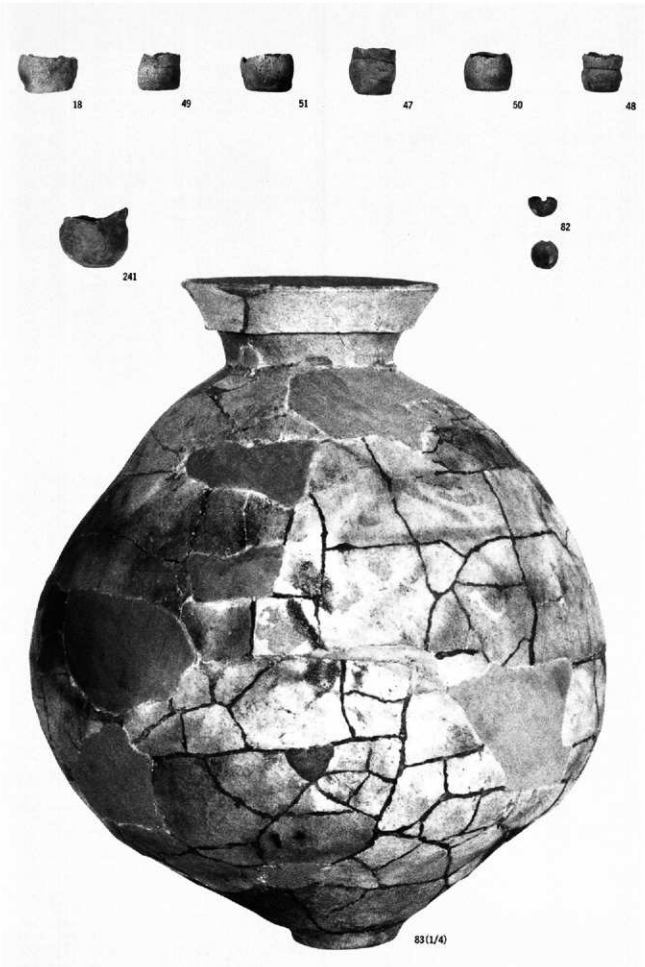


出土遺物(6)

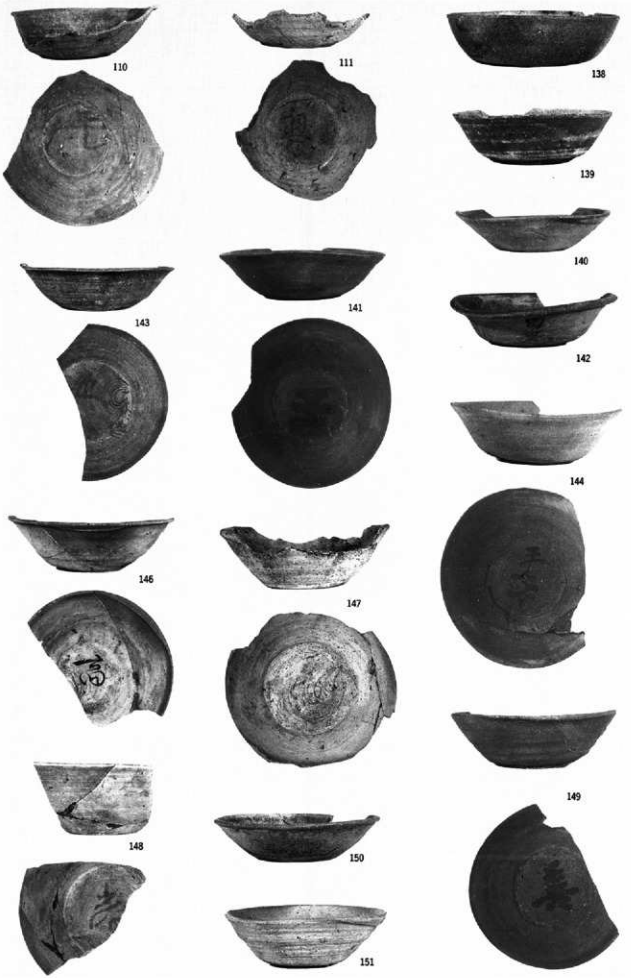
46



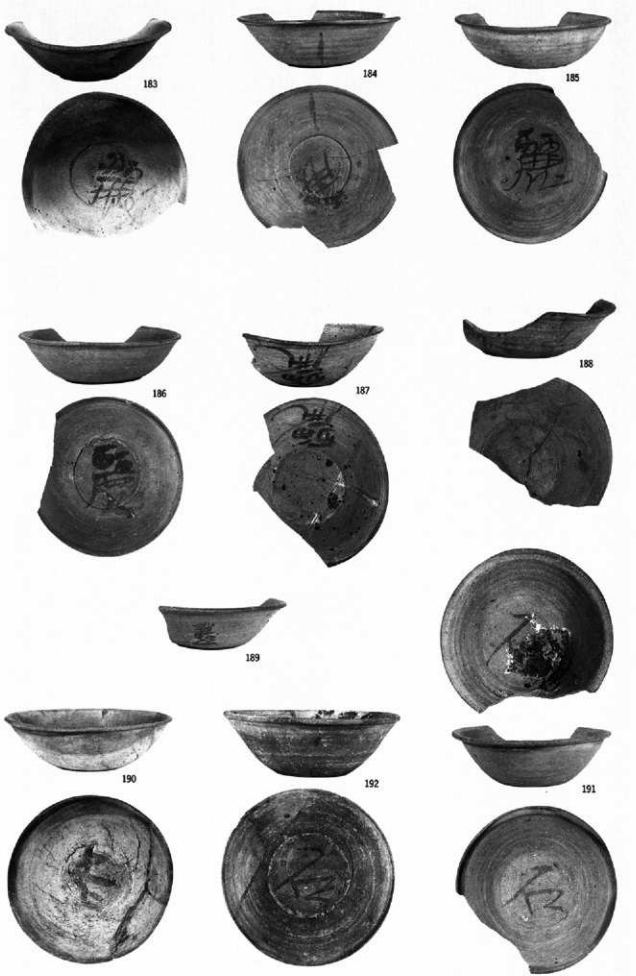
61(1/14)

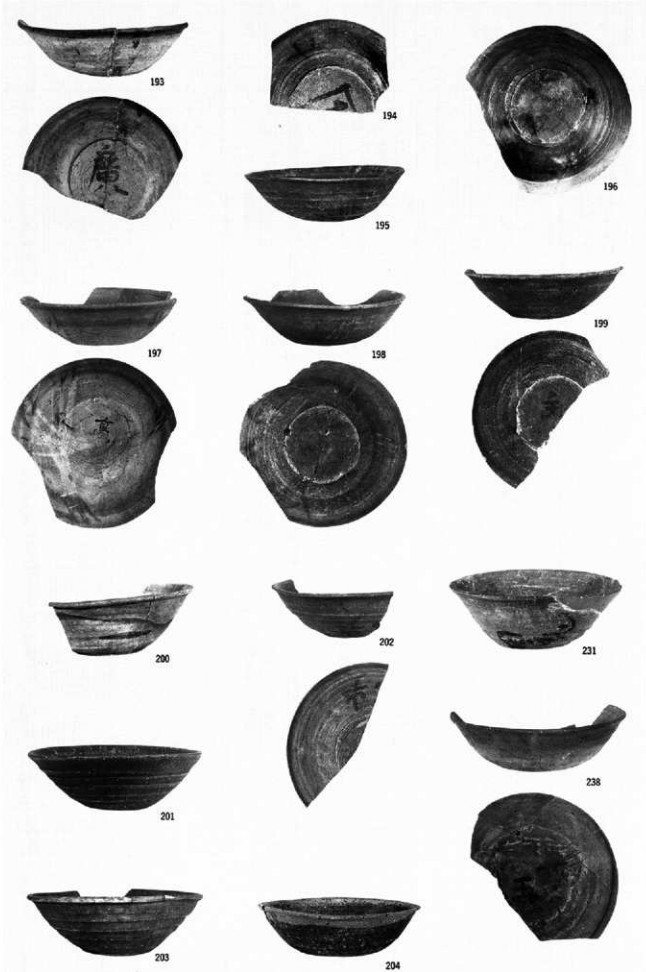

18
49
51
47
50
48
82
241
83(1/4)

136
137
237
84
93
94
95
101
102
106
104
103
105
109
107
108


110
111
138
139
140
143
141
142
144
146
147
149
148
150
151

173
174
175
176
177
178
179
180
181
182


183
184
185
186
187
188
189
190
192
191


193
194
196
195
197
198
199
200
202
231
201
238
203
204

112

113

114

152

205

206

207

123

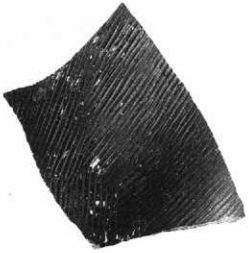
122

153

213

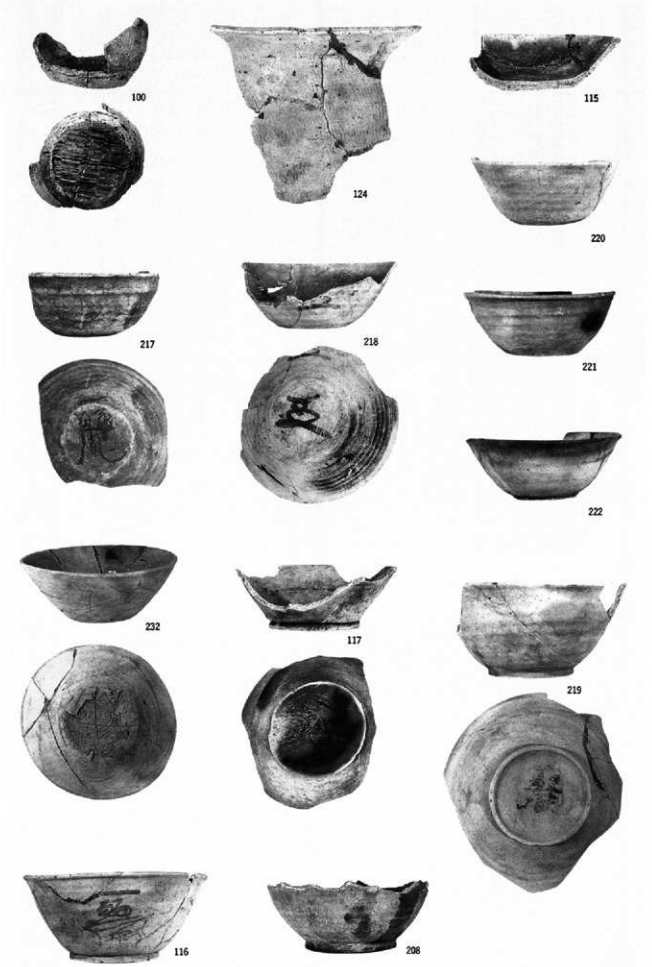
96

216



214

215


100
124
115
220
217
218
221
222
232
117
219
116
208

223

224

225

155

226

227

156

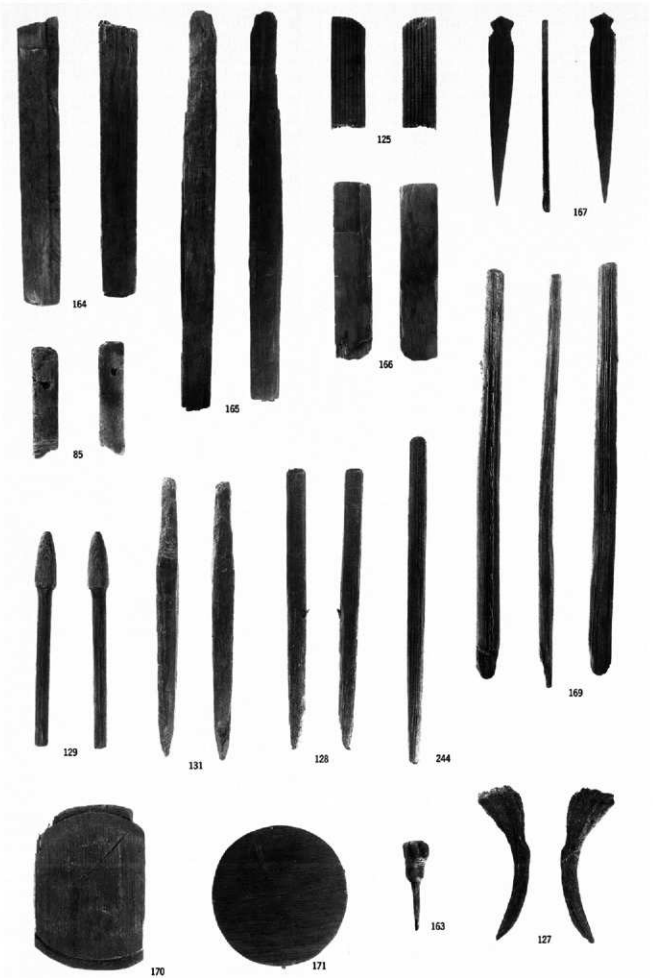
228

157

229

230

209
118
120
240
239
233
158
119
159
212
234
210
121
211
160


164
165
125
167
166
85
169
129
131
128
244
170
171
163
127

126

161

235

130

162

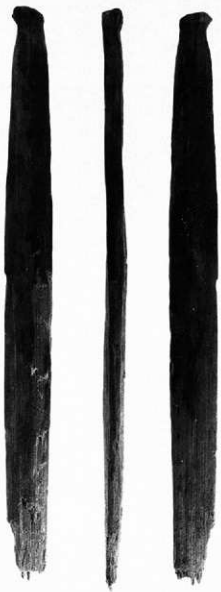
132

86

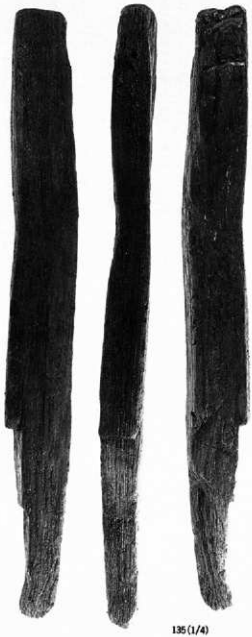
168

98

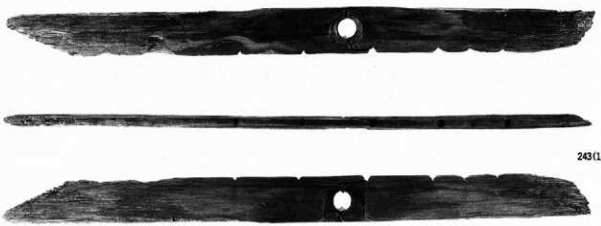
87



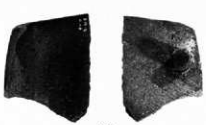
134(1/4)

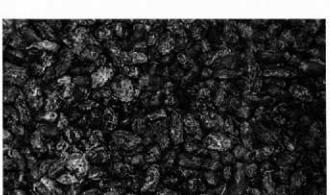


135(1/4)



243(1/4)





ＳＴ702住居跡ＲＰ438層内出土炭化米

※パリノ・サーヴェイ株式会社撮影

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第７集

今塚遺跡発掘調査報告書

1994年３月31日　発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999－31　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　0236－72－5301
印刷　㈱大風印刷